

参考資料

イツハク・カツェネルソン 作品

細見 和之 訳



『夢においても、目覚めにおいても』より

1. イスラエルの地の宝物
2. 夢においても、目覚めにおいても
3. ひ と

戯曲『バビロンの河のほとりで

— 4幕による、聖書にもとづく民族の悲劇 —』

イスラエルの地の宝物

(1)

おばあさんが病気になりました。お父さんはお医者さんをお呼ぼうと思いましたが、おばあさんは反対しました。おばあさんはお父さんをベッドに呼んで、こう言いました。

「ユダヤ人がイスラエルの地からやって来たと聞きました。そのひとを招いてください。そのひとなら、私のところにやって来て、私の病気を治してくれます」

みんなは、イスラエルの地からやって来たユダヤ人を呼びました。夕方にそのユダヤ人は私たちの家にやって来ました。そのとき私の家には、父、祖父、それによい隣人のラビ・ピネハスさん、ラビ・モーセさんがいました。そのユダヤ人が入ってきました。私たちは、おばあさんが眠りから目覚めるまですこし待ってほしい、とそのひとにお願いしました。イスラエルの地からやって来たユダヤ人は笑ってこう言いました。

「彼女に必要なのは私ではなく、私がイスラエルの地から私と一緒に持ってきたよい宝物です」

私たちは驚いて、腰をおろし、口を閉ざしましたが、すべての眼はこう言っていました。

「その宝物とはなんですか？」

(2)

そのユダヤ人は小さな袋を取り出し、それを手で揺すりました。「さあ、みなさんは、この小さな袋のなかにいったいなにが入っていると思いますか？」

私たちはその袋のなかになにが入っているか知っていましたが、黙っていました。すると、そのユダヤ人もすこし沈黙してから、こ

う叫びました。

「私たちの母、ラケルの墓から取ってきた、すこしの砂です！」

しかし、そのユダヤ人が彼の口からその言葉を発すると、私たちの眼はまん丸に大きく見開かれました。そのとき、そのユダヤ人は彼の鞆を開けて、そこから、ハヴダラの祈りのための美しい香料の箱と壮麗な祈祷書を取り出しました。その祈祷書のうえ、香料の箱のうえには、活字でまさしくこう書かれていました。「エルサレム」。私たちはそれを繰り返し見つめました。私たちの眼は見飽きるということがありませんでした。

(3)

しばらくして、おじいさんがこう言いました。

「どうやら、私のばあさんが眼を覚ましたようです。よきユダヤ人のかたよ、よろしければ、部屋へ寄っていただけませんか」

そのユダヤ人はこう答えました。

「はい、私はあなたがたにこう言いました。“彼女に必要なのは私ではなく、私がかの地から持ってきたよい宝物なのです”と。この砂からすこし取って、おばあさんの頭の下に置いてください。そして、この祈祷書であなたが祈り、この香料の箱で香りを嗅いでください。そうすれば、おばあさんの病気は治るでしょう」

そのようにそのひとは語り、そのとおりにみんなは行いました。

その後、おばあさんは1週間で病気が治りました。ほんのときおり、お医者さんがおばあさんのところにやって来ましたが、おばあさんはこう言います。

「お医者さまでも薬でもなく、イスラエルの地からの宝物、それこそが私の病気を治してくれたのです」

夢においても、目覚めにおいても

(1)

お父さんが祈りの家からお客さんを一緒に連れてきました。シャバットのお客さんです。

幼いヨシフンはお客さんのほうを見ました。すると、その顔はひどく褐色に日焼けしていて、そのひとはヘブライ語を話します。

ヨシフンは小声でお父さんにたずねました。

「あのお客さんはどこから来たの？」

「あのかたはイスラエルの地からやって来たのだよ。エルサレムのひとだよ」

そのとき、ヨシフンは叫びました。「ああ、なぜあのひとがあんなに日焼けしているのか、なぜヘブライ語を話すのか、やっと分かった——あのひとは、私たちの地からやって来たんだ！」

(2)

みんながテーブルに腰かけて、食事をしていました。飲み物を飲んでいるときに、お父さんが幼いヨシフンに語りかけました。

「ヨシフン、シャバットの讃歌から、私たちに何か歌を歌ってくれないかい？」

ヨシフンは答えて言いました。

「まず、お客さんに、イスラエルの地について、私たちに話してもらおうよ」

お父さんは叫びました。

「ヨシフン、お前の言うことが確かにただしい。お客さんに、祖先の地について、何か話していただこう」

お客さんは笑って、ヨシフンのほっぺを軽くつねって、かの地についての不思議な話を語りはじめました。

家族の全員が、そして彼らとともにヨシフンが、お客さんの言葉に、黙ってじっと耳を傾けていました。みんなの心臓はドキドキし、眼は大きく、大きく、見開かれていました。

ああ、これこそイスラエルの地なんだ——ヨシフンは心のなかで叫ぶと、椅子から立ち上がりました。

(3)

「ヨシフン、どこへ行くんだ、どこへ？」とお父さんが彼にたずねました。

「イスラエルの地へ行きます、歩いて行きます」

お母さんが笑って言いました。

「でも、あなたは道を知らないでしょう！」

「ぼくはすこし知っているよ！」とヨシフンは答えました。「東のはずれ！ 太陽の昇るところ、そこにこそイスラエルの地があるんだ」

家族のみんなが笑いましたが、お父さんはみんなを静かにさせて、

053

こう言いました。「お前はイスラエルの地へ歩いてゆく、それでは私たちは——近くの森へ行ってみよう。さあ、一緒に行こう！」

ヨシフンはうなずいて、みんな一緒に出かけました。

(4)

イスラエルの地は家から遠いところにありましたが、森も近くにはありませんでした。

その森へみんなは向かってゆきました。みんなはくたびれて、木々の根元に腰をおろして休みました。

ヨシフンはさらに歩きたいと思って、お父さんにこう言いました。「お父さんもすこし休んで、それから先へゆくのでしょうか？」

幼いヨシフンはみんなと一緒に腰をおろし、頭を母さんのおなかに乗せて、眠りこみました。

(5)

目を覚ますと、ヨシフンは自分の家のベッドにいました。ベッドから飛び降りて、顔を洗い、身支度を整えて、食堂に入りました。すると、家族全員が食卓について、朝ごはんを食べています。みんなが笑って、こう言いました。

「ヨシフン、どこから来たんだい、どこから？」

ヨシフンは答えて言いました。「みんなほくに“シャローム”と言わなくちゃ。ほくはイスラエルの地からやって来たんだよ！」

お父さんは笑って言いました。「なるほど、お前はベッドにいて、眠っていたんだ！」

それに答えてヨシフンは言いました。

「眠っていたのも本当だけど、夢を見てもいたんだ。その夢のなかで——ほくはイスラエルの地にいたんだ。みんなが聞きたいなら、ほくが見たもの、聞いたものをみんなに話すよ」

「みんな、聞きたいよ！ みんな、聞きたいよ！」

家族の全員が叫びました。そして、あのお客さん、エルサレムからやって来たあのひとも、聞きたがりました。

そこで、ヨシフンは語りはじめました。みんなじっと耳を傾けていました。家族の全員が、黙って、聴き入っていました。みんなの心臓はドキドキし、眼は大きく、大きく、見開かれました。ヨシフンが話し終えたとき、お客さんが叫びました。

「私は誓って言いますが、この子はまるでイスラエルの地からやって来たかのようにです。夢であれ、目覚めた状態であれ、あれこそがイスラエルの地です」

(1)

ハヌカ祭^{*1}の最初の夜、町に雪が降っていました。屋根の上にも、塀の上にも、雪は降っていましたが、野原ではもっと激しく降っていました。そこでは雪がどんどん積もっていました。白くて、きよらかで、やわらかな雪です。

あの黒い目の少年、ベン＝ツィオンが、同じ夕方、彼の家の近くの野原にいました。彼のほかに、彼の友人たちがいました。彼らはそのあとしばらく、やわらかできよらかな雪の絨毯のうえで転げまわっていました。ベン＝ツィオンはその集団のリーダー役のようで、「ベニー」と綽名で呼ばれていました。そのベニーが起き上がって言いました。

「さあ、ひとを作ろう！」

みんなに「作ろう！」と言いながら、実際に作っているのは彼自身というのが、ベニーの性格です。そういうわけで、その「ひと」も彼がひとりで作りました。彼が雪をこねて作りあげて、形を整え、そのひとを立たせました。友人たちは彼の近くで手伝っただけです。みんなは手にいっぱい雪の玉を、彼の方に持ってきました。寒さで赤く腫れあがった手で、彼らは雪の玉を彼のほうに運んできたのです。彼らはベニーのために、雪の山をつぎからつぎへと集めてきました。そのあと、彼らはベニーのそばに立って、指先を唇のなかに入れて、熱い口の息を指先に吹きつけながら、じっとして「ひと」が作られてゆく様子を見つめていました。ベニーがそのひとを立たせたあとで、彼の友だちのヨセフがベニーのほうに眼をむけて、こう言いました。

「もしも、このひとにきみが〈聖なる名前〉をつけることができれば、そして、このひとの体にその名前呼びかけることができるなら、

きっときみの言うことを聞いて、きみのために火のなかでも水のなかでもくぐって、きみのして欲しいことなら何でもしてくれるのになあ」

「ヨセフ、何を言っているんだい？　どんな名前だい？」

ベニーは問いかけましたが、驚いて、彼の両目はランランと輝いていました。

「聖なる名前だよ、もしもきみに聖なる名前が思い浮かんでいるのならなあ……」

幼いヨセフは、家でお父さんが話しの終わりにため息をつくときとそっくりのため息をついて、言葉を終わえました。

夕暮れがどんどん進み、あたりは暗くなり、子どもたちはみんな急いで家へ帰ってゆきました。そして、野原のうえには、白いあのひとだけが残っていました。

(2)

ベニーは家に駆け足で帰りました。「おじいさん、いる？」

おじいさんはまだ家にはいませんでした。おじいさんはまだシナゴグでの午後の祈り「ミンハー」と夕方の祈り「マアリブ」から戻ってはいませんでした。けれども、お父さんが窓のそばに立って、ハヌカ祭の最初のろうそくに火をともししていました。

ベニーはすこしのあいだ、きょうがハヌカ祭だということをすっかり忘れていて、お父さんのほうにその黒い両目を向けていました。「家のなかで、火をともしされたメノラーが光っていて、窓にろうそくがぼんやりと映っている、どうして？」

すると、お父さんはベニーに気づいて、とてもうれしそうな顔を彼に向けて、こう叫びました。

「ベニー、こっちに来て、ハヌカのろうそくをどんなふうに祝福するか、見ていておくれ」

「分かったよ！」ベニーはうれしそうに叫びました。「きょうはハヌカ祭なんだ。なのに、ぼくはすっかり忘れていたよ。……ああ、ぼ

くはこのハヌカ祭が大好きなんだ。ハヌカの祭の日がいちばんいいよね！」

「どうしてだい？ ハヌカのろうそくに火をともしからかい？」

ベニーは答えて言いました。「ハヌカのろうそくのせいだけではないさ。たしかに、ヘブライ人の窓のところでちらちら燃えている小さな炎はきれいだけれど、ぼくが言ったのはそのことじゃないよ」

続けてお父さんは彼にたずねました。「じゃあ、いったいどんな理由からだい？ ひょっとして、私から受け取るハヌカの小遣いのせいかい？ それとも、お前がハヌカ祭を好きなのはレビバー〔ハヌカ祭で食べるじゃがいもの揚げ物〕のせいかい？ それとも、祭の日にお前が遊ぶコマのせいかい？」

「違うよ」とベニーは叫びました。「その三つはそれぞれ大事だけれど、ぼくが考えていたのは別のことだよ」

「じゃあ、どんなことを考えていたんだい？ どうか私に言っておくれ」

お父さんは興味深げに尋ね、また笑いもつけくわえました。

ベニーは背すじをぴんと伸ばしてお父さんと向かいあって立ち、これらの言葉でお父さんに答えました。

「ハヌカ祭はこんなふうに寒くて、雪が降って、スケートのできる場所があるからです！」

すると、お父さんは唇に微笑みを浮かべてこう叫びました。「お前はそんなことを考えていたんだ」

そのすぐあとに、ドアが開かれ、おじいさんが家に入ってきました。うめきながら、せきこみながら、おじいさんはつぶやきました。「おお！ やれやれ！ ああ！」

「お父さん、どうしたんですか？ どうしてそんなにため息をついているのです？」

ベニーのお父さんは自分の父親に尋ねました。

「ああ、やれやれ、ハヌカ祭だ！」おじいさんは、口から吐き出すようにして言い、外套を脱ぎ捨てました。「これこそがハヌカ祭だ、何

も不平を言うことはない。しかし、この寒さ、この雪、それにツルツルの地面だ」

ベニーは、おじいさんの言葉に、二つの黒い目を大きくして、驚きました。「ああ、おじいさん、その三つのものよりもよいものがこの世にあるでしょうか？」

(3)

ベニーは自分の前に置いてある夕飯を急いで食べると、テーブルから立ち上がって、もう一度外へ出て行こうとしました。お母さんがそれにすぐに気づいて、彼のことを思って引きとめました。「ベニー、どこへ行くの？ もう夜で、外は真っ暗ですよ。もうすぐに眠る時間ですよ」

ベニーはお母さんのまえでお願いをはじめました。「お母さん、どうか、かまわないでください、向こうでぼくを待っています」

058

「どこであなたを待っているの？」

「すぐそこだよ、野原のところだよ」

「野原でいったい誰があなたを待っているの？」

「ひとがぼくを待っているのさ」

「どんなひと？」

「ぼくのひとだよ」

「あなたのひと？ おかしなことを言うのね」

「ぼくが作ったひとだよ。ほら、雪だるまさ。向こうでぐずぐずしないで、すぐにお母さんのところに戻ってくるよ」

お母さんはベニーの気持ちが分かりました。野原へ行きたくて仕方がないのを理解しました。お母さんはもう彼をそれ以上引きとめようとはしませんでした。それで、彼にコートを着せて、襟のところを上手にくるんで、こう言いました。「さあ、行きなさい。そして、すぐに戻るのですよ！」

ところが、ベニーはすぐには出かけませんでした。彼はその場にすこしいて、ゆっくりとおじいさんのほうに近づいてゆきました。

そして、おじいさんの横に立って、小さな声でこっそりとささやきました。「おじいさん……」。「おや、なんだい！」とおじいさんは顔をベニーのほうに向けて、彼のほっぺたをつねって、こう言いそえました。「ハヌカの小遣いが欲しいのかい？」

「そんなのではないよ、おじいさん」

「コマが欲しいのかい？」

「それでもないよ」

「それじゃ、ベニー、お前の願いはなんだい？」

「ぼくに教えてよ、あの……聖なる名前を、ぼくに教えてよ」

彼のおじいさんも、お父さんも、ふたりともどっと笑いました。お母さんもたしかに彼のことを笑ったのですが、彼が何のことを言っているのか、分かりませんでした。お母さんは彼のほうに近づいて、たずねました。「何が欲しいの、ベニー？」

「喜んで」とおじいさんは言いました。「ベニーがあなたに、彼の欲しいものを言ってくれるだろうよ」

「ぼくが欲しいのは、聖なる名前だよ！」ベニーはもう一度彼の言葉を繰り返しました。「聖なる名前、ふさわしい名前、神聖なる名前だよ。それがぼくにはどうしても必要なんだ」

「それがお前に必要なのかい？ 聖なる名前が？」

おじいさんは不思議に思ってたずねました。

「いえ、ぼくではなくて、本当は」とベニーは答えて、彼は自分の声をすこし小さくしました。「ぼくではなくて、ぼくのためではなくて、別のひとのためです……ほら、そのひとはそこに立っているんだ、ここからすぐ近くの野原に立って、待っているんだ」

「じゃ、誰が必要としているんだい？ それは誰だい？ 誰がそれを待っているんだい？」

みんなが彼を取り囲んで口々に問いかけ、彼を疑わしそうに見つめました。それでベニーの黒い目には、すこし不安な様子が現われました。ベニーはみんなを見まわして答えました。

「あのひとさ、あのひとが待っているんだ」

「どんなひとだい？」

「ぼくの一とだよ」

「お前の一とって、どういふ意味？」

「ぼくが作ったひとさ。とても大きなひとだよ。そのひとがじつとぼくを待っているんだ、ほら、おじいさん……」

おじいさんはもう一度どつと笑って、彼にたずねました。「それでは、お前は何がほしいんだ？」

「聖なる名前をぼくにください！」

おじいさんはじつと黙りました。しばらくしておじいさんは口を開いて、言いました。「私の古いテフィリン〔礼拝用の皮ひも〕の箱のなかに、小さくて分厚い私の祈祷書がある。その私の祈祷書には何万という文字がぎっしりと詰まっている。それらの何万という言葉のなかに、聖なる名前も見つかるはずだ。預言者なら自分の名前の場所が分かるはずだよ」

060

ベニーはしばらくのあいだその場で、悲しい気持で、黙っていました。しかし不意に、ふたつの目を輝かせました。そしてすたすたと歩いて家から姿を消して、屋根裏のおじいさんの物置へこっそり忍び込みました。どこにあのテフィリンの箱が置かれているか、彼も知っていました。彼はその箱を手にとって、蓋を開き、そのなかから小さくて分厚い祈祷書を取り出しました。彼はあちこちページを繰って、その祈祷書を熱心に見つめました。そして彼はため息をつきました。「おじいさん、もしも彼がここで名前をみつけられなかったなら、ベニーはそれをどうやって見つけることができるでしょう？」

(4)

家からすぐ近くの野原で「そのひと」は立って、待っています。「ぼくが祈祷書を持ってきたよ！ 祈祷書がここにあるよ！」ベニーは胸のなかで叫びました。「ほら、この小さな祈祷書のなかに、聖なる名前があるよ。たしかに、ぼくはその場所を知らないし、おじい

さんもその場所を知らないんだ。この世のなかの誰も、何百万という言葉に埋もれたその場所を知らない。だからこそ、ぼくはあなたに祈祷書をそのまま持ってきたんだ。皮表紙のついたこの本をさあ、そのまま受け取ってよ！」

ベニーはそのひとの前に立ちました。月が照っていました。月は白い雲がたくさん出ている空に浮かび、その光、銀色の光を、野原のうえに、そのひとのうえに、ベニーのうえに注いでいました。

祈祷書をそのひとにあたえる前に、ベニーはそれに目をやり、ゆっくりとゆっくりと読みはじめました。「『聞け——イスラエルよ——』、ひょっとしてこれが聖なる名前だろうか？」彼はもう一度繰り返して、祈祷書を閉じました。彼はひとに近づいてこう言いました。

おじいさんのこの祈祷書は、
小さいけれども、とても分厚い。
そのなかにはとてもたくさんの言葉、
まるで、気高いぼくの空の、星々のような言葉がある。
ほら、そのページを見よ、何てたくさんあることだろう！
そのページには名前がある——
聖なる名前、ぼくたちはそれを読む。
それを見つけたひとは幸いかな！
それを見つけ、自分のなかに
取りこむひと——そういうひとこそ万歳を叫ぶ。
さあ、開け、ひとよ、その口を、
言ってくれ……どこにぼくはこの祈祷書を、
おじいさんのこの小さな祈祷書を置けばいいのか——
足もとか、腕のところか？
あなたの望むとおりにしよう、さあ、願うのだ——
おなかに置くのか、それとも頭か？
けれども、しー、静かに、神の名のために
それらの場所が神を危険にさらすことがないように——

名前のための一つの場所、
そこへと名前を受け入れよ、そのまんなかへ！

ベニーは手をひとに差し伸べ、目を閉じ、おじいさんの祈祷書を、すべてのページと表紙の板のついたままの形で、深く、深く、そのひとの胸に差し込んで、こう叫びました。

「聞け、イスラエルよ！ 聞け、イスラエルよ！」

祈祷書のすべてにはこう書かれている。

だからぼくはあなたを「イスラエル」と呼ぼう、

行け、イスラエル、行け、敬虔に、

行け、この大地のうえを、

行け、従順に、この荒野を渡ってゆけ、

荒れた息で、

森の道を、海のうえを

山を越え、谷を越えて――

あらゆるところで、道行くひとにたずねよ、

「イスラエルの地、憧れの地は、どこか？」

マカ^{※2}ジについてたずねよ、ユダについてたずねよ

そして、ぼくの代わりに、どうか、

彼によろしく伝えておくれ、

そして、彼にこう言っておくれ「毎日、毎日、

ぼくはあなたを待っています。どうか、来てください、

旗をたずさえて、強い心をたずさえて」

そうすれば、すべての奇跡がふたたび起こることだろう。

どうか、彼に言ってくれ。「ぼくと一緒に、ぼくの父、母、

そして祖父も、あなたを待っています」これでぼくの話は

全部終わった、

さあ、急いで出発しろ、ぼくの使者よ、

行け！

それからすぐに、ベニーはひとの胸から手を、ゆっくりと抜き出しました。しばらく彼はじっと立っていました。そして突然、目を開きました。するともうひとはいませんでした。彼は姿を消して、いなくなっていました。

(5)

ベニーのおじいさんは朝早くに起きて、手を洗い、タリートをまとして、テフィリンを身につけ、やせてしわのよった手をテフィリンの箱のなかに入れました。小さなあの祈祷書を取り出すためです。すると、祈祷書がありませんでした。

昨晚、それがそこにあったかどうか、おじいさんには見当がつきませんでした。何も思いあたることがなかったのです。おじいさんはあちこち見てまわり、あの小さな祈祷書を探しました。こちら、またあちらと探しまわってみても、見つかりませんでした。そして探しているあいだ、こう呟いていました。「テフィリンの箱のなかにあれを置いていたように思うんだが？ そうじゃかったか？……」

063

おじいさんの小さな祈祷書はとても古いものでした。おじいさんはそれをほとんど実際には使っていませんでした。おじいさんは何も見なくても祈ることができたからです。でも、あの祈祷書と一緒に祈ることが何年もの習慣になっていて、祈りのあいだはあの祈祷書がおじいさんの手に置かれていたのです。おじいさんは、それを開き、ページを繰ってはいましたが、読んではいませんでした。

今回、おじいさんは祈祷を楽しむことができませんでした。おじいさんの唇は動いていましたが、心は落ち着かず、口から祈りを唱えているあいだ、両目はさまよって、部屋のあらゆる隅に、なくなってしまったあの祈祷書を探していました。

そうこうするうちに、ベニーが目を覚ましました。彼は大きな黒い目を見開いて、体を起こして、ベッドから飛び起きました。

おじいさんはもう起きてきた孫に気づいて、ふとこう問いかけました。

「どうか、お前、いたずらっ子よ、私に言うておくれ、ひょっとしてお前は私のあの祈祷書を見かけなかったかい？」

小さな笑いがベニーの顔に浮かびました。おじいさんは自分を叱ったりしないと分かっていたので、すこしも臆することなく、彼は叫びました。

「ああ、あの小さな祈祷書は、聖なる名前と一緒に、ぼくのひとの胸に突き刺さっているよ！」

「何だと？ お前は何を言っているんだ？」と驚いておじいさんは叫びました。そして、ふたつの大きな目をさらに大きくしました、「ひとの胸にだと？ それはどんなひとなんだ どこの一とだ？」

「あの一とだよ！ あの一と！」とうれしそうにベニーは叫びました。「あの一とはきっともう遠くに行っているよ、きっとイスラエルの地にもうたどり着いているよ！」

064 おじいさんはまだ何のことか分かりませんでした。ただひとつのことだけは分かりました。つまり、ベニーの手があの祈祷書にふれたということ、その結果、そのことの言い訳をベニーがぐだぐだと言っているということです。そこでおじいさんはベニーを叱って、あの祈祷書を渡すようにもとめました。しかし、ベニーがおじいさんにすべてのことを話したあと、おじいさんは口を閉ざし、しばらくのあいだ黙っていました。

しばらく沈黙したあとで、おじいさんはベニーにたずねました。

「そのお前の一とはいつ帰るのだい？」

「いいえ、ぼくが待っているのはあの一とです。ユダ・マカビです、彼の到着をぼくは待っているんです」

「じゃあ、ベニー、マカビはいつやって来るんだい？」

「もうきょう、やって来ます！」

「ひょっとすると、きょうは来ないんじゃないかい？」

「つぎの日、ハヌカの3日目のろうそくのときにはやって来ます。明日か明後日か、それともハヌカの最後の日か。でも来るよ、きっと来るよ」

「ひょっとすると、ベニー、ハヌカの最後にも来ないんじゃないか？」

「それじゃ、また彼を待ちます」とベニーは強い気持で叫びました。

「ベニー、いつまで待つつもりだ？」

「メシアの来るときまでです！」

おじいさんは、身をかがめて、ベニーの頭に口づけをしました。「ベニー、すばらしい答えだ。待ちなさい、待ちなさい、彼を、待ちなさい！私も彼を待とう、ふたりで彼を待とう」

しーっ、気をつけて——このことを、家の誰もほかには知っていません。ベニーとおじいさんのあいだだけの話です。そして、ハヌカのろうそくに火をともし夜になるたびに、ベニーはしばらくのあいだ身を隠して、野原に行っては戻ってきました。彼は出たり入ったりして、最後には窓のところに立って、窓越しに、夜の闇を見つめ、じっと注意深く耳を澄ましていました。

家族の者たち——ほら、彼らは食卓に座って、レビバーを食べながら、話しにふけています。おじいさんだけが黙って座っています。おじいさんはときどき顔を窓のほうに向け、不意に、孫にたずねます。「どうだい、ベニー？ なあ？」

しかし、食卓についているひとは誰ひとり、おじいさんが何のことを言っているのか、分かりません。ベニーだけがそれを知っています。

そして、あなたたち、幼いひとたち、あなたたちが、あの「ひと」の最後はどうなったのか、知りたいと思うのは、当然のことでしょう。さあ、あなたたちに私が語りましょう。ただし、つぎの条件を私はあなたたちにもとめます。つまり、このことはどうかベニーの耳には聞かせないでいただきたい、彼を悲しませないようにしてほしい、ということです。

あの「ひと」、彼は本当に歩いてゆきました、荒れた道をとおり、湖を渡って。彼は歩いてゆきました、荒野の道、海の道、都会の道、村の道を。彼はとうとうイスラエルの地にまで歩いて行って、そこで溶けてしまいました。

イスラエルの地の太陽は最高に熱いのです。雪からできたひとは、その太陽の光に耐えられず、溶けてしまったのです。

とはいえ、彼はベニーに託された使命を果たしました。

その地に暮らすひとりのユダヤ人が、ある朝、ユダ・マカビの墓の横を通り過ぎたとき、盛り上がった土のうえに、小さくて分厚い祈禱書を見つけたのです。

【訳注】

※1 p.047 ※19を参照。

※2 「ユダ・マカビ」はハヌカ祭の起源となっている、紀元前2世紀のユダヤ人の愛国者。

バビロンの河のほとりで

— 4 幕による、聖書にもとづく民族の悲劇 —

イツハク・カツェネルソン／細見和之訳

〈 解 題 〉

これは、イツハク・カツェネルソンがワルシャワ・ゲットーにおいてイディッシュ語で書き上げた全4幕の戯曲『バビロンの河のほとりで』の全訳である。原文は、ヘブライ大学のシェイントッフ教授が集成した『カツェネルソン ワルシャワ・ゲットー作品集成』の233頁から377頁に収録されている。

יצחק קאצענענעלסאן "די ישיע געטטא-כתבים ווארשע 1943-1940, בית לוחמי הגיטאות און הוצאת הקיבוץ המאוחד, תשמ"ד-ד', זז, 1984, 233-377

原文はシェイントッフ教授がオリジナル原稿からあらためて起こしたものであって、訳文中 [] の箇所は教授が判読不能としている部分である。

この戯曲、4幕全体では私の訳では400字詰め換算、約400枚に達する大作になっている。カツェネルソンが書き残したなかで、現存するものとしては最大の作品であり、もうひとつの大きな戯曲『ヨブ』とともに、ワルシャワ・ゲットーでカツェネルソンが書いた戯曲としてもっとも重要な作品である。戯曲『ヨブ』がヨブ記を背景としているように、こちらの作品は、訳註に記しているとおおり、紀元前6世紀のバビロン捕囚の時代を背景としている。

第1幕では、エルサレムからバビロンへと放浪の旅を強いられたコラヤの一家とシェマヤ、とりわけシェマヤの改心が軸となっている。また、第2幕では、うたびと 堅琴を携えた歌人アブタリア、エルサレムを占領し破壊し尽くした親衛隊の長ネブザルアザンが登場し、やはりネブザルアザンの改心が主題となる。第3幕では、預言者エゼキエルそのひとが姿を見せて、舞台を駆け回ったあと、神の言葉を告げる。そして、その第3幕の終わりにコラヤの息子アハブが登場し、第4幕では、そのアハブとシェマヤが、かつてのシェマヤの妻で現在はアハブの恋人であるハダサを挟んで、一種の対決を行う。

第3幕と第4幕は、閉ざされたバビロンの門の前で芝居が行われる設定になっている。第4幕の最後でついに門は開かれるが、それはほかでもない「捕囚」のはじまりなのである。

古代のバビロン捕囚を歴史的な背景としながらも、この戯曲に当時のゲットーの状況が生々しく映し出されていることは言うまでもないだろう。カツェネルソンは、地下ギムナジウムの生徒たちからなる劇団でゲットー内でこの戯曲の上演を行おうとしていたが、ゲットーの過酷な状況の進展はそれを許さなかった。(訳者記)

※訳註は各幕の最後に付した。

私たちは一緒に泳ぐだろう——
私たちの苦しみを運んでゆこう
お前と一緒に、海にまで！

1人の男（明るいところで、ずっと[]立
っていて、老人コラヤを越えて[]）。

顔を河のほうにむけて——彼は不意に水
のなかへ飛び込み、消える）

コラヤ（深いうめき声を吐いて）

おお、神よ！

アビガイル（両手をもみしだき、頭を重
く垂れる）

ハムタル（向かい側から）

もうすでに……もうすでに……

シェブナ（向かい側から）

終わりだ

ゼファニヤ（シェブナの向かい側から）

それでいて、何一つ、何一つ……

何一つ変わっちゃいない、これっぽっち
変わっちゃいない！

アビガイル おお、何て怖ろしいこと！

ハムタル もう……もう……

コラヤ これが報いか？

アミフド（舞台の左側から急いでやって
来る。彼のあとには何人かの追放者た
ち。そのなかに異邦人がひとり）

ここからだ！ おい、お前たちのひとり
だろう——

ゼファニヤ 何だって……

アミフド ここから誰か飛び込んだ奴が
いただろう！

ゼファニヤ ああ、ああ……ここからだ！

アミフドさん、あんたも警備で立っ

て、見ただろう？

あんたに連れて来られたときは、
すっかり陽気な感じだったのに……

そこのあんたたちのところで——さあ、
もっと言ってくれよ

遠くの[]岸で——

あんたは[]からやって来た

誰も命を失くした者はいないのか？

誰も水と一緒に攫われた者はいないの
か？

アミフド 質問はなしだ……

何て暗い日だ、何て荒れ果てた日だ！

シェブナ ああ、髭を剃られたユダヤ人
のようだ！

まるで風が吹きつけるように、しかも外
からの風ではなくて

私たちには馴染みになっているかのよう
だ、水に飛び込むことが！

ゼファニヤ まるで岸の砂が河に吞まれ
るように——

アミフド そんなことを認めるわけには
いかん！

ヒルキヤ（急ぎ足で、舞台の右から現わ
れる。彼と一緒に何人かの追放者もやっ
て来る）

（コラヤの傍らに立って）

ここからだ、そうだ、ここからだ——
ここにひとり男が立っていた！

アビガイル ええ、立っていました。

ヒルキヤ お前たちはその男を見たん
だな！

ハムタル 見ました、見ました……。

アビガイル 孤独な男……蒼ざめた

男……。

ヒルキヤ あいつは誰だ？ 言ってくれ、誰があいつをあの男を知っている？

お前たちのなかの誰があつ男を知っている？

ゼファニヤ 河の水に聞いてみなよ！

ヒルキヤ あいつは河に落っこちたんだぞ！

アビガイル そうではありません
落ちたんじゃなくて飛び込んだのです
太陽が輝いていました、
私たちは歌っていました——

するとその男が河に身を投げたのです。

アミフド 誰かあいつを止めてやればよかつたのに！

ヒルキヤ 誰か構ってやればよかつたのに！

ゼファニヤ そんなまっぴらだったさ！

アミフド お前はユダヤ人だろう？

ゼファニヤ あんたと同じでなあ！

アミフド いいや、違う！

だが万が一そうだとすれば、よく聞けよ
お前のような奴は
もう生れてはならんのだ！

お前は一人の人間を死から救うことができた——

それなのに救わなかつた！

ゼファニヤ ほっといてくれ！

あいつは苦しかつたのさ……

アミフド 聞いたか、聞いたか、「あいつは苦しかつたのさ」だと
じゃあ、お前はどうかんだ！ お前は苦

しくないのか？ どうだ？

ユダヤ人はみんな苦しんでいる！ 大人から子どもまで

すべてのユダヤ人が苦しんでいる！

私たち全員が

河に身を投げててもかまわないのか？

ゼファニヤ そうだ、我々全員が……ああ、何としたことか！

アミフド みんな、聞け、聞け！

ゼファニヤ バビロンの陸地よりもバビロンの河のほうがよっぽどいいさ！

ヒルキヤ 賛成だ
でも黙って聞くんだ——

口は災いのもとだからな——

我々はその男を河から引っ張りあげたんだ！

あの小鳥はもう飛び去ってしまつた……

けれども俺たちはあいつが漂っているところを

翼に鉤を引っ掛けて釣り上げ、

追い込んだのさ、

鍵と錠のかかる鳥かごに——

バビロンの陸地で生きること……

もうお前たちにも分かつただろう、口は災いのもとさ！

ゼファニヤ 不幸中の幸いってやつだ……

ヒルキヤ あいつは誰だ、何という名だ？
お前たちのなかに知っている者はいないか？

また飛び込むんじゃないかと心配なんだ、
河のなかにな——

かわいそうに……あいつはまだずいぶ

ん若い——

あ、あいつがこちらへ連れてこられるぞ！

アビガイル（両手をもみしだき、連れて来られる男を見つめている）

シェマヤ！

コラヤ 泣くな、嘆くな！

ナアマ、シェロミト（蒼ざめた若い男の右側に現われる）

ナアマ この人はあなた方の……ええ、あなた方の知り合いでしょう！

シェマヤ（連れて来られた若い男、明るい色のマントを着ている）

全員（老人を除いて）

シェマヤ！ シェマヤ！

ゼファニヤ ネヘラミの人よ！

アミフド、ヒルキヤ、シェロミト、ナアマ
（場所をゆずって、脇の岩のうえにばらばらに腰を下ろす）

コラヤ ネヘラミの人よ！

シェマヤ はい……私は……

コラヤ 早まったことを……

若い身空であんなことを、ちょっと早まったことですよ。

シェマヤ（静かに泣き崩れる）

私は……私は……

コラヤ（シェマヤの顔を黙ってのぞきこんで）

髪の色は濡れているし、

顔色は蒼い、とても蒼い……

眼差しは……凍えるように冷たい——

どうしてあなたはそんなに口を閉ざして、蒼ざめて立っているのですか？

シェマヤ お年寄り、私は口を閉ざして

いるのではありません……

コラヤ 分かります、分かります……あなたは何を呪っているのです！

シェマヤ（顔をあげて不思議そうにコラヤを見る）

コラヤ ユダヤ人のことを呪うのではありません！

シェマヤ（びっくりしてコラヤを見つめ、一歩近づく）

ユダヤ人を、ですって！

彼らは私を河から引っ張りあげたのです！

コラヤ いっさいはあなたが知ってのとおり、感じたとおりで——

もう過ぎたことです……

私はもう年寄りです——

どんなに事態が暗くなろうと、私にとっては明るいのです

あなたたちの心のなかを覗くときにもすべて明るいものを私は目にします

あなたの心は冷え冷えとしています

あなたは一枚の木の葉のように震えている

こちらへ来なさい、腰を下ろしなさい、遠くにいてはなりません——

ユダヤ人を呪ってはなりません！

シェマヤ ユダヤ人を、ですって！

彼らは私をユーフラテス河から引っ張りあげたのです！

アミフド 彼らに祝福を。

でも、問題は君の髪と服がぐっしょり濡れていることだ。

シェマヤ（彼のほうに駆け寄る）

あなたか、ひょっとして、あなたか？

さっき私を救ったのはあなたか？（両手

を彼のほうに掲げる)
 あなたが呪われますように！
アミフド 私じゃない、私じゃない！
 しかし、誰かを救おうとしていたことは事実だ
 もしも私がそいつを救っていたら——
 そいつは私を呪っただろうさ！
 行って、そいつを探しな、お前の救い主を、そして祝福を捧げなよ。
ヒルキヤ こいつはそいつを祝福するさ、アミフド、すぐにとはいかなくてもしばらくすれば
 きっと感謝することだろうよ……
シェマヤ (あたりを見回して、視線をヒルキヤに釘付けにする)
 あの男はどこだ、どこにいる？
 私にあんないいことをしてくれた男
 あんなにありがたいことをしてくれた男は？…… (ヒルキヤに向かって)
 あなたか、ひょっとしてあなたか？
 あなたが私の「救い主」か？
ヒルキヤ そうであればと願いたいところだが！
 私はただ見ていたのだ
 ひとりの男が君のあとから河に入り、
 寸前のところで君を掴まえ
 川上の岸へと泳ぎつくのを。
シェマヤ その男こそ呪われよだ！
 そいつが私を水から引き上げたのだ！
 ……明るい太陽、その輝きは
 私の目のなかでは
 すでに消え去っていた、
 そして、波がもう死の口づけをして

水の流れが私をもう冷たい胎のなかに葬ってくれていたのに
 不意に、不運なことに、まるで幸運であるかのように——
 外から強いられたのだ、
 「そこまで！」と
 エルサレムから遠く離れているようにバビロンからもすでに遠く離れていたのに……
 すると——ひとりのユダヤ人、エサウ^{※4}の力強い腕を持つユダヤ人が私を引きずり出す
 「戻れ！ 戻れ！ 戻れ！」と
 いったいどこへ戻るんだ？
 私は叫びたい、叫びたい！ 叫びたい！
 どこへだ？
 あいつは、あの悪しき男は私をどこへ連れ戻したのだ？
 バビロンへ連れ戻したのだ！
 またしてもだ——
 何という悪しき男、邪まな男だ！
 どうしてまたしても私はここに連れ戻されることになったのか
 この谷、嘆きの谷に？
 言ってくれ、こんな不幸にどうしてまだ見舞われるのか？
 ……私はネヘラミの者だ、ネヘラミの者だ——
 おお、ネヘラミ！ ネヘラミ！ 思わし気なわが名よ！
 おお、ネヘラミ、お前のもとには私は輝きを見ることがない！
 そうだ、お前のもとには私の揺り籠さえ

存在していない……

お前は煙のようにちりぢりになり
泡のように消え果てた、
私はもう少しでシオンの一隅に行くところ
だった！

おお、小さくとも神聖なる土地、
輝かしい、エルサレムの一隅！
おお、自らの空へ、自由な空へ、頂きを
突き出した山

おお、母なるシオンよ！
心暖かで、忠実な[]
おお、私に語りかけてくれ、私はすべて
の人に祈る[]

ヒルキヤ 何だと？ 何だと？

シェマヤ 私は河に行きたいのだ！（身
を振りほどいて、ユーフラテス河へ行こ
うとする）

ヒルキヤ（左側からしっかりと彼を押
さえる）

駄目だ、駄目だ、戻れ！
誰か私を助けてくれ、誰か！

シェマヤ おお、離せ！

アミフド（左側から彼に駆け寄り）
縄だ！

早く、縄をこちらに寄せ！

ヒルキヤ 縛れ、さあ、こいつを縛れ！

全員（それぞれの場所から飛びかかる）

アビガイル どういう罪のためです？
放してあげて……すぐに彼を放してあ
げて！

ヒルキヤ、アミフド（一歩、離れる。一
方は右に、他方は左に）

アビガイル（厳しい顔つきで彼に近づ

き、両手でシェマヤを抱え、しばらく無
言で彼の目を見つめる）
冷たい雫があなたの髪から私の額に落ち
てきた。

シェマヤ（自分の衣服の白い裾を彼女の
顔に差し出す）

アビガイル 拭わないで——
水の雫が私の顔にかかるままにしておいて
——

私はそれが好きなのよ……
すぐにもっとたくさん雫が私のうえに
きらめくのですから——
さあ、ふたりして河に身を投げましょ
う——

シェマヤ（両側の、ヒルキヤとアミフド
の方を見やって）
駄目だ……駄目だ——

アビガイル 私の兄弟はまだ踏みとどま
っているけれど——
人を死から救う必要があるように、
人を生から救う必要もときにはあるも
の。（シェマヤに向かって）
さあ、来なさい！

シェマヤ（彼女を困惑して見つめる）
君は、君は……駄目だ！

私はひとりで死にたかったのだ、ひと
りで！

アビガイル（少し傷ついた様子で）
「ひとりで！」「ひとりで！」——この
ひとを見てよ——

とても立派なこと、何て誇り高いことで
しょう！
まるでこのひとには心しかなくて、私に

は顔しかないみたい！
このひとは肉と血からできていて——
私は木でできてみたい……
このひとは何もかも覚えていて、私は全部忘れてみたい！
私はあなたとまったく同じよ！
あなたが一族の息子であるように私だつて一族の娘！
あなたと同じで、エルサレムの子ども……
同じよ！ 同じよ！ 同じ
ここへ、このバビロンの河のほとりまで引きずられて来たのよ……あなたはどこに行きたいの？
あなたはやっぱり死に行く！ あなたは解き放たれに行く！
あなたは救済されに行くのよ……
あなたは自分の痛みをバビロンの河で冷ましに行く
ただそれだけのために、あなたは行くのよ！
人間と神さまを嘲ることは
あなたにはもうできません、
あなたは恥辱をどうすればいいかわからない
あなたはそれを自分と一緒にユーフラテス河の深い波の下に葬りたい……
あなたをすっかり打ちのめしたひどい惨めさから
あなたは自分を解き放ちたい……
母なる土地への憧れから自分を解き放ちたい……
行きなさい、行きなさい、誰もあなたを

止めはしないでしょう、待って！
行きなさい、ええ、行きなさい、でもひとりでは行かないで、
あなたと一緒に
私もすぐに河に身を投げましょう、
私だつてあなたとまったく同じように手品をしてみせることができます
一緒に行きましょう、私たち二人のために！
二人一緒に解き放たれましょう——
さあ！
シェマヤ ひとりで……ひとりでだ！
君もだつて？
おお、花よ
茎から引きちぎられた
シオンの花よ——
君はまだこれから花咲かねばならないのだ！
アビガイル 私もあなたと一緒にいきます！
シェマヤ 君も？ 君もだつて？ ああ、何てことだろう！
君は若くて、心優しい——
君はそんなに若くて、そんなに心優しい！
私は恥ずかしい——
待つんだ、待つんだ！
かのひとの憐れみを……（片手を天に差し出す）
アビガイル あなたは待つというの？
シェマヤ 私は待たない——（絶望的に頭を揺さぶる）
私はもう疲れ果てて、
私はもう耐えられない、ああ、耐えられ

ないのだ——

アビガイル 私だって同じよ……

シェマヤ (叫ぶ)

私の苦しみはもっと大きいのだ！

全員 (それぞれの場所から立ち上がって、興奮して、口々に)

「もっと大きい！ もっと大きい！」

シェマヤ (まるで以前の状態に戻ったかのようにして、同じ叫びを繰り返す)

そうだ、もっと大きいのだ！

ゼファニヤ 主を見るのだ、

そして我々を見てみる、奴隷たちよ！

彼の痛みは「もっと大きい」……

シェロミト 「もっと大きい」——

私たちすべては、一つの種族に由来しています、

ユダヤ人という種族に！

ナアマ あなたは私たちの兄弟——

私たちはみんなひとりの母の子どもなのです！

コラヤ あなたは正しくない、わが子よ、そうだ、正しくない……

さあ、私に答えてみなさい——ひとりの平凡なユダヤ人である私に

私はあなたにこう問いかけます

「私の痛みはもっと大きい」——それなら、あなたは私たちを秤にかけられるのですか？

ハムタル (舞台の前面に割って入るようにして、やって来る)

兄弟のみなさん！ 姉妹のみなさん！

誰の痛みが一番大きいか、私は知っています！

私たちひとりひとり、それぞれの痛みが一番大きいのです……

私の痛みだってそうです……誰かの痛みがもっと大きいわけではありません、私を河に送ってください……

さあ、私たち全員が行きましょう、貧しい人もお金持ちも

子どもと鎖をたずさえて、あの胎のなかへ……

私は私の痛みをたずさえて、若い私たちは貧しい者も金持ちも

河のなかへ身を投げます、

広々とした河のなかへ！

十分な広さです——

バビロンの河は広くて大きいのです、ここにも、そこにもあるでしょう

赤ん坊を身ごもった母親のための場所が、大いなる痛みのための場所が

その心のなかの[]のための場所が——

バビロンの河——それらが岸を溢れることはないでしょう……

ここに私の子どもがいます——ほんのわずかの場所で十分です、いったい何に？

子どもは育てて何になるのでしょうか？

命を沸き立たせて何になるというのでしょうか？

ディアスポラの地

水も草もない荒れた砂漠の砂のもとで——

私は息子を産み落としました、

無駄なことでした、無益なことでした。

息子の父は息子を待ってはいませんでした……

エルサレムの壁のうえに[]
 その頭を置いて[]、
 流れ出る血で壁の石をぐっしょり塗らした
 [……]
 [息子の父は]
 []
 []
 []
 私は彼を布で包みました……
 彼の目を覗きこまないでください——
 彼の瞳にあなたがたの姿が映ったりしない
 ように！
 あなたがたは希望もなしに、いまでも思
 い出してしてしまうでしょう
 エルサレムの地で朝がどんなふうである
 かを……
 彼の額に、私たちの空を思い描くことが
 できるでしょう……
 おお、私の息子、わが子ども、（赤ん坊
 に語りかける）
 どんな罪があるというの
 あなたの小さなクッションに——嘲りの
 罪かしら？
 どんな罪があるというの、あなたの毛布
 に——恥辱の罪かしら？
 おお、私の息子、わが子ども！
 お前はもうユダの山々のなかで大きくは
 育たない！
 小さいまま、永遠に小さいまま！
 バビロンの地ではユダヤ人は大きくは育
 たない！
 バビロンではユダヤ人は小人で、小人の

まま……（シエマヤに）
 あなたに子どもはありませんの？
シエマヤ 私にはありません、いや……
 バビロンにひとり息子がいます、背が高
 くて、美しい息子です——
 樹木のように背が高く、昼間のように
 美しい
 ユダで生まれ、バビロンで育ちました、
 彼はバビロンで花開いたのです……
 私はヨヤキン^{*5}と一緒に追い出されたのです
 アザルヤ^{*6}はまだ
 生後2、3週間の赤ん坊でした、
 そのとき私たちを大いなる不幸が襲った
 のです……
 そしていまでは——彼は私のものではありません！
 彼はユダヤ人というよりカルデア人^{*7}です……
 ユダの種族の人間は、あなた、ほとんど
 いないのです、
 私たちはユダにしなければなりません！
 私にはバビロンに息子がいますが、彼は
 私のものではないのです——
 彼はバビロンでは彼の母のもとにいま
 す……
 もう長いあいだ会っていません
 とても長いあいだ会っていません……
アビガイル バビロンはこれがはじめて
 ですか？
シエマヤ（両手をもみしだいて）
 ああ……ああ……
アビガイル 奥さんはおありですか？
シエマヤ 妻は私から引き離されています
アビガイル（不思議そうに）

引き離されている？ あなたから？

シェマヤ おお、聞かないで下さい、聞かないで——

閉ざした私の扉を叩かないで下さい……
私には妻もなければ子どももありません！

ハムタル あなたには子どもがいらっしゃらない？（子どもを掲げる）

それなのに、私には——私には子どもがいる！

ああ、子どもなどなければいいのに……

この子をバビロンの河に葬ってやろう！
私は欲しくない！ 聞いている？ こんな子、欲しくないのよ！

私もあなたと同じ、ひとりのユダヤ人でありたい！

私たちを河に送り届けてください……

（岩に腰かけて、河の方を見つめる）

アミフド（苛立たしげに彼女のところにやって来て、彼女の動静を見守る）

フルダ（やって来て、シェマヤに）
駄目です！ 子どもを連れた姉にはまだ可能性があります、

私です、あなたたちが送り出しているのは、私だけ

風のように私は吹き飛ばされましょう、
あの水のところまで……

他の誰でもない、私です

あなたたちはアヒカムの子ゲダルヤの^{※8}ことならすべて聞いているでしょう？

あなたたちはもちろん、そういう人物のことを知っているでしょう？

彼は私の許婚でした……

あんなに偉大な男は

いまではエルサレムにはいません。

ネブカドレツアルの行なった辱めさえ^{※9}
彼を偉大にするばかり……

あの家、美しい家に閉じ込められたくなくて、

私は彼を置き去りにしたのです、置き去りに、

彼は私にこう願いました「とどまってくれ！」と

そしてその際

熱い涙をこぼしました——

私は彼を置き去りにしました、置き去りに……

いまでも、いまでも彼の声が耳にこびりついています

私に願う彼の声が

「とどまってくれ！

そして私の妻でいてくれ」——

私は出かけました。

私は彼と別れました、別れました（コラヤを指して）——

父と一緒に、

あなたがたと一緒に

別の国、別の土地へと追い出された

すべての人々と一緒に……

さあ、聞いて下さい（絶望して叫ぶ）

私は悔いています！

私は故郷へ帰りたい！

私が欲しいのはゲダルヤでもアヒカムの子でもない！

私を喜ばせるのは

粘土の小部屋にいる、

年寄り、つんば、めくら——

その男のために私は子どもを産んでやる
その年寄りと一緒に私の子どもを——
とにかく、故郷へ、故郷へ！
ああ、破壊され、荒れ果て、砕け散った故郷へ
ああ、かけがえのない故郷へ
おお、バビロンの空の太陽よ——
私に教えて下さい
あなたはシオンでもまだ昇っているのですか、そこで夜は明けているのですか？
あなたはその廃墟に輝きを与えているのですか？
太陽はこんにちの悪夢のなかでもその姿を私に見せている——
嘘っぱち！
ユダの王国は滅びた！
いや、まだ滅びてはいない……（叫ぶ）
ユダの国は燃えている（シェマヤに向かって）
そちらに目を向けなくて、あなた——
あなたたちはもうそこにはいない、もういない——
西にあったユダの国——それはもう消え失せたのです……
ユダの国が燃えている！（胸を叩く）
見て、見て
炎が町を焦がしている
炎は屋外の壁、屋内の壁を焦がしている——
ほら、聞いてごらんささい、
町の炎がすすり泣いている、すすり泣いている……
それは私の心を引き裂く、

炎はすすり泣いている、すすり泣いている——
おお、兄弟を秤にかけないで、誰の痛みも秤にかけないで！
もしも溺れるのなら、私が溺れましよう、私が！
山々のうえでユダはあんなに速やかに消えてしまいました、
私の心のなかからも消えてしまうようにしましよう！
ゼファニヤ 我々全員が……全員が！
全員（舞台の全体に広がって）
シェマヤ おお、正しき神よ！
ゼファニヤ 河のなかへ、我々全員が行くのだ！
そうだ、全員だ……父親も母親も！ 息子も娘も！
花婿を連れた花嫁も——
みんなだ！
全員（突然ぐるぐる回りはじめ、観客に向かって一つの背中の中をしばらくのあいだ立って、それから全員が一人の人間のように走り、河のほとりに行む）
シェマヤ（舞台の前面で、驚いて叫ぶ）
とまれ！ とまれ！ みんなとまれ！
全員（立ち止まる）
シェマヤ 私がひとりで行く、ひとりで——
全員（右足を岩のうえに載せる）
シェマヤ やめろ！ やめろ！
全員（右足を地面に下ろして戻す）
シェマヤ まだどきどきしている——河に近づきすぎだ！
私ひとりが行くべきなのだ、あなたがた

の代わりに私ひとりが！

背中しか見えないぞ——背中は一とこと
もしゃべりはしない……

ぐるぐる走りまわってくれ！

全員（ぐるぐる走りまわる）

シェマヤ やっと分かってきたぞ、何と
かやっと——

私たちのあいだがすこしばかり広すぎる
のだ、広すぎるのだ……

死については語るな！ 死ぬことにつ
てはもう語るな——

さあ、こちらへやってくる！

全員（一歩、近づく）

シェマヤ いいぞ、いいぞ……一歩ごとに
気分がよくなる、気分がよくなる、おお、
神よ！

ああ、すこしでも遅れていれば——間に
合わなかっただろう、
近づいて来い、近づいて来い。

全員（彼に近づいてゆく）

シェマヤ いいぞ……いいぞ……いいぞ……
恐怖は私からすっかり消え失せたのでは
ない——

どのようにして一つの民族が……いまで
もすべてが私を震わせる——
私に誓ってくれ！

コラヤ あなたに何を誓うのですか？

シェマヤ こう誓って欲しいのだ、
私たちは私たちの神にもう恥辱を加える
ことはしない、と……

ユダヤ人は自らを殺めてはならない、
神は私たちに生きることを命じてい
る——「生きろ！」と。おお、私に誓

ってくれ

コラヤ あなたに誓いましょう！

シェマヤ 私は年寄りで、[]の
ひとりにすぎない、とあなたは言う……
それでもひとりと多数のあいだにはやは
り違いがある！

コラヤ 同じことです！

ほんのわずかも違います——

ひとりも我々全員も同じです——

おお、早まったまねは絶対にやめてくださ
い！

シェマヤ（観客の方に向けた顔をうなだ
れ、両手で顔を覆う）

コラヤ（哀れむように彼を見つめて）
強すぎました……

私の言葉は強すぎたようです——

私には赦されぬことでした……

あなたは肩と首を震わせている——
あなたは苦しんでいる……

どうか私の言葉を赦してください、どう
か赦してください……

あなたは私に親しくしてくださった、生
きてください、生きてください——
どうかお赦してください！

シェマヤ（老人の頭を撫で、感謝をこめ
て見つめ、沈黙している）

コラヤ あなたは口を閉ざしている……
口を閉ざしてひとことも話さない……

その涙のわけを

どうかお話しください——

涙はあなたの目から流れ落ち、首に溜ま
っています……

おお、[]あなたの苦しみの大きさ

それがあなたの感情に大きく、深く、穴をうがっています……

あなたはさまざまな感情で本当に私たちより大きくなるのです！

シェマヤ (手を[])

私が？

私の間違いをしでかさないうで、お年寄り、私の間違いを、私の急かされた、痛みに満ちた言葉で []。

コラヤ そうです……唯一残されているのは私たちすべての痛みです……

ただ心が、親愛なる方よ――

あなたの場合、多感に過ぎるのです……

落ち着いてください、落ち着いてください、ああ、あなたがただ穏やかであれば！

そうやって静かにしててください、静かに、おお、親愛なるお方……

シェマヤ 私は落ち着いてなどいられない！

コラヤ 分かります、分かります、あなたは祝福しているのです。

シェマヤ (不思議そうに彼を見る)

どうしてそんなことを――

コラヤ ええ、そうですとも……

ユダヤ人を祝福してください……祝福してください！

シェマヤ よし！

コラヤ 彼らはあなたを救ったのです……

さあ、走って行って、彼らを祝福し、ねぎらってやってください

祝福の言葉をかけてやってください

大きな声で！

シェマヤ 彼らにはではない！

あなたたち、友人たちよ、あなたたち、ここにいるあなたたちすべてが、きょう

私を救ってくれたのだ

私は誓う、あなたたちに誓いの言葉を与えよう。

コラヤ お誓いください！ お誓いください！

シェマヤ 私は生きつづける……

全員 (それぞれの場所で立ち上がる、大きな [])

コラヤ さあ、聞きなさい、

私はもう年寄りです、

このたびの不幸はこんな老いぼれの私を襲ったのです……

私がこの目を閉じるとしても

同じことでしょう

――それでもしかし

私は力づくで生から引き離されはしません……

この生命は

神から我々に

与えられたものです――

短かろうと、長かろうと――

その命は決して贈り物ではありません、

「生きる！」

という戒律なのです。

喜びのときも

苦しみのときも

「生きる！」

楽しいときも

憂いのときも

「生きる！」

居心地よく、申し分なく自由なときも

異邦人の奴隷のときにも

「生きろ！ 生きろ！」
自分自身の土地で自由であるときも
敵のもとで恥辱にまみれているとき
も——

「生きろ！ 生きろ！」

神の慈悲で、

[]

[]

「さあ、生きろ！」

[]

ユダヤ人にとって生きるということは戒律です！

シェマヤ 私は生きる、私は生に踏みとどまる——ああ……

コラヤ あなたは誓われた——
弱々しくであれ、あなたは誓われた……
年寄りの耳でははっきり耳にしたと言えないにしろあなたが口ごもって私たちに誓われたにしろ——

一つのことは確かです、一つのことは——あなたは誓われた
重い心で……

私は不安です、不安です、
戦慄が私の体を駆け抜けます
あなたはまたしても知るでしょう、
どんなにあなたが苦しんでいても
誰ひとりとしてユダヤ人が死の腕に身を
投げることがないように
神が監視されていることを。

シャマヤ いや、もう大丈夫だ——

全員 苦しい！

シャマヤ もう大丈夫だ……大丈夫だ……

全員 苦しい、我々は苦しい！

シャマヤ もう大丈夫だ……

コラヤ 野蛮な敵が私たちに大きく口を開けて呪い、
唾を吐きかけるなら？——

シャマヤ (強いられたように)

私は生きる……私は生きて——苦しみを背負う。

コラヤ そして、悪辣な敵が悪魔が、

まるで主人が奴隷に語るように
私たちに語りかけるなら——

敵は私たちにこう言うでしょう、

「踊れ！」

私たちが嘆いているときに……

敵なら私たちにこう命令するでしょう、

「歌え！」

敵は私たちを打ち据え、

こう言うでしょう、

「喜び、微笑め！」

私たちが悲しみにくれているときに、
そんなことが敵は楽しくて仕方ないのです！

シャマヤ (絶望して)

私は生きる……私は誓ったのだ。

コラヤ そして、敵が——性悪な敵が、
私たちから幼い子どもたちを奪い、
子どもたちの舌を口から引きちぎって、
それを別の口に投げ入れるとしても？

シャマヤ 何ておぞましい！

おお、苦しい！

私は生きる……

コラヤ 悪しき敵、恥知らずの敵が

父親の腕から、母親の胎から、無理やり奪い取り、
まるでシャツを替えるように
心臓を入れ替えてしまうなら——
子どもたち自身の心臓を掴み出して
異邦人の心臓をそこに置きいれるなら？
異邦人の脈拍と異邦人の血流をもつ心臓
を置きいれるなら？
シェマヤ 敵が彼らを殺すなら[]！
自分自身の心臓でないなら、心臓がない
のも同然だ……
異邦人の心臓は異邦人の顔よりもっと悪い、
心臓なしにユダヤ人であること——いつ
そ頭がないほうがまだ！
彼らは生まれてこなかったほうがまだ——
母親が彼らを持ちたいと願わなかった方
がまだ……（河へ両手を差し伸べる）
おお、ユーフラテス河の水よ！
全員 あなたは誓ったのだ！
シェマヤ （絶望してうなだれる）
私は生きる！ 私は生きる！（彼はふら
ふらとした足取りで左へ歩き、最後に河
岸に腰を下ろす）
全員（それぞれの場所で悲しげに腰を下
ろし、首をうなだれている）
ゼファニヤ（立ち上がって老人のコラヤ
を見下ろす。背中を観客に向けている）
シェブナ（豎琴を引き始める）
全員（静かに、抑えた調子で歌う）
追い立てられ、呪詛の言葉を浴びせられ
心は砕け——
私たちは這い進んで来た
このバビロンの河のほとりまで……

恥ずかしめを受け、痛めつけられ
悲しく歌いながら——
私たちは辿りついた
バビロンの河のほとりまで……
失われた母、
うらびれ、荒れ果てた、
おお、母なる、シオン、
あなたはどこだ？ あなたはどこだ？
あなたには見えるか、この苦しみが
この悲しみが、この沈黙が？
私たちはやって来たのだ
バビロンの河のほとりまで……
おお、バビロンの河よ！
おお、巨大な河よ！
私たちの不幸の大きさと比べれば
お前の大きさが何ほどのものだろう？
さあ、水と一緒に私たちを流し去れ！
私たちは一緒に泳ぐだろう——
私たちの苦しみを運んでゆこう
お前と一緒に、海にまで！
ゼファニヤ（川上から水のなかに落ちる）
コラヤ（深いため息をつく）
アビガイル（両手をもみしだく）
ハムタル もうすでに……もうすでに……
ゆっくりと幕が下りる

【訳注】

- ※1 旧訳聖書の登場人物で、第3、第4幕に登場する偽預言者アハブの父。
- ※2 以下、シェロミトまで、旧訳聖書に登場する人名。ただし、設定はフィクション。
- ※3 バビロン捕囚の時代の偽預言者のひとり。エレミヤの預言を不満としてエルサレムの祭司に手紙を送る。聖書には登場しない地名だが、ネヘラミ出身者としてネヘラミ人シエマヤと呼ばれる。
- ※4 族長イサクの子で、双子の兄。巧みな狩人となるが、性格は粗野かつ衝動的で、長子の権利を弟ヤコブに売ってしまう。
- ※5 ユダ王国第19代の王。ネブカドレツアルによってエルサレムが包囲されているときに、死んだ父の後を継いで18歳で即位したが、ネブカドレツアルの軍に破れ、家族、家来、高官とともにバビロンに移された。
- ※6 旧訳聖書に登場する人名。この戯曲では第3幕、第4幕にアハブの現在の恋人として登場する妻ハダサとのあいだに生まれた息子という設定。
- ※7 カルデアは元来はチグリス・ユーフラテス川の下流地域、バビロンとペルシア湾に挟まれた地域を指していたが、バビロニア帝国最後の王朝時代にはバビロニア帝国全体を指すようになった。その国の住民はカルデア人と呼ばれ、ネブガドレツアル王のもとでその文化は最盛期を迎えた。
- ※8 預言者エレミヤを救ったアヒカムの子で、エブガドレツアルによってユダの総督に任じられたが、第2幕の終わりで伝えられるように、ミツパで王族の一人イシュマエルに暗殺される。
- ※9 バビロニア帝国の王。紀元前598-597年に最初のパレスチナ遠征を行い、エルサレムを包囲し、ユダのヨヤキン王、預言者エゼキエルら、祭司、軍人、役人などをバビロニアに連行した（第1回バビロン捕囚）。さらに約10年後、2度目の遠征を行い、エルサレムを徹底的に破壊し、ユダをバビロニアの属州に加え、ユダの多くの市民たちをバビロニアに連行した（第2回バビロン捕囚）。本戯曲は、第2回のバビロン捕囚を背景としている。

君も私と同じようにディアスポラの道を進んだ、ひとりのユダヤ人である私と同様に、君も私と同じように豎琴を携えている——
シェブナ（恥ずかし気に）

私の豎琴！ 私の豎琴！

私はこれを壊して、ユーフラテス河に投げ込むつもりです……

アブタリア 壊したり、河に投げ込んだり、そんなことをしてはならない——

シェブナ 豎琴も、わが身も、河に投じるのです……

私はいったい何者でしょうか、

アブタリアさん、

あなたと比べるなら？

おお、レビ人のひとよ、

神殿で

力強く歌うひと！

あなたの歌はあらゆる理解を超えていて
預言者の言葉よりも気高い……

アブタリアさんがいるあいだは——

シェブナは消えていなければならぬ
い……

（全員に向かって）

私を隠して、私の豎琴を壊してください！

アブタリア おお、神よ——

これは称賛でしょうか、嘲りでしょうか？

私はこう信じてきたのです、

私の歌は人々の心を高めるものだ

私の歌は陽の光のようだ！

人々の心を明るくさせるものだ、と

そうではなかった……

私はもはや私の歌を信じはしません！

私の歌は夜のです——

人の気を滅入らせる、夜のです、

私の歌は君の勇気をくじき、

君を混乱させ、

君から安らぎを奪い、

君を悲しくさせた——

私はミツバチのようなものだ、

私の甘い蜜ではなく、

針だった！ 針だった！

私がこの男に差し出したのは……（悲しげに）

私は……針で刺したのだ！（不意にシェブナの方を向く）

君はユダヤ人か？

シェブナ そうです！

私はユダヤ人です、

そして、あなた——レビ人のあなたは、
祝福された方です……

アブタリア ただの人間だ！

君も私と同じように

シオンで楽しく暮らし、

私と同じように、砂漠の砂のなかで苦しんだのではなかったか？

こちらへ寄せ！

君の豎琴を寄せ、

さあ、さあ、早く！

私の豎琴を手にしろ、さあ、

私は君の豎琴を手にする——（シェブナと豎琴を交換する）

我々は豎琴を交換した、

君の豎琴はもうないし、私の豎琴だって——

もうないのだ……

こうして、我々の心は一つ——

そう、一つの心となったのだ、

よいことも悪いこともそこにはある——

きのうそこには喜びがあった、

きょうあるのは苦しみだ……

私たちは見ず知らずのあいだだったが、

私たちは知り合い以上の関係だ——

一つの国の子どもなのだから、

私たちは兄弟だ——そうだ！

そこには、同じ一つの不幸と

同じ一つの恥辱がある……

みんなは君をどう呼んでいるのだ？

シェブナ (首をうなだれて、沈黙している)

アブタリア 私は君の瞳のなかをのぞき
こんだ——

私の前には、すっかり開かれた心があった

私のなかで一つの歌が始まるように、

君のなかの一番奥深くにあるもの、一番
隠されているもの

それが歌い始めていた

そして、その歌は私のなかで大きく燃え
上がったのだ——

私は君の心のすべての隅を確かめたよう
なものだ、

私の前にすべての扉は開かれていたのだ
から

何もかも明らかだ、

ただ君の名前だけは——

君の名前だけはまだ私は突き止めること
ができないのだ！

君は何と呼ばれているのだ？

シェブナ シェブナです。

アブタリア シェブナ……シェブナ——
誰の息子だ？——

シェブナ (老いたコラヤを指差して)

私の父です——この——

この老人、信仰心の篤い年寄りが……

アブタリア このひとか！ 私は祈りの
家で見かけたことがある！（記憶を探る）
コラヤだ！

シェブナ そうです、コラヤです。

シェマヤ (その場から跳び上がって)
コラヤ！

運命がどんな避けがたいこと、

不思議なことをしばしば我々にもたら
そうと、

私はあなたがたと一緒に歩む。

手に手を取って

すでに何週間も！ 何週間も

我々は、疲れ果て、崩折れながら、何日
もさまよった

まるで炎のように……

何日も——

焼けつく砂のなかを

我々は足を引きずった、引きずった！

死んでもいなければ、生きてもいなかった！

眠りもせず、荒野のなかの、荒れ果て
た夜を重ねて、

私は自分が誰と行をともしているのか、
知ってはいなかった。

コラヤ！ あなたはバビロンにひとりの
息子がいるでしょう？

コラヤ (不機嫌そうに)

そうです、バビロンで……わずかばかり
の楽しみが——

シェマヤ アハブ^{*4}！

コラヤ アハブ、そうです……哀れな

子よ！

シェマヤ 預言者です！

コラヤ それは本当ではありません！
あの子のしたことはもっと悪いことで
す……

思い出させないでください、あの子の
ことは――

あれは深い罪に落ちたのです……

あなたはエレミヤの手紙をご存知でしょう？
彼は神によって呪われているのです――^{※5}

アビガイル お父さん！

コラヤ (シェマヤに)

あなたは私の息子をご存知ですか？

シェマヤ 知っています……

コラヤ 会われたのですね――

どこで、ですか？

どこであなたはあの偽りの預言者と会わ
れたのですか？

シェマヤ バビロンです。

アビガイル (その場から跳びあがって)
バビロンですって、本当ですか？

シェマヤ ええ、私は……以前バビロン
に来たことがあるのです……

あのときも同じように困難な旅でした――
困難でもあれば、後悔に満ちてもいて……

同じ鎖の響き、

同じ熱い砂、

それにくわえて……私は知っています――
私はバビロンに以前にも来たことがある
のです！……

アビガイル いつですか？ いつのこと
ですか？

シェマヤ 私は砂漠に以前に1度入った

ことがあるのです。

コラヤ あなたはそんなに若いのに――
もう2度も流浪の旅をされている！

シェマヤ ネブガドレツアルが若い私を
まだ捕えていました……

私は彼のお気に入りだったのです！

彼は私を王とともに、ヨヤキンととも
に、追い出したのです。

コラヤ それに私の息子とともに！ あ
あ、わが子よ……あなたは私の息子をご
存知ですか？

シェマヤ 彼は私の隣人でした。

コラヤ あなたは何と呼ばれているので
すか、あなたの名前は？ (記憶を探って)
シェマヤさん、そう……シェマヤさんだ！
息子のことをどうかあらためてお話し下
さい……

シェマヤ (静かに)

そう、シェマヤです――

コラヤ シェマヤ……ああ、あなたはほ
んとうにあの方だ！

どうして私はそれを忘れていたのだろう？
あなたはバビロンにすでにいらしたこと
がある――

あなたこそあの方だ！ あの方だ！

あらゆる時代のなかでもっとも悲しみに
満ちたユダヤ人、

偉大なる哀悼者！

あなたはあの方だ、あの方だ――

バビロンでのあなたは美しかった、

遠くから見ても美しかった――

近くでならあなたはもっと美しい！

あなたの黙した悲しみ、あなたの静か

な嘆き——

そして、あなたの深い哀悼の振る舞い、
ああ、シュマヤさん……かのネヘラミの
人！

シュマヤさん……あなただ！ 不幸な
ことに、

これは間違いありません——

あなたはエレミヤの手紙のなかのシュマ
ヤさんだ……

ネリヤの子バルクが私のもとにいまし
た、

彼が私にその手紙を読んてくれたのです
……

彼がその手紙を読み、さらに多くのこと
を私に語ってくれたのです……

その手紙はあなた方ふたりを呪っていま
す……私も、大いなる痛みのなかで、

両手をもみしだきました、

「おお、神よ！」と

私の願いは、あなた、シュマヤさんが、
あんなことの代わりに

私のアハブを私の国の外へ連れ出してく
れることでした、

私に必要なのは辱めを受けた息子であっ
て、辱めをする息子ではありません！

ご容赦ください、シュマヤさん、私たち
は生と死の境にいます！……（彼の
足元に重たく倒れる）

シュマヤ（重たく彼を抱き上げ、傍ら
の岩のうえに置き、その横の岩に身を投
げ出し、打ちのめされた様子で、その岩
のうえにじっと座っている）

アビガイル（父とシュマヤを不思議そう

に見やって）

いったいどうしたのですか？（父に向
かって）

あなたは彼に対して罪を犯したのです
か？

コラヤ 私ではない……私ではない……
わが子よ！

倒れようと、祈ろうと

彼のもとには赦しがある……

篤い祈りを捧げておくれ、

アハブのために、お前の兄の罪のために
……

あの子は自分の妻を誤りに導いたのだ！

お前はエレミヤが書いていることを読ま
なかったのか——

彼はそこでははっきりと書いている（両手
で頭を覆う）

アビガイル いったいどうしたというの
です？（気もそぞろに、父の隣に腰かけ
たまま）

アブタリア（豎琴の弦を強くかき鳴ら
して）

さあ、シェブナ、私のように君の豎琴を
手に取れ、そして、私のように弦を強く
かき鳴らせ、

我々がすべての解決を見つけよう、我々
はそれを見つけたのだ。

すぐに、私と一緒に、私たち自身の太陽の
光のもとで、ちょっと演奏してみよう——

さあ、すぐに、太陽は解決してくれるか
ら……太陽はもう解決しているのだから！

さあ、歌おう、歌い始めよう、私と一緒

に歌え！
世界の夜明けだぞ、夜は明けたのだ、歌
のなかで世界の夜明けが始まったのだ。

歌え、歌え……歌だ！
何を不安がっている、
どうした？ 難しいのか？
歌え！ 歌え！
すると君は軽やかな気分になる——
歌え！ 歌え！
すると君は憂鬱な気分になる……
もっと歌え——
すると君はふたたび明るい気分になる！

歌え、歌え——歌だ！
お前の願いなんて口にするな——
そんなこと口にするな、歌え！
歌だ——お前の魂で溢れた歌——
それを注ぎ出せ！
魂から喉へ——
河へ！
岸からはすでに水が溢れ出している、
いまでは君の瞳は濡れている、
瞳は明瞭で、
君は軽やかになった、軽やかに！
歌え、歌え！
歌は夢であるとともに現実だ、
歌は目覚めているときに見る夢、
笑いながらの涙なのだ、
歌え、歌え——歌だ！
歌は願望であり、諦めだ——
歌え——私を眠らせてくれ、
影で、光で、私を眠らせてくれ……

歌え——私を眠りから引き剥がしてくれ
歌え、歌え——言葉なしに
物語を語れ——もっと明るく、もっと明
るく！

歌え——歌うことは、人間の思想の、
出発点であり終着点だ——
歌だ！
歌え、シェブナ、歌え、君はまだ最初の
者になることができる——
歌え、歌え、君は私の堅琴を持っている
……始めて、終えるのだ——頼む！
シェブナ（堅琴の弦を掴み、歌う）

詩篇第131章

第1節

主よ、私の心は驕ってはいません——
ここでいま、私はあの歌を歌います、階
段を上りながら！
ダビデの歌を、彼の旋律で歌います。

神よ！ あなたへの信仰で一杯の私の堅琴
を、どうか私から奪わないでください——
私は私の瞳を高く掲げはしませんでした
……

1度として大いなるもののもとへ趣いた
こともありません——
ただ私が不思議に思うことと言えば——
私が見捨てられてはいないことです……

第2節

私は私の魂を、母の胸にいる幼な子のよ
うにしておかなかったでしょうか？ 私
の魂——私のなかで引き裂かれた幼な子、

愛らしい幼な子—

第3節

希望を持って、希望を持って、イスラエルよ、
信仰篤く、神に希望を持って！

さあ、希望を持って、いまも、そしてこれ
からも—そのようにして永遠に……

アブタリア ほら、うまく歌えたじゃない
いか！

君は豎琴を目一杯使っていたじゃないか、
君の歌い方はまるで

アサフの子らのひとり※8のようだった……

シェブナ 私は階段を上るようにしてあ
の歌を歌ったのです

あの歌は神殿の扉のための歌……扉のと
ころの歌なのです！

アブタルヤ 君にはたくさんのユダヤ人
の扉の歌に聞こえる！

デビル※9に入ることのできないすべての放
浪者たちが

君の聴衆だ！

すべての放浪者たちが—

彼らは神殿の山の高いところに立ってい
る、彼らは横たわっている—

階段に、

彼らはあらゆる道に散らばっている

神の家に至るあらゆる道のうえに—

おお、あんなにたくさん！ あんなにた
くさん！

夥しい数で！

妻を連れ、子どもを連れ、

子羊を連れ、山羊を連れて、

エルサレムの全土が彼らの胎、

空が彼らの屋根だ—

風が

一番神聖な山から吹くそよ風が、

彼らに言葉を届けてくる、彼らに旋律を
届けてくる

遠くまで、遠くまで、さらに遠くまで、

ダンから※10やって来た人々にも、ペエル・
シェバから※11の人々にも……

おお、祝福されたそよ風よ、彼らを喜ば
せ、彼らの心を高めよ、

彼らを眠りに誘うことだけはしてくれるな、
彼らを眠らせるな！

彼らは横たわっている、横たわっている
そして、「主よ、私の心は驕ってはいま
せん」という言葉に耳を傾けている

「階段を上りながら」という言葉に耳を
傾けている—

彼らは耳を澄ましている、耳を澄まし
ている—どこからやって来るか知ら
ないで！

あの歌は天から聞こえてくるのか？

それとも、敷居から聞こえてくるのか、
神殿の敷居から？

自分が歌うということを、

私はいつも一つの幸運と受けとめてきた
—

喜べ、喜べ、シェブナ、うまく歌えたで
はないか！

シェブナ それでも私は、神殿の扉のと
ころで歌ったものではありません—

私は、扉のところの歌を歌ったに過ぎま
せん……

あなたが私に与えて下さった豎琴は、
いまではあなたから感謝を欲しがっています……

あなたは私の豎琴をお持ちです——
それは震えています、ほら、あなたの手
のなかで。

どれほどあなたに弾かletたいと思ってい
ることでしょう……

どうかあなたも歌ってください

デビルでのあなたの歌を……

歌ってください、褒め称える歌を、
讃歌を！

アブタリア（豎琴の弦をかき鳴らして）

聞け、みんな聞け、

大地は語らない、

空も語らない——君たち、よく聞いてく
れ、空と大地は語るか？

それらは語らない、

空と大地は歌を歌う

不安気に歌うのだ

ここで私は喜びをもって歌い始めよう！

シオンで夜明けがどんな具合に始まるか、

君たちは見たことがあるか？

私は君たちにそれを語るのではなく、

歌って聞かせよう、

歌うほうが私にはたやすいのだ……

私はそれを通りて歌おう、市場で歌おう、

「最初に東の山々の頂上が、

明るく、だんだん明るく

燃えはじめる。

それからようやく差してくる、

最初の光の筋が、純化された光の筋が、

天上からシオンへと——

するとシオンが明るくなる——ほら、夜
明けだ！

すると盲でも目が見え始めるし、

聾でも耳が聞こえだす、

信仰心を持たない奴にも——信心が芽生
えはじめる、

口下手も雄弁になるし、

貧乏人は金持ちになり、

金持ちは貧乏になる——

貧乏にだって——何てことだと叫びがあ
がるが、

あくまで比較のうえでのこと、

シオンに注ぐ、

明るく澄んだ光と比べてのことだ」

全員 シオンに注ぐ、明るい光と比べて
のことだ！

アブタリア（豎琴の弦をいっそう強くか
き鳴らして）

「君たちは知っているか、

シオンで、エルサレムの山で、朝の紅が
どんなふう目覚めるかを？

君たちは驚が飛び立つところを見たこと
があるか、

翼をぴんと開いて飛び立つ驚を？

いや、そんなものじゃない、比べもの
にならないぞ！

君たちは知っているか、さあ、言ってくれ、

東雲が母なるシオンの睫でどんな具合に
始まるか？

君たちは聞いたことがあるか、稲妻が雷

鳴とともに始まり、

そして、炎を花開く様子を？

いや、そんなものじゃない、比べものにならないぞ！

君たちは知っているか、シオンで夜明けがこんな具合に明るみ始めることを！
千の太陽からなる光だろう？

君たちが大きく目を見開いて見たのは大きな波だ、その波は一つの源泉を見つけないと願っている——

そして、見つけたのだ！

シオン、お前、清らかな源泉よ！」

これで君たちには分かっただろうか
朝がその眠りからどのように目覚めるか、
そして目を覚まして

シオンの山がその睫を開き始めるかが？
おお、太陽ではない……神が天を去つたのだ

去って、シオンに降り立ったのだ——

おお、真実の、本当の神が！

全員 真実の、本当の神が！

異邦人（聴衆のあいだを大急ぎでかき分けて、舞台の中央にやって来る）

誰が行ってくれますか？ あなたがたのなかの誰が？

私と一緒にすぐに

曲がりくねった道を、こっそりと歩みをともにしてくれますか？

誰が私と一緒に歩んでくれますか、故郷への道を？

ユダへの道を！

誰が？ 誰が？ さあ、手をあげてください！

コラヤ ユダは燃えています！

ユダは燃えています、炎上しているのです！

ユダの子どもたちは流浪のなかで疲れ果てています……（異邦人に向かって）
あなたはどなたですか？

どうしてそんなにユダに行きたいのですか？

異邦人 私はユダヤ人ではない、あなたがたの同胞ではありません——
私はそうなるでしょう！

私はあなたがたの同胞になりたいのです……

全員（全員が口々に静かに何か言う）

異邦人 あなたがたは私がそうするのを拒むことはできません、

あなたがたは私がそうするのを禁止することはできません！（アブタリアに）

あなた！ あなた！ あなたのシオンの歌、そして、痛みに満ち、苦しみに満ちたユダヤ人——

あなたがたは私の心を入れ替えさせました、大いなる痛みと大いなる喜びのなかで！

おお、あなた、聖なる、歌びとよ！

おお、ユダヤ人たちよ！ 神によって崇拜され、讃えられ、

それによって苦しみを与えられている民族よ……

あなたがたはもっとも困難な苦境をすでに示しました、

いまやあなたがたは、いくらか、たやすいことをしてみせるのです、

あなたがたは私の心を改心させました、

私の顔を変えさせました——
私が誰か、みんなはきつともう分からな
いでしょう……

シェマヤ お友だちよ、元のままでいて
ください、

心も顔も——

どんなに異なっていようと——それぞれの
の心は輝きますし、
それぞれの顔から、違った光が差すので
す……

どうか元のままでいらしてください！

異邦人 私は異教徒です。

シェマヤ 異教徒ですって？

それなら、大歓迎です！

元のままでいてください——

それでも空は青く、

私たちの大地は黒い——

心も、顔も、

元のままでいてください！

異邦人 どうか私を追い払わないでくだ
さい、シェマヤ、私を追い払わないで！
シェマヤ！

私は目撃したのです、

あなたがユーフラテス河に飛び込むと
ころを——

そして、バビロンの水から、

新しい解放者が現われるところを——

シェマヤ！（アプタリアを指して）

そして彼——彼は歌った、

その歌からは注いでいました、

7日分の陽の光が——

おお、シェマヤ、私を追い出さないでく
ださい、追い出さないで！

シェマヤ 神よ、ご加護を！

私はいっそう愛しているのです、
ユダヤ教徒になる異教徒よりも、ほんど
うの異教徒を、

私はいっそう愛しているのです、
ユダヤ教に改宗する異教徒よりも、異教
徒らしい異教徒を——

異邦人 そんなこと言わないでください！
そんなことをおっしゃらないでください
……（懇願するようにして）

青い空に賭けて、

緑の草に賭けて、

美しいシオンに賭けて！

私はシオンに行きたいのです！

私を連れていってください

あちらへ……あちらへ……

シェマヤ おお、そんなことをしてはな
りません！

私たちの頭上とあなたがたの頭上で

青い空は同じではありません……

それが違っているのはいいことなのです！

似ていること——それは貧しいこと、違

っていること——それは豊かなことです！

青空——それがこちらではいっそう深く、

あちらではいっそう澄んでいる……

こちらではほとんど雲がなく、あちらで

は雲が多い……

青空のなかの黒い雲はひととき美しく、

小さく始まったものがいっそう小さいわ

けではありません……

私はシオンのことを言っているのです——

アッシリア人なら「ニネベ^{*12}！」エジプト

人なら「メンフィス^{*13}！」と言うでしょう

緑なすシオンに行ってはなりません、行
ってはなりません……

異邦のいまは盛りの花ではなく、自分の
萎れた花を携えて、行ってはなりません！
異邦の緑はやはり緑ではなく、カビです！
あなたの大地を替えず、あなたの空を偽
らないでください……

そんなことをしないでください！

異教徒であれ、ユダヤ人であれ——

誰もがこう自分に言い聞かせるものです、
私はやはり私自身であるのだ！

異邦人 あなたは私を妬んでいるのです
か？——妬まないでください！

あなたの神から私に注ぐ光を妬まないで
ください、

神の真実が私に注ぐのを妬まないでくだ
さい、

私への神の慈悲を妬まないでください！
いったい、私のために、あなたへの神の
光が減るとでも言うのでしょうか？

神の光には限度などありません！

草原に、緑の草原に降り注いでいる、

神の光が何よりの証明です——

どうか私を妬まないでください！

シェマヤ あなたは私の言うことを誤解
されたようです——

あなたがいまお話しされた光、
空から降り注いでいる光——

ここにいる私たちすべてを暖め、優しく
愛撫してくれている光、

私たちすべてに輝きを与え

シャワーのように降り注ぎ、

みんなを一つにしている光——

この光はあなたのものであり私のものな
のです——

神の光をここで享受するために、
あなたは別人になる必要などありません
——

あなたは私の言うことを理解されていま
せん！

自分は誰かなどと私に言わないでくださ
い、私はそんなことを知る必要はありま
せん！

どこから来たかも言わないでください……

おお、出身地など言わないでください——
あなたはカルデア人かもしれない、アッ
シリア人かもしれない——

それでもあなたは、永遠の光を受け取る
準備が、

私と同様に、ユダヤ人と同様に、すべて
の信心深い人々と同様に、

整っているのです……

異邦人 私はあなたのおっしゃることが
理解できません——異教徒である私は
……

とはいえ、あなたも私の言うことを正し
くは理解されていません——

私は私の魂を市場で売ったりするでしょ
うか？

私は弱者のもとを去って、強者のもとへ
走ったりするのでしょうか？

貧しい者のもとを去って、金持ちのもと
へ走ったりするのでしょうか？

私が欲しているのは……神のもとへ行く
ことです！ 神はあなたがたのもとにい
ます、あなたがたのもとに！

神のもとへ！ 神のもとへ！ それはすべての者の神です！

私はあなたがたのもとに行きたい、あなたがたのもとに行きたいのです——

あなたがたが敗れ、

すべてを失くし、

打ちひしがれているがゆえに、

私は金持ちから貧しい者のもとへ

強い民族のもとから弱い民族のもとへ、

私は行きたいのです……

アブタリア 聞け！ 聞け！

彼は大地のうえで私と同じように歌っている……

しかも、詩篇を歌っている！

あんなに明瞭に、あんなに鋭く——

さあ、私の堅琴を手にとれ

そして、歌え、歌え、感情のすべてを

歌え！

自分の考えをもっと明るく……

聞け、聞け

彼は大地のうえで私と同じように歌っている！（異邦人の方を向いて）

あなたは

確か

私たちの聖なる神殿にいらした？

異邦人 いました……（彼は頭を深くうなだれる）

アブタリア あなたはそこで何を目にされました？

異邦人 （頭をうなだれたまま）

目にもしましたし、耳にもしました——

（頭を上げる）

私はあなたがたの神殿を破壊しました。

私はネブザルアダンです——（短い、沈黙の間）

全員（しばらくして、驚いてそれぞれの場で立ち上がり、驚愕のあまり2、3歩さがる）

ネブザルアダン もちろん、あなたがたには思いもよらないことでした！

あなたがたはよろめいて、

すべてを失いました！

あなたがたはみんな私から逃げようと思いました——

私も、私もまた、私自身から逃げたかったのです！

あなたがたの不幸が私を呼んでいます

——まるで大いなる幸福のように——

あなたがたは、あの不幸な出来事において、私を高めてくれたのです、

私は行きます、シオンに戻る道を行きます——

誰が私と行をともにしてくれますか？

全員（沈黙）

ネブザルアダン おお、どうか私を恐がらないでください！

私はユダヤ人ではありませんが、

あなたがたの同族も同然なのです——

誰がシオンへ行きますか、言ってください？

コラヤ シオン！ シオンはやはり破壊されています——

シオンの石は炎をあげています……

ネブザルアダン 下は燃えていても、上は、上は、夜明けだ！

アブタリア 聞け！ 聞け！

ネブザルアダン 誰かいないか！ 私と一緒にユダへ行くのは誰だ？

コラヤ ユダは見捨てられています、もう燃やされています……

ネブザルアダン 見捨てられたユダ、燃えているユダ——

そのユダが私には身近なものとなった、いっそう身近なものに……

荒れ果てた国、それは、まさしく苦悶する人間のように——

心に多くを訴えてくる。

アブタリア 聞け！ 聞け！

彼は大地のうで私のように歌っている！

ネブザルアダン 私はネブザルアダン——歌い手ではない！

征服者だ——

私はあなたがたのもとにやって来た、憎しみと怒りをもった征服者である私は——あなたがたのもとにやって来ざるをえなかったのだ、

あなたがたの大いなる痛みのゆえに……私は行く——

私はこれから秘かな道をとおって這い進みはじめる、

まっすぐでも平坦でもない、

曲がりくねった道をとおって——

それはしかし、

まっすぐで、平坦な道に通じているのだ——

私はネブザルアダンです！

私を拒絶しないで下さい——

どうかいま、私をあなたがたの仲間に加えてください、

私は羊でありたいのです！

あなたがたの血を流させ、破壊した者、あなたがたの首を絞めた死刑執行人である私を、

どうか、あなたがたの仲間に加えてください！

ユダヤ人を迫害したあの男は、

私をいっそう迫害します——

私はネブザルアダンです！

私を求めて、彼らは捜索しています、あらゆる山のなかを、あらゆる草原のくぼみを、

もちろん砂漠のなかまでも、

どんな洞穴も見逃さず——

彼らはムラド^{*14}の人々に問いかけます、ベ^{*15}ルの人々に問いかけます、

「どこだ！」「どこだ！」

彼らは世界中を捜索しています、

彼らは尋ねています、

若者にも、年寄りにも、

子どもにも、大人にも、

彼らはあらゆる天幕を捜索しています、

あらゆる家を、

「どこだ？」「どこだ？」

「ネブザルアダンはどこだ？」と

彼らは犬のように私を追い回し、

あらゆる道、あらゆる場所を嗅ぎまわっています——

いたるところで喚き立て、

振りかざされているのは、

ネブガドレッツアルの怒りのこぶしです、

彼はゲットーのなかで、すべての教会のなかで訊ねています、

「どこだ？」と

彼はひとときも休みません——

どれほど私を捕まえたいと願っていることでしょう！

コラヤ（驚いて、彼を仲間に加えようとして、追放者たちのあいだで立ち止まる）そこに身を隠してください、そこに深く、深く……

ネブザルアダン（舞台の中央に、震えながら立ったままにいる）

私はリブラ^{*16}からやって来た、

私はそこで、まったく卑劣な位置にある彼を、大いなる不正のうちにある彼を目にしたのです……

煽動され……いや、煽動されたのではない！ 彼ただひとりが

扇動者だったのです

彼ひとりが、ネブガドレツアル王ひとりが——（さっと身を後ろにやって）

彼ではない、違う、あのバビロニア人ではない！

ゼデキヤ^{*17}だ！ 従順に立っていたのは——

彼が王だったのだ！

ネブガドレツアルは毛むくじらの両手を胸のところで組んでいた、

そして、父親の目の前で

命じたのだ、

子どもたちの殺戮を——

彼らは子どもたちを殺戮しました……

そのあとで、彼は父親の両目を焼いたのです——

全員 おお、真正なる神よ！

ネブザルアダン そのあとで！ そのあとで！ なぜさきに焼かなかったのでしょうか？

おお、シオンの神よ！

空の神、地上の神——

どうか私にいまお答えください、なぜ彼は順番を逆にしなかったのでしょうか？

なぜ父親の両目を

さきに焼いておかなかったのでしょうか？

父親を盲目にして、

それから子どもたちを虐殺しなかったのでしょうか？

つぎからつぎへと子どもたちを……

あなたがたはすでに血塗れの、赤い草をご覧になったでしょう？

全員（神に嘆きの声を発する）

なぜですか？ 神よ！ なぜですか？

ネブザルアダン おお、ゼデキヤの両目、刺し貫かれた彼の両目——

私の後ろを追いかけな！

私を追い回すのはネブガドレツアルのはずだ、

彼のベル、彼のムラド、彼の荒れ果てた偶像だ——

彼の両目、シオンの王の両目はけっして私を追い回さない！（全員に向かって）

あなたがたの目を暗く閉じてください、

あなたがたの青い目を——

あなたがたはゼデキヤの目をしている！

突き刺され、燃え上がる両目！

両目！ 両目！——血を流している心臓

のような、
燃え上がる両目、
ゼデキヤの両目——
おお、やめてくれ！
閉じてください！ 閉じてください！
全員 おお、ゼデキヤ！
ネブザルアダン おお、ユダの王——
私はあなたの兄弟でありたい！
私はあなたがたの兄弟だ！
ユダヤ人たちよ！
その岩をこの真ん中に転がしてください——
私はそれに腰かけましょう——
そして、私の髭をそり落としてください！
そうすれば、ネブガドレツアルが私の顔を覗き見ても——
私だと分からないでしょう、
そして、たとえ彼が私の心のなかを覗きこんでも、
もちろん、彼は私だと分からない！
「ネブザルアダンはどこだ？」と
さあ、私の髭を剃り落としてください、
バビロニア人の髭を私の顔から、
剃り落として下さい——
私が自分の心からバビロニア的なものを
剃り落としたように！
いまや私には明けそめたのです、
大いなる光が、
大いなる愛が、
あなたがたの姿が私の心のなかに食い入
って来たのです、
それで、私の良心にあなたがたの姿が重
くのしかかることもありません……

シェブナ (彼を舞台の中央の岩のところにまで連れてゆく)
ネブザルアダン (背中を観客の方に向けて、その岩に腰かける)
シェマヤ (カミソリを手にネブザルアダンと向き合って、観客の向かい側で)
私が剃りましょう、
あごと頭を剃りましょう——
深い悲しみのなかにいるユダヤ人のように……
孤独で侘しい日々のなかのユダヤ人のように、
痛みと不幸と後悔の日々のなかのユダヤ人のように……
ユダヤ人は側髪ベイエスは残しておきますが——
ネブザルアダン 残しておいてください！
(その場で跳びあがり、回りながら中央まで行き、顔を観客に向ける。顔と頭はすっかり剃られていて、誰か分からない)
シェマヤ さあ、すっかり剃りましたよ！
ネブザルアダン (感謝の身振り)
シェマヤ あなたが望まれたのですから！
ネブザルアダン シェマヤ！
あなたは私の顔から髭を剃り落とし、私のなかに深くユダヤ人を植えつけてくれた！
シェマヤ あなたが望まれたことです——
私があなたを剃りました……さあ、どんな具合に剃ったか、よく調べてご覧なさい——
ネブザルアダン いまあなたは私を産み落としてくれたのだ、まるで女が子どもを産むように！

シェマヤ そんなこと言わないでください！

あなたはまだ異教徒で、
ユダヤ人ではけっしてありません——

ネブザルアダン 私はユダヤ人だ！ ユ
ダヤ人だ！ おお、シェマヤ——

シェマヤ あなたはまだ正当には……

ネブザルアダン 私はもう奴隷ではない、
自由なあなたたちの側に立っている——
ユダヤ人だ！

アブタリア 聞け！ 聞け、
彼は歌を歌っている！

ネブザルアダン 私は行く——（剣を取り
出す）

この剣で私は何をしようか？

それに私の槍で？ 槍はどこだ？

あなたがたの誰か、槍を持ってきてくだ
さらないか！

シェマヤ 誰がそんなことできるでしょう？

あなたが投げ入れたのです、

河に、

大地に葬ったのです。

ヤコブはエサウから長子権を買い取りま
した——

先に生まれたことによる、最初の輝かし
い時間！

そんなものは、エサウには何の価値もあ
りませんでした——

とはいえ、ヤコブはエサウの剣は買いま
せませんでした……

ネブザルアダン（剣を見つめる）

私は恥ずかしい……

シェマヤ さあ……さあ……

とても恥ずかしいことです

剣とあなたと！

ネブザルアダン そうだ！ そうだ！

私は異教徒だ、

人殺しだ！（剣を鞘から引き抜いて、空
中で振り回す）

ネブザルアダンだ！ 私だ！ エルサレ
ムの通りで、

剣を人々の頭上に振りかざし、頭を切り
落とした男、

それが私だ、

まるで納屋でそうするように、たくさん
の頭を切り落とした、

口に叫び、目に涙をたたえた人々の頭を、
次から次へと切り落とした……

私は火のように、

あなたがたの神殿に押し入り、

祭壇のままで

祭司たちを殺した、

彼らは黙って、声もあげずに、

奴隷状態で殺された

死に絶えた、

彼らの血は犠牲者たちの血と混じりあった、

同じ赤い色、

同じ匂い——

私は契約の箱に跳びかかり、

歌っているレビ人たちを殺戮した——

殺戮される彼らは、身を投げ出し、歌っ
ていた……

恐ろしい光景、ねえ、恐ろしい光景でしょ
う？

全員 恐ろしい光景！……（追放者の多く
の人々は彼に拳を掲げて、ぶつぶつ言う）

シェマヤ 黙れ！ 黙れ！

ありえないことだ、あなたは気がどうかしているのだ！

あなたは嘘をついている！

ネブザルアダン これは本当です！ 本当のことなのです！

全員 (まわりでぶつぶつ言う声が高まる)

シェマヤ 私はあなたの言うことが信じられない、とても！(みんなに懇願して) おお、彼の言うことを信じるな！

彼の言うことを信じたりしないだろう、ユダヤ人なら！

彼の言うことを信じるユダヤ人なんて、私たちのなかにはいないはずがない……

あれは悪い夢だ！

まったくの絵空事だ！

ネブザルアダン 本当の話です！ 本当の話なのです！

全員 (怒りに駆られて拳を掲げる)

シェマヤ 彼に手をかけてはならない！

1人の男 あれは本当の話なのだ！

シェマヤ 信じるな、信じるな、そして、怒りにかられて、拳を彼に振り上げたりするな…… おお、彼の言うことを信じたりするな、彼の言葉を信じるな、ひとことも——もしも彼がそれをしたのなら、それを口にするはずがない……

そして万一、あれが本当の話なら——彼には大いなる哀れみが向けられるべきだ……

ネブザルアダン あなたがたは両手を私に掲げている——
打て！

私は盗人だ、

私は、あなたがたの子どもたちを、待ちきれずに、

母親の胎のなかにいるときに打ち据えた！
私を打て、私を！

私は、最後の日を消し去ったのだ、年とった連中から。

シェマヤ (絶望して抑えきれずに) 悪党め！

ネブザルアダン (苦く笑って)

ほら、見ろ、

彼も堪忍袋の緒を切らした……

彼もようやく信じたぞ、そうだ…私の罪を信じたぞ

君たちだってそうだろう！

哀れみなんてありはしない——さあ、打て！

君たちの美しい町の数々を

私は燃やした、

君たちの家を煙で追い払ったのだ……

私に手を上げたりするな——

無力な素手をあげて、

バチンと打つ、

それでは弱い傷しか残さない、

蚊よりも弱い刺し方だ……

さあ、私の剣を取れ！

私の剣を取って、刺し殺せ！

私の槍——

あれを手にして私を刺せ！

私はカルデア人にだけ自分の行方を隠しているのであって、

ユダヤ人に対してはそうではない！

みんな聞け、

聞け、

もしもユダヤ人とともに生きることがないのなら——私はユダヤ人によって殺されたいのだ！

コラヤ あなたは生きなければならない、生きなさい！

私は承知しています、

あなたは私たちの最良のものを奪った、私たちのなかの最良の人々の頭を切り落とした、

私たちのもっとも美しい町を焼いた、

もっとも神聖なる家を焼き払った——

しかし、私たちの大いなる不幸について、あなたに罪はない——

あなたは神によって遣わされたのです！……

ネブザルアダン（しばらく石のように硬直して、はっと目覚める）

神によって！ 神によって！

おお、私に手を差し出してください、あなたの手を！

お年寄り、あなたはどなたでしたか、私には知り合いのように思える、

お会いしたことがありますか？ あなたとまるで同じようなひとと私は会った気がする、

違う、違う……あれはエレミヤだった！

彼だ、彼だ！ あなたと同じように聡明で、

陽の光のようだったあの男——

彼もそうだった！ 彼も私にこう言ったのだ、

「神だ！ 神だ！」

「あなたを遣わしたのは、

神にほかならない！」と

私はそのときは

彼の言葉がよく分からなかった、

彼の言葉は、私には、異邦の大胆な言葉のように聞こえた——

私ではない！

あの残虐な人間は私ではなかった、私の意志ではなかった、

私ではない！

私は道具だったのだ、誰か全く別の者の持つ目標の！

誰か別の者が私よりさきに走り出していた……

私ではない！

あなたがたの預言者の口が発した言葉——それがそのとき私に突き刺さった

まるで弾丸のように、

私ではない！

私は大いなる恐怖のための1つの道具に過ぎなかった……

おお、エレミヤ、あなたは恐れを知らぬ大胆な男だ！——

そしていま、私はあなたの口から同じことを、一つの慰めのように耳にした、

私は神によって遣わされた！

神から遣わされた私は、いまや身を翻して神の方へ向かう、

あなたがたの方へ——

神への道——それは同時に

あなたがたへの道だ！

私をそちらへ連れて行ってください、そちらへ……

あなたがたの土地へ、無理やりにでも、

あなたがたの大地へ、あなたがたの大地で生きるために！

あなたがたを握ね上げ、あなたがたを形づくった大地——

それはその精神をも私のなかに吹き込んでくれるでしょう……

私をそちらへ連れて行ってください——

おお、私は見出します、

そこでなら見出すでしょう

安らぎを……

おお、私を連れて行ってください！

コラヤ あなたの剣を折りなさい！

ネブザルアダン（自分の剣をまじまじと見つめる）

おお、哀れな剣よ——

シュマヤ さあ、さあ……

ネブザルアダン 剣、剣よ——

あなたがたはすべてをここで耳にした、私は神によってあなたがたのもとに遣わされた……

私も、私の剣もそうだ——

私の剣だって神からのものだ！（剣を振りかざす）

そうだ、そうだ、神からのものだ……

私は異教徒である、

私はあなたがたのもっとも神聖な天幕に、

むき出しの剣を振りかざして、

荒々しく、凶暴に、押し入った、

だから、私はあなたがたとともに道を行く、

血の河に至る道を——

あなたがたはそれについてはもういくらか分かってくださったでしょう？

でも、大事なことを聞いてほしい、

私は大事なことをあなたがたに話そう——

私はあの預言者のもとへ行っていたのだ——

……「ゼカルヤのもとへ行こう」と——

ところが、あなたがたは神殿で彼を殺戮した！

私は一緒に縛られた、

私のなかで、怒りが新たに沸き上がった、怒りの炎が燃え上がった…（鋭い嘲りの調子で）

あなたがたは知っている！ 知っている

あなたがたはこの手品を知っている……

あなたがたも、ちょうど私たちと同じようになる！

あなたがたは神殿であなたがたのあの預言者を殺した！

あの荒々しい動物があなたがたの皮膚からも這い出す……

あなたがたの血のなかで同じ毒が発酵する——

熱い妬みが私のなかで大きく燃え上がる、

あなたがたもそうか？

私はあなたがたのなかに1匹の子羊を見たいと願っていた、

ナイフに首を伸ばしている1匹の子羊を……

私が願っていたのは1匹の子羊だ——

けれども、私が目にしたのはライオンの

ユダ人、若いライオン、

異教徒よりも残酷なユダ人だった、

あなたがたも、ゼカルヤも！

あなたがたのあの預言者、死を求める残酷なあの男！

あなたがたのことで私が驚いたのは生涯

あなたがたのことで私が驚いたのは生涯

あなたがたのことで私が驚いたのは生涯

で初めてのことだった、
初めての戦慄が私の皮膚を駆け抜けた、
そして、神殿のなかで私を襲った驚愕
によって
私はあなたがたに魅惑され始めた……
おお、私に言ってくれ、ユダヤ人よ、さあ、
言ってくれ
あなたがたの何が私を怯えさせるのだろ
う？
何が私を怯えさせ、同時に魅惑するのだ
ろう？
それはあなたがたのあの預言者、死んで
はいないあの死者のせいだろうか？
あの預言者とあなたがた、あなたがた全
員のせいだ！
あなたがた全員がそうなのだ！（追放者
の方をじっと見据える）
私にはこう思えるのだ、私はあなたがた
全員の首をすでに切り落とした！
それなのに、あなたがたは——あなたが
たは生きている！
あなたがたはゼカルヤを、私はあなたが
たを——
私はあなたがたをシオンで殺戮したが、
無駄だった——
あなたがたは生きている！
私はもう一度驚愕をおぼえて、身を避け
る、避ける——
あなたがたは生きている！ あなたがた
は生きている！
預言者たちよ！（驚きと無意識的な喜び
でもって）
あなたがたはやはりこんなに違っている！

異教徒とはこんなに違っている……
あなたがたの殺戮の仕方は違っている、
殺戮されるということも、
あなたがたのもとでは違っている……
一つの妻から、
預言者たちと盗賊団が育つ……
あなたがたはやはり異教徒とはこんなに
違っている！
どうしてあなたがたは彼を殺したのだ、
意地の悪い男たちよ？
どうしてあなたがたは神殿で彼にナイフ
を突き立てたのだ？
あなたがたの預言者であるあの男は、ど
うしてそんなに悪しき相手だったのだ？
あの預言者はどうしてあなたがたに赦し
を請わずに
死を求めたのだ？
彼の熱い血、彼のまっ赤な血は、
おお、どうして彼の血は煮え立っている
のか？
そして、煮え立つことをやめないのか！
全員 ゼカルヤ！
ネブザルアダン（大声で叫ぶ）
私ではない！ 私ではない！
私の以前の神々でもない——
あなたがたの神であり、のちには——
あなたがたの預言者だ、私をつうじてあ
なたがたを殺し
殺戮したのは。
私は死んだ預言者の前に立って、こう
考えた、
どうしてあなたは死んでいないのか？
あなたの血は、どうしてそんなに赤く沸

き立っているのか？
どうしてあなたは落ち着こうとしないのか？
どうしてあなたはシオンの不幸で満足しよう
としないのか……
あなたは、あなたを殺戮した人々よりも、
いっそう残酷で、悪しき存在だ！
おお、ゼカルヤ！ ゼカルヤ！ あなたは
まさに復讐がしたいのか？
あなたの煮え立つ血の川に立って、
私は犬のように吠えている、
私は影になって立っている――
あなたは私の前に横たわっている、生ける
傷となって――
おお、預言者よ、いま私の手に鋭くナイフ
を差し出したりするな――
私はやはりあなたの最愛の人々を殺戮した
のだ！
あなたのもっとも美しい人々を絶滅させた
のだ
おお、私を^{そそのか}唆すな、唆すな！
私は死んだ預言者を前にして立って、こ
う考えた、
おお、誰の残酷さ、誰の残酷さが、
いっそう大きいのか？
民衆の残酷さか、それとも預言者の残酷
さか？
私は思いをめぐらし、こう考えた、
民衆は正しくない！
民衆は悪しきものだ！
真実^{マツト}は預言者^{ナビル}にあって、彼の怒りは真実
である……
全員 真実だ！ 真実だ！
ネブザルアダン そして、私は私の剣を

高く掲げた――（コラヤに向かって）
あなたは何と呼ばれていますか、白髪の
老人よ
耳が聞こえないのですか？
コラヤ コラヤです。
ネブザルアダン あなたはシオンから来
られたのか、言ってください？
小さな子どもたちを殺戮するように私が
命じたあの日、
あなたはどこにいたのか、
私がゼカルヤの血を踏み越えて、
ゼカルヤの血を鎮めようとしていたときに？
それは彼の意志だった、彼の意志だった
のだ！
全員 正しき神よ！
ネブザルアダン あなたはシオンから来
られた…あなたはあの日のことを思い出
す必要はない、よろしい！
どうしてあなたは私を止めなかったのか？
コラヤ 私は身を隠していました……
ネブザルアダン 身を隠していた……あ
なたは成功したんだ！
私は、地下室や洞窟にうまく隠れている
連中も、
ことごとく探し出して、
殺戮を命じたのだ――
私は、あなたがたの血で彼の血を鎮めた、
冷ました、
確かに、すぐにとはいかなかったが――
それでも私が鎮めたのだ！
私はそのように理解した……
私はあの預言者の気持ちが初めて分かっ
た、

そして、さらに——
さらに、あなたがたの気持ちも！
コラヤ！ 私は、
私はあなたを殺したのだ！（左右の追放者たちを指差して）
あなたも！ あなたも！
私は神殿であなたがたを引きずりまわした、
ゼカルヤを、あなたがた全員を——
そして、あなたがたの首を刎ねたのだ！
しかし、あなたがたは生きている！
生きているのか？（驚いて、下がる）
私はまたしても驚愕して、身を避ける、
避ける、
あなたがたによって、心は強ばり、混乱し、
肝をつぶしてしまう——
私は身を避ける——あなたがたへの厳しい跳躍を行なうとともに、
自分をあなたがたと結びつけておくために！（剣を折る）
私には惜しいことではない！
剣は神々のためのものであって、唯一神のためのものではなく、
あなたがたのためのものでもない！（壊れた剣の残骸を投げ捨てる）
1人の男（追放者たちの目から、壊れた剣を砂のなかに隠す）
ネブザルアダン 隠せ、隠せ、私の剣を、冷たい鉄を、
大地のなかに、冷たい大地のなかに……
私の剣は過去の象徴だ——
隠せ、兄弟よ、
私は自分自身の身も隠そう……
私は、身を隠した状態で、生まれ直すの

だ、破壊されたユダのなかで、
その澄んだ空のもとで……
私はあなたがたと同じようにユダヤ人でありたい！
たとえ私がそれに成功しないとしても——
私の子どもはそれを果たすだろう、
私の未来の世代は——
未来の世代は罪をその身から振り払うだろう……
コラヤ 何ということ……何ということ……
ネブザルアダン 私は悪しき異教徒だった——
私はユダヤ人になっても悪しきユダヤ人だろう！
それでも、新しい世代は——本物となればなるほど……
いっそう真正となる！
いっそう守護されたもの、そうだ、ますます守護されたものとなる——
コラヤ 何ということ……何ということ……
ネブザルアダン さあ、誰が私と一緒に行ってくれますか？（シエマヤに向かって）
あなたはバビロンに息子がひとりありましたね？ 私はふたりです！
いや、私の種ではない！
彼らを産んだのは妻だ——
私は彼らの名前ももう忘れた……
忘れたのだ、そうだ……名前だけではない——
何もかも、私は忘れてしまった！
首の重荷のように振るい落とすのだ、
重い頸木くびきのように投げ捨てたのだ——
私は自分自身を解放した、私は自由だ！
私は新しい人生をはじめめるのだ……

誰が？ 誰が行ってくれますか

異教徒と一緒に

故郷への道をいま、黙って？

すぐに、いますぐに！

フルダ 私が行きます！ 私が！（彼の方を見て）

ネブザルアダン あなたが？……女性のあなたが、ですか？

フルダ 私も行きたいのです、あなたと一緒に、

あなたとともに、シオンの地に！

ネブザルアダン シオンの地に…あの国に！

フルダ 天幕のなかで、それぞれの家のなかで—

あなたと一緒に！あなたと一緒に故郷へ、あなたとともに、姿を変えて！

一緒に用心して

私たちは道を行きましょう……

私たちはやはり誰にも訊ねるわけにはいかないのですから、

「どの道ですか？」などと

私も、あなたも—

私たちはふたりとも手慣れた歩行者ですから、

イスラエルの地をすぐに見出すことでしょう……

私たちの母への道！

危険があれば、私たちはただちに目にとめることでしょう—

すると危険は消え去ります、消え去ることでしょう！

瞬く間に飛び去ってゆくでしょう！

私たちはともに喜ぶことでしょう、

回避できた、大いなる危険のことで……

誇らかに、頭を高く掲げて、私たちは歩いていきましょう、

私が不意にあなたの袖を引いたなら— 私たちはすぐに背中を大きく曲げて歩きましょう、

まるで老婆と老人のように……

私たちは身を隠しましょう、

私たちは熱く息をして、静かに岩の割れ目に潜んでいきましょう、

それからその岩穴から、不意に陽気に姿を現わすことにしましょう—

歌を高らかに歌い、気分を高めましょう……

さあ、私と一緒に連れて行ってください！

ネブザルアダン（その場にうずくまって）私は異教徒だった……

フルダ あなたはいまではユダヤ人です！

ネブザルアダン 私はそうでありたいのだが……

フルダ あなたはそう望みさえすればいいのです—あなたは保証されています！

ネブザルアダン 私は悪い男だった—

フルダ あなたはよい人間になります—あなたは本物です！

ネブザルアダン コラヤ！ あなたはどこにいる？（彼に気づく）

老人よ、さあ、言ってくれ（フルダを指差す）あなたの骨、あなたの血が……

コラヤ 娘は行くと言うが……

私は—私は認めない……

フルダ 私は故郷に行きたい、私は憧れています——

ネブザルアダン あなたは憧れている……

フルダ あなたと一緒に故郷へ、あなたと一緒に——

ネブザルアダン 私と一緒に！

いいか、私は苛酷な男だ、私の心は頑なで、まるで牢獄のように閉ざされている……

フルダ けれども狭くはありません！冷たくもありません！

ネブザルアダン いいか、いいか、私は繰り返し悪の道に走った——

フルダ あなたの体は頑丈であなたの魂は繊細です！

ネブザルアダン だが、私の皮膚は硬い、私のエサウの肌は——
まっ赤だ……^{*19}

フルダ あなたの肌は白い、ヤコブの肌のように白い——あなたの強靱な精神！

私はそれを愛しています——

ネブザルアダン 愛しているだって！さあ、手を差し出してくれ、手を！

そして、私の妻になってくれ——あなたは美しい——あなたの魂も、あなたの体も、

しかし、あなたの一番優れているところは——あなたが自覚的であるところだ！

あなたはまるで盲人のように私のあとを歩きはしない、

私がどういう人間か、よく心得てくれ！

フルダ 私はあなたを愛しています——あなたの、強靱で繊細な魂を愛しています！

ネブザルアダン おお、手を差し出してくれ、手を！

あなたは私の子どもを産んでくれるだろう——

きっと息子を産んでくれるだろう——

フルダ 産みます！

ネブザルアダン (ふたたび疑いに囚われて)

産むだって！ 産むだって！

おお、あなたよ、

どうしてそんなことができる？

カルデア人があなたがたに対して暴虐のかぎりを尽くしているのを、重々承知したうえで……

フルダ あなたは罪の支払いはすっかり済ませたのです！

ネブザルアダン そうしたいものだ！
そうしたいものだ！

おお、あなたよ、

私の空はまだ暗いのだ——

明るくなって、広々と広がるのは、これからのことだ……

フルダ きっとそうなります！

ネブザルアダン それまで私は自分が罪深いと感じている！ 罪深いと！

あなたはどう呼ばれているのだ、言ってくれ、言ってくれ。

フルダ フルダです。

ネブザルアダン おいで、フルダ、おいで、さあ、私の妻になってくれ、私の娘

になってくれ……

あなたは若い——おお、明けの明星だ、
空に、明けの明星が輝いている！

新しい夜明けがはじまった！

おいで！（彼はまわりの追放者を見る）

フルダ あなたはあたりを見回している
——何を見ているのですか？

ネブザルアダン ここにはアブタリアが
いる、こちらにはシェマヤがいる——
シェマヤ！（彼らを指差して）

あなたにはこういう男を産んでほしい！

自由な歌びと——

こういう男なら、絶望に陥ることはな
い！ シェマヤとアブタリア！

1人の新参者（左手から急ぎ足でやって
来て、絶望して叫ぶ）

ゲダルヤが！

ゲダルヤが、悪人の手によって、

殺された！

全員（驚き、深く動揺して）

ゲダルヤが！

シェマヤ おお、何という恥辱……

ネブザルアダン ゲダルヤ——責任感に
溢れていたあの男！

彼が、かの地でいま、おお！

ゲダルヤ——誰よりも愛され、公正で、
尊敬すべき男

私はあの男、あの英雄を、

高い地位に就けたのだ——

あれは、ユダにおける、

私の最初で最後の善行だった……

おお、何という恥辱……

コラヤ おお、神よ！

シェマヤ ゲダルヤ！ わが兄弟……

（新参者に向かって）

誰がその卑劣な行為を行なったのだ？

そいつは誰だ、どこの奴だ？

新参者 ネタンヤの子イシュマエル^{※20}です。

全員 呪われよ！

新参者 イシュマエル！ 大いなる家柄
のただひとりの男、

彼は王家の出だった……

彼だ、彼が、

アンモン^{※21}の王バアリスと結託したのだ、

バアリスが金を支払い、

イシュマエルが実行した——

イシュマエルがゲダルヤに死の一撃を加
えたのだ……

全員 呪われよ！

シェマヤ 思い起こせ、さあ、いまこの
日に！

思い起こせ、いまこの日に、彼のことを、

すべての者よ、彼のことを思い起こせ——

ミツパで我々の偉大なるユダヤ人のひと
りが倒れた……

忠実なる羊飼いが殺された——

そして、ユダの山々の上では、

孤独なる羊の群が、

ばらばらになってあたりを彷徨っている、
海のまっただなかの、權を失くした小舟

……

あなたがたがまさしくあの日、

悲しみと嘆きに満ちた日、

もっとも神聖なものが煙とともに消え果

てた日を

想い起こすように――

そのように、ゲダルヤの日も想い起こせ……

きょうの我々の災厄は、

昨日の災厄によって、

消し去られることも、

混ぜ合わされることも、

あってはならない……

そして、呪うな、おお、悪しきことを

呪うな――

よいことを想い起こすのだ、

私たちの前に生きていたよき人、私たち

の前になされたよきこと

いま血を流している、それらのことを

……

呪うな！ おお、憎い奴をいまは呪うな

――私たちのなかのもっとも美しい者、

最善の者を殺した奴を、呪うな……

我々は我々の大いなる犠牲者のことを黙

って嘆こう――

我々は断食を行なおう……

彼は我々の代わりに死んだのだ！

昼の光を夜のように暗くしよう、

我々の恐怖と、我々の衣服を

抱きしめよう――叫ぶのだ。

この日には歌を歌ってはならないし、笑

ってもいけない――

あなたの堅琴を、さあ、あなたの堅琴を、

アプタリア！

シェブナ、君もだ、あなたがたの堅琴を

静かにさせろ

断食の日だ、ゲダルヤのための断食の

日だ。

全員（頭をうなだれて岩の上に座って

いる）

フルダ（深い悲しみのなかで倒れ、ネブ

ザルアダンに）

おお、私を支えて下さい、私は倒れてし

まいます……

ネブザルアダン（しばらく黙っていたあ

とで、彼女のあたまを軽く撫でる）

来い！ 来い！（追放者に向かって）

私は7日間の追悼のための席がすぐに欲

しい

あなた方と一緒に……

ネブガドレツアルはしかし、私のことを

決して忘れてはいない、

ネブガドレツアルは休息というものを知ら

ない男だ――

彼は私を捜索し、

見つけ出すことだってできるだろう……

来い！（彼女とともに、舞台の左へゆっ

くりと退場する）

幕がゆっくりと下りてくる

【訳注】

- ※1 ヤコブとレアのあいだに生まれたレビの子孫。元来はイスラエルの祭司部族だったが、祭司がアロンの直系に限定されるようになってから、アロンの直系以外のレビ族は「レビ人」と呼ばれるようになり、祭司の下働きをする階級を指すようになった。なお、アプタリアという人名は聖書には登場しない。
- ※2 エルサレムを占領したネブガドレツアルの親衛隊の長。エルサレムの町を破壊し、神殿を焼いたが、ネブガドレツアルの命令によってエレミヤを厚遇した。
- ※3 ユダ王国の要塞化されていた町。紀元前586年、エルサレム崩壊後、ユダの残留民はミツバのゲダルヤのもとに結集していたが、イシュマエルの謀反によって、ゲダルヤをはじめ守備隊は暗殺される。
- ※4 コラヤの子で、エレミヤから偽りの預言者として非難されたふたりの預言者のひとり。彼は、ネブガドレツアルの手で火刑に処されると預言され、断罪される。
- ※5 エレミヤ書第29章に登場する「エレミヤの手紙」には、アハブがネブガドレツアルによって火あぶりにされることが預言されている（第21 - 23節）。
- ※6 エレミヤ書の前注に続く箇所では、自分への不満を綴ったシェマヤの手紙を読んだエレミヤがシェマヤを断罪する言葉が記されている（同書、第31 - 32節）。
- ※7 預言者エレミヤの友人であり書記。
- ※8 「アサフの子ら」は神殿の詠唱者を指す言葉。
- ※9 ユダ山地の南部ヘブロンを西南西にある町。紀元前598年にヨヤキン王がネブガドレツアルによってバビロンに送られるまで、ユダヤ人が住んでいたとされる。なお、原意は「至聖所」。
- ※10 イスラエルの境界の北端にあった町。
- ※11 ユダの南端の荒れ野にある町。前注のダンとともに、「ダンからベエル・シェバまで」という慣用句で、イスラエル全土を指して用いられる。
- ※12 アッシリア帝国の文化の中心地。
- ※13 古代エジプトを代表する都市。
- ※14 バビロンの代表的なゲッター（原注による）。
- ※15 同上（同上）。
- ※16 パレスチナの北方にある町で、そこでネブガドレツアルがゼデキヤの両目を焼いた。
- ※17 バビロニアによって滅ぼされたユダ王国最後の王。元来はマタンヤという名前だったが、ネブガドレツアルによってヨヤキンの代わりに王位に就かされる際、この名に改めさせられた。彼はバビロニアへの服従を誓約したが、やがて反バビロニアの陰謀を企て、紀元前587年、エルサレムが陥落する際に、エリコの荒れ野で捕えられ、リブラにいたネブガドレツアルの前へ引き立てられ、眼前で自分の子どもを殺されたうえに、両目をつぶされ、バビロンに囚人として連れていかれた。
- ※18 ユダの王ヨアシュの時代の祭司。偶像崇拜を非難したため、王の命令により主の神殿で石打によって殺される（歴代誌下、第24章第20 - 22節）。ただしこの出来事はだいたい時代を遡る。エゼキエルらが活躍するバビロン捕囚前後の時代では、エレミヤと同様の預言をしていた預言者ウリヤがヨヤキム王によって殺されている（エレミヤ書第20章第20 - 23節）。
- ※19 エサウは生まれたとき、赤くて全身が毛皮のようだったので「エサウ」と名づけられた（創世記第25章第25節）。
- ※20 ダビデ王家の血統の、エリシャマの孫、ネタンヤの子で王の高官。エルサレムがバビロニア軍に破壊されたのち、ゲダルヤがユダの総督に任命されたが、これに納得せず、10人の部下とともに、ミツバにおける宴席でゲダルヤを暗殺した。
- ※21 アンモン人の王。エレミヤ書第40章第14節では、王バアリスがイシュマエルを送りこんでゲダルヤの暗殺を計画している、と語られている。

1番目のユダヤ人（左手の一番高い障害物から）門を開けてくれ！

いったいつまでだ！

いつまで続くんだ、

流浪の道は？

もう我々は体を動かすことができない！

2番目のユダヤ人（右手の、もっと小さな障害物から）さあ、言ってくれ、いつだ？ おお、神よ！

言ってくれ、いつだ？

いつになったら、我々のために墓は開かれるのだ？

いつになったら、敵の町は開かれるのだ？

いつになったら、石の壁は割れるのだ？

3番目のユダヤ人（左手から）門をこじ開けろ、

この分厚い、バビロンの門を！

こじ開けろ、監獄の扉をこじ開けろ！

我々は監獄に入ってゆくぞ、

監獄で十分だ——

監獄だって、砂漠よりはましだ……

誰かそこに立っているなら、誰かそこで番をしているなら——

そいつを打て！

我々はもう耐えられないのだ、

砂漠には！

4番目のユダヤ人（右手から）もう終わりにしよう——

こじ開けろ！

この門をこじ開けろ！

5番目のユダヤ人（左手から）我々はくたびれ果てた……

40年かけて、ひとりのユダヤ人が歩くだろう、

エジプトからカナン之地まで！

イスラエルの民全体がひとりの男のように！
奴隷状態から抜け出して、遠い旅の果てに自由をめざして。

一つの民族がそれを示すことができる！

バビロンよ、お前は私たちにとっていったい何だ、誰だ？

さあ、言ってみろ、

我々はお前のために、荒野のなかを、
また1日、余計に足を引きずることになるのだ！

6番目のユダヤ人（右手から）我々はくたびれ果てた——

開けろ、バビロンよ、その鉄の扉を、
我々を通りのなかへ、狭い通りのなかへ入れよ——

おお、何としたことだろう、我々の悲しみに匹敵する悲しみがあるだろうか、われわれは自ら捕囚になることを求めているのだ……

サルエツェル（バビロンの門の警備長。
彼は広々とした道を右手からやって来て、誰もいない舞台の中央でしばらく立ちどまり、不意に観客の方を向き、頭を高く掲げ、左右の障害物に目をやる）ユダヤ人たちよ、お前たちは叫ぶことができる、確かにできる！

お前たちは叫ぶ……

叫ぶな、呼びかけるな！

お前たちの叫び声は遠くに飛び去り、

近くで聞かれることはない……

お前たちは呼びかけている、呼びかけている——

だが、お前たちの言葉は空中で消え失せる!

お前たちの言葉は冷たい門を叩き、閉ざされた耳に出くわすだけだ——

1番目のユダヤ人 どうか門を開けてくれ!

2番目のユダヤ人 どうか開けてくれ、閉じられた門を!

サルエツェル お前たちはまだ待たなければならぬ——

3番目のユダヤ人 意地悪な男め!

我々はもう何ヶ月も追い立てられている……

我々は流浪の門で待って、もうすぐ1週間になる——

サルエツェル もうすぐ1週間なら、1週間ではない——

待て、待っている、まだ入ってはならない——
まだだ……

クフの門はひとりのユダヤ人のためのものだ。その名前はクフで始まる——

お前たちが叫んでも、呼びかけても無駄だ、私は門を1週間に1度だけ開けるのだ!

4番目のユダヤ人 もう1週間たったぞ!

サルエツェル まだだ……

まだ明るい、まだ太陽がきらめき、輝いている、暗くなれば、お前たちはバビロンに入ることになる——

それが命令だ!

5番目のユダヤ人 なぜという理由を言わないあなた方は不当だ

理由もなしに、止まれ!

あなたがたは言う、暗闇のなかで我々を中へ入れる、と暗い天幕のなかにいる一つの民族を中へ入れる、と

あなたがたは待っている、待っている——太陽の輝きが消し去られるときまで……世界が暗闇に包まれるまで……

サルエツェル それが命令なんだ!

6番目のユダヤ人 どのように進めばいいか、我々には分からない。

サルエツェル それが狙いなのだ!

1番目のユダヤ人 我々は躓くだろう!

サルエツェル それこそが、それこそが、狙いなのだ!

2番目のユダヤ人 我々は盲目で手探りしてゆくのだ、

我々は岩と骨を這い登り、滑らかな壁をよじ登るのだ……我々是一緒に進んでゆく——

そして、中へと入ってゆく……

子どもは母親を見失う、母親は小さな子どもを見失う——母親は子どもを探し求める、泣きながら探し求める……

サルエツェル それが狙いなのだ!

お前たちは互いを見失うことになるだろう、狭い通りで、細い裏道で。お前たちは山の上で準備して、それから谷へ落ちるのだ!

騒音でお前たちは聾になる、ざわめきでお前たちは盲になる雑踏のなか

地面も見えず、
 お前たちには空も見えない、
 どこが広い通るか
 どこが長い通るか、分からない
 どこが出口で、どこが入り口かも……
 俺たちには楽しみでも
 お前たちには災難さ！
 近くの者がお前から遠く引き離され、
 遠くの者がお前のすぐ脇を歩いている、
 お前は近くの者に呼びかけるが、そいつ
 は遠くで静かにしている——
 彼にはお前の声が聞こえず、お前が何を
 求めているか分からない……
 そして、お前の手を引く見知らぬ者に対して
 お前は声に出して呼びかける——
 それにしても、お前たちは何てたくさん
 いるのだろう——
 一緒に追放されたお前たちは、孤独でな
 ければならないのだ！
 お前たちは数が多い、じつに多い——
 不必要に彷徨^{さまよ}い、淋しく彷徨いながら、
 次から次にぶつかり合い、
 ぶつかるたびに、
 そして互いに呪い合うがいい……
 そうだ、そうだ、お前たちは
 進むことができない！
 立ち止まることもできない
 通りでは——
 お前たちは通りを一杯にしてしまう、
 ある者は別の者への怒りに駆られ、
 その別の者の孤独、
 その別の者の痛みなど、
 見もしなければ、見ようともしない、

目にもしなければ、耳にもしない……
 そいつにとって別の者など、
 邪魔者でしかない！
 お前たちは狭い通りを一杯にして
 一緒にいながら、孤独であって、
 狂気のごとく混乱するに違いない！
 そして飢えたお前たちは、満腹した異教
 徒たちのあいだで
 唸り声を発するに違いない——
 お前たちの腹は抉り取られた穴のようだ、
 異教徒たちの腹は膨らんだ風のよう
 だ——

3番目のユダヤ人 どういう罪のせい
 だ？ いまや炎で消し去られた、懐かし
 い故郷を追われるだけでは足りなくて、
 監獄に放り込まれようとしている——
 あなたがたは私たちの血をなお無益に啜^{すす}
 ろうというのか？

サルエツェル バビロニアはよい状態
 ではないのだ！
 バビロニアのさまざまな部族もよい状態
 で暮らしているのではない——
 もっとひどい状態の者がいることを、
 お前たちをつうじて、彼らに示したいと
 いうことだ……

4番目のユダヤ人 何という恥知らず
 な！ 異邦に追出すのでは足りなくて、
 自由な民を奴隷に変えるのでは足りなく
 て、あなたがたは私たちの不幸をさらに
 支配の道具にしようというのか？
 少数の部族を道具とするあなた方のやり
 口はよく知られている——
 あなたがたの悪巧みは私たちにとても重

くのしかかる、ああ、重く！
私たちが奪い、私を辱めるだけでは、
あなた方には足りない——
あなたがたは不幸な者たちを盲目にした
いのだ、
もっと不幸な者たちによって——
何という恥知らずな！
サルエツェル お前たちの言うとおりで
だ！ そのとおりだ！
5番目のユダヤ人 私たちが正しいと認
めながら——
あなたがしていることは悪しきことだ、
あなたは私たちを打ちのめしている——
サルエツェル それが命令なのだ！
6番目のユダヤ人 私たちが正しいと認
めながら——
あなたは家畜のように私たちを殺す、
家畜のように殺して、私たちの皮を剥
ぐ——
サルエツェル それが命令なのだ！
コラヤ （シェマヤとアビガイルに導か
れて。彼らの後ろには、豎琴を携えたシ
ェブナとアブタリア。彼らは左手から、
前景に置かれた小さな入り口を通じてや
って来る）みんな、ここで立ち止まって
くれ、ここで！
さあ、ここに私を置いてゆけ、
お前たちは、お前たちはみんな
まだ歩いてゆくことができる……
お前たちはもう、
私のために、私のために
立ち止まる必要はない……
アビガイル 何を、何ということ……

私たちがあなたを導きます、それで
も——歩くのが辛いのでしょうかね
きっと……
コラヤ そうだ、辛いのだ——
辛くもあれば、不安でもある……
手を引かれるのは、手を引くよりも辛い
ことなのだ！
シェマヤ 私たちはあなたを導いている
（フィルン）ではありません、私たち
は引き入れている（ファルフィルン）の
です……
バビロンへと導く者は、引き入れる者で
す——
絶望して（ファルファルン）！
私たちはみんな、導く者であるとともに
引き入れられる者なのです……
コラヤ （門を長いあいだ見つめて）
「バビロン、クフ」！——これは私の門
に違いない！
私の扉だ！
そら、ここに、そら……
クフ——コラヤ！
この門は私が入ってよい門であり——
1度入れば、もはや出られない門だ……
私はもはや見ることはないだろう、
自由な世界を、
ユダの国を……
シェマヤ、
どうして彼らは私たちを盲目の壁の前に
立たせたのだ？
どうして彼らは門を閉じたのだ？
シェマヤ （門を見つめて、驚いて）こ
の門、材料は全部新しい……

最近作られたもの、
最近立てられたものだ……
まるできょう木を切り倒して作ったみたいだ！
私が以前いたときにはなかったものだ——
どうしてこんな門が現われたのか？
バビロンに至る道はやはり——
あちらだ！（右手を指差す）
来い！ みんな来い！
どうしてお前たちはみんな、閉じられた扉のところの佇んでいる？
たとえゲヘナ（地獄）であったとしても——
開かれた扉のところで火を燃やすほうがましだろう、
彼らがあなたに立ち入る許可を与えるのを待っているよりも、
しかもそこは、彼らが絶滅を目論んでいる場所なのだ……
1番目のユダヤ人 私たちはもう何日も待っているのです！
シェマヤ 来い、みんな来い、道はこっちだ！
いちばん悪い道だ、
いちばん苛酷な道だ——
我々はそこを震えながら歩いてゆこう、
私は熱くもなれば寒くもなるだろう——
それでもだ！（絶望して）
私は石と鉄でできている、
私はあなたがたにバビロンへの道を示さなければならない……
さあ、来い、さらに歩いてゆこう……
追放者たち（障害物の上で、彼らのあ

いだに動きが起こる）
サルエツェル（右手から現われる。手には剥き出しの剣を携えている）
どこへゆく？ 生まれ！ 生まれ！
シェマヤ サルエツェル！
バビロンの年老いた警備人、河の番人よ！
言ってくれ、
これはバビロンへ向かう道ではないのか？ 言ってくれ！
何年も前のことだ、
暗い昼間の中へ、
そして不幸が荒れ狂う時間の中へ——
私はそのとき
引き摺られていったのだ
荒れ狂う時間の胎の中へ
力づくで、力づくで！
そして、あなたの助けによって、1年前、私はそこから脱出した……
サルエツェル 生まれ！（疑わしうに彼を見つめ、気づく）
そこに立ってろ！ そこに立ってろ！
黙れ……お前は！ お前はシェマヤか！
行け！
その道、古い道は、自由な者たちのための道だ！
お前は自由な人間だ、
お前はすでにバビロンにいたことのある身だ！
この新しく作られた門は、
奴隷のためのものだ、
門は夜になると開かれる……
バビロンへ送りこまれる、
奴隷のために——彼らはバビロンを目に

してはならないのだ……

(道を譲って行かせる——)

お前ひとりだ——

好きなところに行け……お前は行ってかまわない！

お前も、おそらくお前の父親であるこの老人、お前のふたりの兄弟、それにお前の妻——俺はお前たちと一緒に通そう……

シェマヤ 違う、違う！

私たちは全員で行きたいのだ……

私たちの正当な権利として行きたい——バビロニア市民の特権を行使してではなくて——

私たちは「奴隷たち」とともに行く。

私たちはのちの宵の時間、灰色の時間に、一緒に、苦しみと痛みを背負って、闇夜のなか、バビロンに入ることにしたい……

サルエツェル (右手を見て、叫び声をあげる) 道を開けろ！

お前たちの預言者だ、あの預言者だ！

全員 (左手で、舞台の上で身をさらに深く退け、それぞれの片隅で身をちぢ込ませる)

エゼキエル (急ぎ足で、ほとんど駆けるようにしてやって来る。あたかも、彼を追っている、ユダヤ人共同体の男から逃れるかのように)

バビロンのユダヤ人たち (彼を追いかける)

ユダからの難民 (エゼキエルと新しくやって来たユダヤ人のあいだで、頭に灰をかぶり、袋を肩に担いで) おお、神よ！ 町が！ 町が！

おお、何としたことだろう！

エゼキエル 去れ！ 去れ！

お前たちは姿を消せ！

お前たちと一緒にこの難民を連れてゆけ、こいつと一緒に連れてゆけ——

こいつはお前たちのものだ、私じゃない……

こいつも、こいつの叫び声も、こいつの嘆きも私とは関係ない、

「町が！ 町が！

エルサレムが破壊されている！」

難民 おお、神よ！

聖なる都が

打ち壊されています！

エゼキエル そんなことはもう聞いた！

聞き飽きたぞ！

もう聞きたくもない！

嘆くな……お前たちは何を嘆いているのだ？

お前たちは私には相変わらず落胆して見える、

お前たちは相変わらず憂慮しているように見える、

陰鬱に沈んでいるように見える、

言ってみろ、お前たちにとって何が問題なんだ？

バビロンのユダヤ人 聖なる町が！

エゼキエル 「町が！ 町が！」

それではお前たちには町が問題なのだ——

私はお前たちに答えない！

お前たちには神がお答えになる、

神は私にこう言われた、

人の子よ、破壊されたエルサレムは残念である、彼らは……
神の言葉だぞ！ 神の言葉だぞ！

エゼキエル書

第33章

第23 - 23節

イスラエルの地の、破壊された場所の住民たちはこう言っている、
彼らは繰り返しく説いている、
「アブラハムはひとりだった、彼はこの土地を相続した、
それに対して、我々は——我々はずっと多い！
この地は我々に与えられているのだ！」

第25節

それゆえ
神は、主は、彼らにこう言われる、
お前たちは小羊の肉を血と一緒に食べている、
お前たちは、
お前たちの腫を高く掲げて
偶像を見つめている
そして大地を人間の血で染めあげている——
それでいてお前たちは、その地を相続しようとするのか？

第26節

お前たちは自分たちの剣にしがみついている、
人殺しめ！
悪事なら何でもする

何もかも台無しにしてしまう
お前たちのそれぞれは友人の妻を汚している——
それでも、お前たちはその地を相続しようとするのか？

第27節

あなたは彼らにこう言いなさい、神は、主は、こう言われている、
聞け！ 聞け！
砂漠に暮らしている者で、
剣によって打ちのめされない者、
剣によって倒されない者が
いるだろうか？
彼らは野原では
獣たちによって喰い散らされる！
岩穴に隠れ家を、しっかりと囲われた岩穴に
隠れ家を見つけた者は、全員
疫病によって死ぬことになる！

第28節

そして、私はこの地を荒廃させ、破壊し、荒地にする！ そうだ、私はこの地を荒地とした！
その誇りかな力、
自由なあり方は、
効力を失ったのだ——
イスラエルの山々は荒れ果てて、見捨てられ、
誰もそこを通りはしない、
誰もそこにやっては来ない……
おお、風だ！ そこでは

風がすべてを吹き飛ばすかのようだ。

難民 （広い道に向かって）

来い！ こっちへ来い……

来い、もっと、もっとたくさんやって来い、もっと！

来い、忠実な羊たちよ——

羊飼いが罰を下すぞ！

バビロンのユダヤ人 罰だ！ 罰だ！

お前の罰を我々に聞かせてくれ。

難民 聞け！ よく聞け！ あの預言者が語っているのだ。

バビロンのユダヤ人 おお、語ってくれ！

ひとりのユダヤ人 彼は語るのではない、違う、撫でさすなのだ！

バビロンのユダヤ人 おお、語ってくれ！

2番目のユダヤ人 彼の言葉は斧から滴るようで、

じつに味わい深い！

彼の辛らつな呪い——

それは思いやりに溢れている、

おお、もっと罰を、我々に罰を！

エゼキエル おお！ おお！

私はお前たちを知っているぞ！

お前たちは喜びのあまり両手をこすり合わせる。

第30節

お前たちは私のまわりで静かに足を引き摺っている、
あらゆる壁のところで、家々の戸口で、
そして口々にこう言い合っている、
さあ、行って、偉大なる神の言葉を聞いてこい、

預言者の口からどんな言葉が出てくるか、聞いてこい……

第31節

お前たちはみんなしてやって来る

私のところに

まるで忠実な子どもたちのように、

お前たちはじっと耳を傾けている——

「すばらしい！ すばらしい！」と

それなのに、私の言葉は実現されない！

情熱的なお前たちの語り——

おお、お前たちの舌、口のなかの舌

は——何と愛らしく、心地よさそうであることか！

それでいて、お前たちの中の心は、相変わらず貪欲だ……

第32節

私だって同じだ——そうだ、実際には預言者などではない、

私の言葉はお前たちにとっては愛の歌にすぎない！

そして私の声は——美しく歌い、

美しく響く、

優しい声でしかない

その声は、お前たちにじつに心地よい歌と演奏を提供することができるのだ。

お前たちは満足して

私の言葉に耳を傾けている

お前たちから安らぎを奪うはずの私の言葉が

揺り籠のようにお前たちを眠らせる……

お前たちは私の火のような言葉に耳を傾けている

お前たちはその火で暖を取っている、
お前たちは私の言葉に耳を傾けている——なのに、私の言葉は実現されない！
お前たちは私の呪いを鎮痛剤のように服用している、
それで、お前たちは私の方に目を高く掲げ——
まだ聞きたいと願っている！

第33節

おお、おお！
不幸が来る、恐怖の日がやって来る——
去れ！ 去れ！（拳を振りかざして彼らを威嚇する）

バビロンのユダヤ人（広い道をとおって消え去る）

難民（同上）

エゼキエル（拳を差し出して、ふたたび広い道を歩きまわり、両手を絶望的に彼のほうに差し伸べている、追放者たちに気づく。彼は大きく彼らに近づき、舞台の中央で立ち尽くす。追放者たちを見つめ、歩きまわり、サルエツェルを見やる……顔をそむけて、頭を重く垂れる）人の子よ！

出てゆけ、私の追放者たちよ、さあ、反対の方向に

あらゆる道をとおって、
そして、彼らに伝えよ、人の子よ——

神は、主はこう言われていると、
私にはこうであるべきなのだ、お前たちの損害のために
私にはこうであるべきなのだ、お前たち

の悲しみのために
行って、彼らを見つめよ！
お前はすこしでも違ったことができるか？
ただ見つめよ、見つめるのだ——
この孤独を見よ、
この痛みを見よ、
この孤児たちを見よ！
お前の目の中、
お前の魂の中、
お前の心の中に、それを吸収せよ、
曲げよ、曲げよ、お前の背中を曲げよ——
そのすべてをお前の背中に背負い——
袋を担いで、
さあ、行け
行って、彼らのあいだにいろ、
そして、絶望と恐怖をたらふく食べて、
舌をお前の口から突き出して、
舐めろ、彼らを舐めてやれ、
頬の涙を、
腫れ上がった足の膿を
舐めて拭い去ってやれ——
きっとお前には甘い味がするはずだ……
疥癬でただれた皮膚の男を抱きしめ、頭を下げて——
その傷口のすべてに口づけをしてやれ
古い傷にも、最新の傷、
いま口を開いている傷口にも、
そして、こう言って彼を騙すのだ、
「あなたは健康だ！」
彼に語るのだ、
まったくのでたらめを！
彼らに嘘の物語を語るのだ、「あなたはすっかり治った！」と

騙すのだ！ 騙すのだ……

ブジの子よ、^{*2}彼らのすべての不幸を取り去れ、

嘘を使って取り去れ、

嘘はあるときにはもっとも偉大な真実なのだ——

取り去ってやれ……

（彼は、顔を追放者のほうに向けたまま、しばらく立ち尽くしている。不意に障害物の上にあがって、大急ぎでよじ登り、そこで跳び上がる。彼は身を投げて、追放者の首をつぎつぎと抱きしめる。そして、しばらくのあいだ頭を彼らの胸に埋めている。長いあいだ目を見つめ、体をしなやかに曲げて低い障害物の上に両足をのせ、首を伸ばして頭を悲しげなひとりのユダヤ人の方に差し出す。やがて体をくねらせながら立ち上がり、彼の追放者のあいだに身を隠し、どこか別のところから姿を見せ、大急ぎで這い下りてくる）

アプタリア （その間ずっとみんなと同様に立ち尽くし、驚いて、エゼキエルの言葉に耳を傾け、エゼキエルの姿を見つめている）エゼキエル！ 彼だ！

シェブナ 彼だ！ 彼だ！

コラヤ どうした（耳をそばだてる）

シェマヤ ああ、彼だ、ブジの子だ。

声たち エゼキエルだ！ エゼキエルだ！

コラヤ どこだ？ 彼はどこにいる？

エゼキエル （最後の障害物から転がるように下りて来ると、立ち尽くし、眼差しをアプタリアにやり、彼の方に駆け寄

り、彼の手を掴み、舞台の中央に連れてゆく。観客に背中を向けた状態で彼の目を見つめる。彼の頭を自分の肩のうえにのせ、彼の足元にうづくまり、顔を深くうづくめる。ひざまずいたまま、アプタリアの腕を掴み、優雅にその服にふれ、優雅に豎琴をその手から受け取る。彼は不意に顔を観客に向けた状態で倒れ、かなり長いあいだ、隆起した小山のようにその場に横たわったままでいる。それから顔をあげ、しばらく遠くを見つめている）私は泥に身を投げた、すると私は天にいる！

私は神殿の高み、西方の高みに足を踏み入れた。

神の神殿に足を踏み入れた……いくつもの馴染みの顔、

いくつもの馴染みの声……

おお、私には彼らがやはり分かる！

私は彼らのすべてを目にしたのだ
言ってくれ、ひとの子よ。

それはほんとうのことなのか？

それともまったくの夢なのか？

私はすぐに目を覚まし、忘れてしまう！

私には見える、私には見える

何という幸いだろう！

私はそれを目にしたのだ！

私は神殿のなかにいる

シオンに建つ神殿のなかに——

私はそこでレビ人たちの歌うのが聞こえる、

私は彼らの顔を見つめる——

私にはそこにいるお前の姿も見える——

声たち （左右から）アプタリア！ ア

ブタリア！

エゼキエル （大地から身を起こして）

きのう私はもう知っていた、夜半にはもう知っていた、

「きょうお前がやって来る！」と

お前のうちのよい半分を彼らは殺戮した、殺されたのだ、

優れた人々がたくさん、

残っているのはお前のうちのたくさん、悪い部分だ——

善か悪か——

彼らは選びはしなかった！

お前たちのなかの最悪の者たち——それでも彼らは

この地上で最良の者たちだ！

私は真夜中に目にした、

そのままのお前を——

きのうのことだ！

いまここで私はお前をもう一度目にしている！

私の手を取れ——私は震えている、

ほら、ほら、戦慄が私の体を駆け抜けている……（秘密を抱えたように彼を見つめる）

新鮮なはずく、神から落ちる涙のような、アブタリア！

アブタリア！

声たち アブタリア！ アブタリア！

エゼキエル レビ人だったお前は、レビ人であり続ける——

やつらはお前を追い立てるかもしれない、追いつくかもしれない——

それでもお前は歌びとだ！

お前は指の先端すべてに心を持っている、燃える、10の小さな心を——

弦をかき鳴らし

血と太陽を弦に注ぐのだ——

すると、バビロンにシオンが現われる

（両手を頭にのせて）

私はかつて正義の祭司だった——

いまではもうそうではない……

彼らは私を追い出した、そして空っぽだ

私のテーブルは……

私の祭壇はすでに輝きを忘れ、

そのうえには灰が積もり、香の煙は——消え果てた、

そこから煙が立ち上ることもない……

けれども、お前は——お前は若いレビ人だ、お前の歌は新鮮だ——

歌とお前と、その二つがあれば神殿の香りが立ちこめる！

アブタリア、私に歌ってくれ、おお、歌ってくれ、いま！

歌を、

最後の歌を——

この地上で最後のエルサレムの歌を——まだ私には聞こえてこない……

どうしてか、いや、まだ歌うな——

お前には分かったな、私が体の向きを変えたのが、

私は両目を閉じた——

お前が歌っているあいだ、私はお前を見てはならないのだ

私はまだお前を貪ることができる、

そうだ、できるのだ……

私はお前をまだ貪り食うことができる！

お前が歌っているあいだ、私はお前を見
たくない、

お前の声が聞きたいのだ——

さあ、歌え！

アブタリア あなたは命じる——

あなたは命じる、ブジの子よ、

あなたが命じるように、神は私に命じて
いる……分かっています！

私はなさねばならないでしょう……

たやすいことではありませんが……

私にはとても難しいことではあります
が——

あそこにひとり異教徒が立って道を塞い
でいます——（サルエツェルを指差す）

あいつは私たちから喜びを奪いました、
あいつに涙を見られてはなりません……

エゼキエル （サルエツェルに）去れ！

サルエツェル ブジの子よ、俺はお前の
言葉に従いたくはないのだが、

俺はそうしなければならん、そうだ……

お前のイエスにノーで答えてはならず、

お前のノーにイエスで答えてはならない、

それがネブガドレツェル自身から発せら
れた命令だ——

お前は命じたな

ここから立ち去れと——

そうしよう！ そうしよう！

それが命令なんだから！（サルエツェル
は右手に消えてゆく）

アブタリア 私の豎琴よ、奏でよ、しか
し奏でたからといって隠すな、

大いなる不幸と、大いなる不安を——
あの預言者が命じたことだ！

喜びなら、大いなる幸福なら、

お前はけっして隠すことはなかった——

（追放者たちを指差す）

彼らが、生ける証言者たちが、そこに立
っている……

いまお前は自分の苦しみを

押さえつけてはならない、

隠してはならない！

恐怖を歌え、震えるような戦きを歌え！

（沈鬱に豎琴の弦を叩く）

黒いショールが頭のうえに下りてく
る——黙したエルサレムに夜の帳が下り
てくる、

暗く、黙した夜の帳が下りてくる！

エルサレムはまだ存在しているのか？

すでに破壊されているのか？

エルサレムの警護者——彼は眠っている

のか？ 目覚めているのか？

警護者よ、私たちに何か言ってくれ、夜
の闇のなかから……

何か言ってくれ、私たちに——

私はここに立っている……そして待つて
いる

「——ああ、ああ！

夜が明ける！」

そして朝が訪れた、

すると、大いなる不幸、

そして大いなる嘆き、

苛酷な嘆きが

エルサレムの顔を覆っていた——

空からひと筋の光がさした……

朝になって

私が隠れ家から抜け出したとき——

神殿からの煙はまだ
 高くのぼって、
 空にさらに深く注いで、
 シオンの山の上に留まっていなかった、
 通りで流された血はまだ固まっておらず、
 涙は乾いてはいなかった、
 敵が追いかけてまわっていた——
 朝になったのだ！
エゼキエル （両手をもみしだき、絶望
 して左右に頭を振る）もっど！ もっ
 とど！ もっと歌え——
 破壊の歌を、大いなる破局の歌を！
アブタリア 朝になった
 東方から朝が近づいてきた——
 何に向かってだ？ いつに向かってだ？
 私はエルサレムを見つめた——しかし、
 私にはエルサレムが見えなかった、
 エルサレムは喰い荒らされて横たわって
 いた……
 通りには、
 若者が、老人が
 虐殺されて散らばっていた
 あたりには声なき恐怖が漂っていた
 さらに恐ろしいのは、嘆きの声が聞こえ
 ないことだった……
 朝になったのだ！
 何に向かっての朝だ？ いつに向かって
 の朝だ？
 私はエルサレムを見つめたが、それがエ
 ルサレムだと分からなかった、
 私にはエルサレムだと識別できなかつ
 た——
 エルサレムは破壊されつくして横たわっ

ていた——
 子どもを腕に抱いたり、胎に宿したりし
 ていた
 優しい女たちは凌辱され、
 首を絞められ、すでに硬直して横たわっ
 ている
 瀕死の状態で横たわっている者も何人が
 いる、
 家の窓はこじ開けられて半ば燃やされ、
 扉は大きく開け放たれている——
 そして、気の狂った者たちが立ち入っては、
 すぐに大きな金切り声をあげて
 飛び出てくる——
 家の外よりも中のほうが恐ろしい
 気の狂った連中さえもそんなところにい
 たくないのだ……
 彼らは走り出てきては、また駆け込
 む——
 気の狂った連中はどこにも落ち着くこと
 ができない
 そして、もう一度正気を失うことにな
 る……
エゼキエル もっと歌え！ もっと歌
 え！ 私はもっと聞きたいのだ！
 おお、おお
 私にはまだまだ足りない……
 （彼はアブタリアの手を取り、自分の胸
 に押し当てる）
 ほら、触れてみろ——
 お前にも分かるように、ここにまだある
 ぞ、腫れ物ができる場所が——
 おお！ おお！
 そこでは私のなかの痛みが

巢のなかの小鳥のように囁っている——
もっとだ！ もっとだ！

アブタリア 朝だ——

すると私は——一塊の石だ……

誰だ、泣いているのは？

嘆いているのは誰だ？

私ではない、違う……

私には涙が必要だが、

私は涙を必要としているが、

私に必要なのは、涙とそれ以上のもの……私には分からない、そうだ——

（彼は両手をだらりと垂らす）

泣いているのは豎琴だ

豎琴がひとりで泣いているのだ……

見よ、みんな見よ、

私の嘆きではない、

私の祈りでもない——

豎琴がひとりで泣いているのだ……

朝が訪れた、

おお、澄んだ空よ、

広々とした空よ。

言ってくれ、

あなたはあなたの神とともに

この地上で人間が石と化されるのを

いつか目にしたことがあるのか？

そして、冷たい石が泣くのを

目にしたことがあるのか？

エゼキエル もっとだ！ もっとだ！

お前は穴を穿った——

私の心臓のなかに一つの穴を穿った

ぞ——もっと歌え！

アブタリア 泣くな、私の民よ、

神によって迫害され、

敵によって荒々しく追いまわされても

嘆くな、嘆きの声をあげるな！

悪しき敵の嘲笑によって

その炎によって焼かれようと、

焼かれ、辱めをうけようと——

（周りの全員に向かって）

おお、両手をもみしだくな、

泣くな、おお、覆い隠すな

お前たちの青ざめた顔を、

涙なら、通りの石たちに、

道の砂たちに、流させよう。

エゼキエル もっと歌え！ もっと歌え！

私は自分のなかから大いなる重荷を投げ捨てた、

神の言葉とその考えだ、

そして、もっと重い荷物を、

お前の歌、お前の悲しみに満ちた歌という、もっとずしりと重い荷物を、私は背負ったのだ……

大いなる神、力強い神から、自分の身を解き放ち、

もっと重い荷物を私はこのうなじに背負ったのだ——

不幸なユダヤ人よ！

もっと歌え——

アブタリア ……おお、泣くな、泣くな、けっして泣くな！

お前たちには何も見えないかのように、何も聞こえないかのように——

涙なら、流してもらおう

エルサレムの通りの石たちに、

涙なら、ヨルダン河に流させよう、

ヨルダン河に注がせよう、
水の代わりに涙を……
あの高いヘルモン山^{*3}だって
すべてを引き連れてゆくことはできない
はずだ――

だから、嘆かせよう！
ユダのすべての山々に、それがあるところで
消え失せてもらおう
一つの嘆きの中へと……
シャロン^{*4}の谷に
嘆きの声を上げさせよう、
荒れ果てた草原のイバラの藪にも！
そして彼ら、偽りの預言者たちに、
胆汁のように苦い涙を注がせよう、
もはや、甘いでたらめの言葉ではな
く……

ユダの偉大なる領主たち、
彼らは我々の苦しみと断じて関係がな
かったし、
我々の苦しみを1度として我がことと感
じたことはなかった――
石たちと一緒に
彼らにも涙を流させよう！
我々を荒地に導いた、
すべての羊飼いと飼い主たちには
苦い涙を流させよう……

しかし、お前、私の民よ、
お前は、いまいるところで――
堪えている……
お前は、自分の大いなる不幸を、
自分の重い不幸を
熱い涙にしてこぼしたりしない……

破壊されたこと、
寄り辺ない状態に置かれたことからくる、
お前の痛みと大いなる苦しみ――
それを哀歌の形で
売り払ったりするな……

お前の心は、お前の姿と同じであるべきだ
1個の石のようであるべきだ！
岩山の岩石のようであるべきだ！

見よ、見よ、
泣いているのは、
私の祈りではない、
私の苦しみではない――
泣いているのは豎琴だ、私の豎琴だ
見よ、見よ、
豎琴がひとりてに泣いている……（豎琴
がいくつかのメロディを、なおひとりて
に奏でている。長めの休止）

エゼキエル（体に背負った荷物すべて
とともに、後ろに倒れる）

アブタリア（彼を支え、注意深く横たえる）

シェブナ（同上）

エゼキエル（全身を震わしながら、反
対側の観客に向かって顔をすこしあげる）

1番目のユダヤ人 てんかんだ！ てん
かん持ちなんだ！

追放者たち：（左右から）おお！ おお！

2番目のユダヤ人 これはてんかんでは
ないぞ！

追放者たち てんかんだ！ てんかんだ！

シェマヤ 確かにてんかんだ！

しかし、てんかんは
誰でも同じわけじゃない……

アブタリア 彼は全身を震わせている、
震わせている！

コラヤ 彼は苦しんでいる——
彼は悲しみを、大なる悲しみを押さえ
られないのだ……

シェマヤ いいえ、彼は強い、我々の誰
よりも強いのです

彼は悲しみを堪えているのです！

コラヤ 彼は気を失ったのだ……

シェブナ 眠ったのではありませんか——

アブタリア でも彼の両目は開いている
ぞ……

シェマヤ 彼の目はもう一つの世界を見
つめているのだ、

我々には隠されている世界を……

地面に倒れ落ちながら——

彼はすごい勢いで神の高みにまで昇って
ゆくのだ——

そして意識を取り戻して——そこから、

天上から、

何かを持ち帰るのだ、

我々にも

合図や言葉を……

私は彼のことをよく知っている——

彼はどんなときにも

彼の言葉で私を高めてくれる、

私の血管の中で血が冷えきっているとき
には、

私のなかに炎を点してくれる、

彼は我々の傷を癒すとともに、

我々の傷を新たなものにするのだ、

彼は……（両目を大きく見開いて、エゼ
キエルを見つめる）

エゼキエル（身を起こして、観客のい
るホールの方をじっと見つめる）

シェマヤ おお、おお——

彼が大地から身を起こした！

忘我状態から身を起こした——

みんな、立ち上がれ、立ち上がれ、

立ち上がって、さあ、聞け！

全員（追放者と舞台にいる人びとのあ
いだに興奮と動きが起こるが、それは、
預言者の最初の言葉によって静まる）

エゼキエル：（身を起こし、両足で立
ち、左を、イスラエルの地の方を向く）

エゼキエル書

第34章

第1節

すると神の言葉が私にやって来た、

第2節

行って、預言せよ、

語れ、人の子よ、預言を、かの地の彼らに、
イスラエルの飼い主たちに——彼らに預
言せよ！

お前は彼らに、飼い主たちに告げねばな
らない、

神は、主は、こう語っていると——お
お！ おお！

おお、イスラエルの飼い主たちよ、惨い
飼い主たちよ、

お前たちは自分たち自身だけを養った……

おお、罰だ！

羊飼いが羊によって養われているのだ。

第3節

お前たちは肥えたものを大喜びで貪り、
身には羊毛をまとっている——
お前たちは健康きわまりないものたちを
屠り、
さっさと始末するが——
お前たちは羊たちを養いはしない！

第4節

お前たちはもう久しく、弱い子羊を強く
することはなく、
病んだもの、傷ついたものを癒すことが
なかった——
お前たちは、彼らの傷口を、
縫い合わせることがなかった、
そして、追い払われたものたちをお前た
ちは連れ戻さず、
失われたものたちを、お前たちはもはや
探し求めはしない！
お前たちはどんなに苛酷に彼らを扱うこ
とか、
お前たちは彼らを支配した、
力づくで、重い労働で……

第5節

彼らはすべて、羊飼いなしに、
まるで塵のように
互いに引き離され、
草原で彼らを襲う、
あらゆる動物たちにとっての、
餌食となり、
互いにちりぢりとなった。

第6節

私の羊たち——彼らは彷徨っている、
高い丘の
すそ野のところ、
私の羊たち——おお、何という不幸、何
という分裂——
彼らはこの大地のうえで撒き散らされ、
ちりぢりにされ
一条の煙のように消え果ててゆく——
なのに、誰も調べようとしない、誰も問
いかけようとしないのだ。

第7節

それゆえ、そこにいる飼い主たちよ
聞け、聞け、神の言葉を！

第8節

私が生きているのが真実であるよう
に——と神は、主は言われる、
これはまことのことである
私の哀れな羊たちは、この地上の至ると
ころで、
草原の荒々しい野獣たちによって、略奪
され、喰い荒らされた——
それでいて、それを妨げる羊飼いはいな
かった……
私の羊飼いの大部分は
快楽に酔いしれ、眠りを貪っていた——
彼らは、
私の子羊たちへの愛によって
身を震わせることはなかった——
彼らは自分たちだけを養っていた——
彼らは私の羊たちを養いはしなかった！

第9節

それゆえ、飼い主たちよ、お前たちのいるその場で、
聞け、聞け、神の言葉を、

第10節

神はこう言われた、
見よ、私は羊飼いたちを相手にする、見よ！
私は行って、
私の子羊たちを彼らから取り上げる、
彼らはもはや自分たちを養うことはできなくなる、
もはや自分自身だけを養うことはできなくなる……
私は私の羊たちを彼らの歯から救い出す！
彼らはもう貪り喰うことはできない……
そんなことはできない……

第11節

このように私の主、私の神は、
私に言われたのだ、
見ろ、私はここにいる、見ろ、
私は行って——
私は私の羊たちを探し、彼らのもとを訪れよう……

第12節

羊飼いは、杖を支えにして、
この地上で、ちりぢりにされ、ばらばらにされた
子羊たちのただなかにおいて、
その群を守る——
ちょうどそのように、私は彼らを守る、

守ってみせる、
私は彼らを大切に
救い出す、痛めつけられた私の子羊たちを——
厚い雲に覆われた日、暗闇に覆われた日に
彼らが追い立てられたすべての場所から……

第13節

異邦の諸国の民の中から私は彼らを連れ出し、
遠い国々から彼らを集め
かつてのように、彼らの土地に彼らをもたらず、
そして、イスラエルの山々の上で、
川の上で、
豊かな居住地で、彼らを養う。

第15節

私が、私自らが、
小さな子羊を養う、
私自らが、彼らをかがませ、憩わせる——
このように神は、主は言われる。

第16節

行方不明になった子羊たち——私は彼らを探し、見つけ出す
そして、追い払われた子羊たち——私は彼らを連れ戻す、
長い間傷ついている子羊たちを私は癒し
病んだ子羊たちを強くする、強くする……

第28節

彼らはもはやどんな異教徒の餌食にもな

らず、
土地の獣たちが彼らを貪ることも、襲う
こともない
彼らは、彼らの美しい家で、安全に暮ら
す—
何も彼らをおびやかすはしない。

第29節

私は彼らに定める、
誇れるような苗植えの仕方を！
彼らはもう空腹で死ぬことはないし、
この地上で痩せ衰えることもないだろう、
諸国の民からの侮蔑を
重く背負うこともないだろう……

第30節

彼らは知るだろう—
私が、神である私がかつてのように彼ら
とともにあることを！
そして、彼ら—私の民の子どもたちが、
イスラエルの家であることを！
このように神は言われる！
アブタリア 私の豎琴よ！（豎琴を取り
上げ、それを見つめる）
あなたがたは驚き、見つめるのだ、
豎琴は以前は赤い色をしていた—
いまでは青ざめている！
私の目は以前は乾いていた—
いまでは濡れている！
以前、私の髪は黒かった—
いまでは灰色である……
以前は青かった私の空は—
厚い雲で覆われている……

私の豎琴も—私の心も—
私の言葉に従おうとはしない—
それらは歌わない！
私の豎琴と心（心臓）はかつては赤い色
をしていた、
熱い歌は、
私の豎琴と心、その両者のなかで、
めそめそと泣き、ちらちらと光っている
だけだ—
いまや両者のなかで歌は死に絶えている
歌は消え果て、死に絶えている……
私は歌びとだ！
私は歌う、もっと歌うぞ！
あの預言者—彼が見ている……

何か暗示となるものを、
私は歌ってきたにすぎない、
それに対して、あの預言者は語ったのだ！
おお、預言者よ、あなたは—そこにい
る—
あなたは、ここにいて、ユダのことを
そこにいた私よりも多く目にしてきた……
私が目にしたのは顔だったが、
あなたが目にしたのは—魂だ、
私の場合には喉から始まって—
耳にたどりつくことになる—
あなたはどうでしょう—？
破壊をして、
それから元気づけるのです！
あなたが1匹の羊について語る—
すると私たちはそこに人間を感じ取るの
です！

祝福されてあれ！

コラヤ 飼い主たち——おお、何という
恥辱！

彼らは我々をこのような状態にもたらし
た……

彼らは国土を一杯に満たしておいて
私の兄弟たちの血を吸い尽くした——

あらゆる谷で、あらゆる低地で、
あらゆる高い山の上で……

エゼキエル バビロンにだって彼らはい
るぞ！（不意に右の方を向く）

見ろ、あいつがやって来た、
雄鶏だ、

雌鶏を連れた誇り高い雄鶏がやって来
た——

ふたりの顔を見ろ——太陽のように輝い
ている！

見ろ、見ろ、誰があんなうれしそうな様
子を見たことがある？

ああ、何としたこと！ 私はあいつらを
見つめ、笑う——

私は笑う……おお、恥辱、そして嘲笑
だ！ あいつは神の名において語る——

だがそれは神ではないし、
神の喜びと要求から作り出された、

神の言葉ではない——それは、神の要求
ではないし、

神の考えでもない！

あいつの語りからは悪しき言葉は一語と
して現われず——

そして、楽しませもしない……

そうやって、あいつは慰めをもたらす——
いいか、いいか、

それは慰めなんかじゃない！

あいつの語っていることは、
あいつの神とも、あいつの心とも関係な
い……

何という嘲り！

ほら、広い道をとおって、

あいつがやって来た

アハブだ！

コラヤ （コラヤおよび周りの人びとは
驚きと不安からそれぞれの場所から動こ
うとする）アハブ！ アハブ！

エゼキエル （岩のうえに上がり、半ば
身を横たえるようにして座る）

（右手の広い道から、喜びに満ちた、力
強い歌声、シンバルと吹奏楽器の音、
ショーファルの響きが聞こえてくる）

（コラヤおよび周りの人びと全員は、悲
しげに頭を垂れる）

アハブ （広い道から現われる。妻を自
分の左側に従え、男と女からなる従者た
ちは彼の後ろに従っている）

コラヤ （絶望的に）アハブ！（彼は顔
をそ知らぬ様子で左側にそむける）

アハブ （遠くから両手を父に振りかざ
す。彼は従者とともに歌っている）私は
ここにいる！

私はここにいる、

喜びもだ！

お前はつんぽか——

おお、聞け

そして信じるのだ

もっと多くのことを信じるのだ——

私はここにいる！

私は叫ぶ、あらゆる苦しみから、
あらゆる困窮から、
「私はここにいる！」と

私は奪い取る、
死から生を、
埃のなかから産婆を、
埃のなかから！
没落から
私は自分の道を見出す――
私はここにいる！

私はいくつもの芽を新たに掴み取る
絶滅という
胎の中から、

132

明るい星々を掴み取る
深い夜の闇の中から。
厚い雲の中から
何かが壊れる音がする、そして笑い声、
私は略奪で大いに楽しむ――
信じよ！ 信じよ――
私はここにいる！（深い静けさ、左手で
は深い悲しみ、右手では全員が最高の喜
びで高揚している）

ゆっくりと幕が下りてくる。

【訳注】

- ※1 「クフ」はヘブライ文字の1つで、登場人物コラヤの頭文字でもある。
- ※2 プジはエゼキエルの父の名で、エゼキエルはしばしば「プジの子」と呼ばれる。
- ※3 パレスチナ北部の秀峰。海拔2814メートルで、頂きは3つの嶺からなり、ヨルダン河の主たる水源となっている。原意は「聖なる山」。
- ※4 南北にはヤッフェからカルメル山まで、東西には海岸線とサマリアの山地とに挟まれた南北50キロメートル、東西10・20キロメートルの平原。イスラエルでもっとも肥沃な土地。
- ※5 雄羊の角で作った、ユダヤ教の祭式で用いられる吹奏楽器。

私を連れ出してください！

沈んでゆく太陽です、

あれと、そして私を照らしているのは——
太陽は私を小枝で打ち据えるかのようです。

エゼキエル あいつはあなたの息子か？
それはよかった！ よかった！

コラヤ どうしてよいのですか？

エゼキエル あなたがあいつを嫌っているからだ！

あいつの父親はあいつから遠ざけられているべきだ、

あいつの兄弟も、姉妹も——

彼らの間の深淵がどれほど深いものか！

あいつは歌ったのではない、冒涇したのだ！

あれは本当の喜びからくる

言葉ではない——

あれはかき回された泡だ……

性質（たち）の悪い敵だ——

敵だってあんなやり方を好みはしない、

あいつは本物ではない！

老人よ、あなたの体が弱くなく、そんなに年老いてもいなければ、

そして、あなたの息子が力強くなく、あんなに巨大な体つきをしていないなら、

きっとあなたは、いますぐここで、彼を大声で打ち据えていることだろう！

アハブ エゼキエル！

君か、君ではないか！

君は私と私の民の間に、私と私の兄弟の間に、
身を置いていた——

いまでは、町でも荒野でも君はまず最初に私に駆け寄ってきて——

私を追い立て、迫害するかのようだ……

いま君は、私と私の父の間にひざまずいている——

エゼキエル 私はそんなことをしていない！

お前とお前の隣人の間に立っているのは、壁だ！

お前が自分で壁を作っておいて、そのことに気づかないのだ

お前は火をつけていながら、それがどんな具合に燃えているか、目にせず、

どこで燃えているか、知ってもいないのだ

アハブ それは君だ！ 君だ！

エゼキエル （後ろに下がって、息子と父に道を譲る）

さあ、行け！

アハブ （父親に両手を差し出す）

お父さん！

コラヤ 去れ！

アハブ （恥ずかしげに、腹立たしげに、両手を垂らして、エゼキエルに向かって）
君だ！ 君だ！

君は休みも知らず、

1日あるいは1時間でも

卑劣にも至るところで私の先回りをして
いる……

そして、私が行くところ、私が着く時間
になると——

君がもうそこにいるのだ！

まるで悪性の腫瘍のように、

しつこく取れない悪い水腫れのように……

私は喜びとともに笑いとともにやって来る——

けれども、立ち去らねばならない……

コラヤ 去れ！ 去れ！

アハブ（エゼキエルに）

君だ！ 君こそ立ち去れ！

君は私が始めた仕事を邪魔する——

私が始めるより先に妨害するのだ……

君は擦り切れた放浪者、激情に駆られた男で、

今度も息子の先回りをして

父親のところに行き、

もう毒を注ぎ込んでいる——

しかも、私の父とは知らない先のことだったのだ……

おお、私には分かる——

見よ、見よ、

彼はもうここで泥に身を投げていた！

彼はあれに襲われたのだ、あのてんかんに、

そしてそのあとで語ったのだ！

暗い話を、苦い話を、

どんなときにも彼は語ってきた……

ブジの子よ、君は……おお、古き敵よ！

来い、来い、ハダサ、

花盛りのバラよ！

来い、気高い家族、

喜びのなかで、気高く、神聖にされた家族よ——

エゼキエル さあ、行け、お前のみだらな女め！

シェマヤ（両手をもみしだき、頭を垂れる）

エゼキエル そして、後ろのお前の悪党

どもとともに！

出てゆけ！ 出てゆけ！

（気を取り直して）

いいや、いいや、ここにいろ、ここに留まっている、

そして、お前の喜びなり何なりを歌え、

歌え、歌って、そして語れ——

追放された身であれば、

お前の歌は嘆きだ……

アハブ 君の言葉は——

汚らわしい、まるで君の衣服のように、

君の体のように、

汚らわしい——君の魂だってそうだ——

君の魂は美しくない！

汚れた、大きな一つの染みだ！

エゼキエル 私は汚物を喰らったのだ——

それでも私は清らかなままだ！

そしてお前は、お前は、神聖なる祭壇を

食べ物にして——

それでいてお前は汚れている！

お前は私をうんざりさせる！（嫌悪を露わ

に彼のもとを離れ、もう一度障害物の上に

這いあがり、追放者たちをひとり、またひとり

と抱きしめ、彼らの間に姿を消す）

アハブ お父さん、あなたは私の父です、

どうか聞いて下さい——

コラヤ かつて私は父だったが、いまではもうそうではない。

アハブ あなたは息子を拒む——あなたには憐れみの気持ちはないのですか？

コラヤ 神を拒むよりも息子を拒むことのほうがたやすいことだ……

アハブ お父さん、息子を拒むなら——

その人物は自分の神をも拒んだことになるのです！

ここで私を見出したなら——あなたは神をも見出したことになるのです——

神は私のこの地上での豊かな活動のうち存在しています、

そして、私は、私は、分かち合っているのです

神の気高さを——

神も私も——私たちはどちらも聖なるものです！

地上は、地上のすべては私のものです！

私のものでもあれば、あなたのものであり、神のものである——

大地の上のこの一つの太陽とその輝きは一つのもので、

私はその地上の王なのです！

私も、あなたも、神も——

シオンは私にとってたいしたものではありません、

私はもっと多くが欲しい！

私が欲しいのは世界です！ 世界の全体です！

私はファラオ^{*2}よりも、

シャルマナサル^{*3}よりも

偉大な英雄、

彼らよりも多くのことを経験してきた戦士なのです——

私は彼らよりも偉大です！

彼らよりも優れています！

彼らのそれぞれはすべて

剣の力によって

地上を支配してきました——

私は神によって地上を支配するでしょう！

コラヤ お前の言う神とは誰のことだ？ 神とは誰だ？

アハブ それは、ここに至るまでは、喜びでした！（彼は舞台の中央で忘我に陥る）生の謎であり、そう、答えでもあるもの——喜びでした！

さあ、みんな、叫べ、私とともに叫べ、ある者は大声で、またある者は静かに、叫べ、

「喜び！」「喜び！」と

私は喜びでお前たちを満たすだろう、

河を喜びで満たすだろう、

私の大いなる喜びで、

私はお前たちのなかに私の祝日を投げ込むだろう、

私の祝日はすべての人の祝日に先立っている、

その祝日を目に留めよ、目に留めよ！

地上の祝日を、地上全体の祝日を——

さあ、来い、踊りにやっ来て来い！

「踊れ！ さあ、踊れ！」と神は言われている、

互いに手を取り合って、ロンドを踊れ！

こうして踊りながら、お前たちは空を飛びはじめる——

そして、空を飛びながら——お前たちはみんな、

信仰を深くする！

シオンは倒れた——

バビロンも倒れるだろう——

けれども、我々の喜びは永遠である！

しかも、至るところで！

私はユダの山の中でお前たちの預言者だった——
バビロンでも私はそうだ！
そして、行く先々に——
私はそれを携えてゆく！
喜びを、喜びを、私は携えてゆく——
喜びは光を発している
私の目から、私の言葉から、
太陽が青空から光を発しているように、
喜びは滴っている、
露のように、
女が口にする「あなたを愛している」
「あなたが好き」という言葉のような、
喜び——
おお、喜びを掴み取れ——
お前たちの行く先々で、
お前たちが
ちりぢりにされているその場で。
この地上の至るところで！
おお、喜びを掴み取れ！
喜びはお前たちに捧げられているのだ——
ユダヤ人として生まれてこの方、
私は本当のユダヤ人だった——
そして本当のユダヤ人は——もはやユダヤ人ではない。
私は喜びでもってそういう境地に達したのだ！
本来の自分となるまでは、
我々はそんな境地に達することはできない——
ユダヤ人でないということは、異教徒でなくなった異教徒であるということだ！
両者を高めてゆくこと、星々の高さにま

で高めること、
そこには喜びがある……
おお、喜びよ、私を高めてくれ、星々の高さにまで高めてくれ！
星の高さにまで高まれば、私も星のようにならないだろうか……
コラヤ（興奮して）「星々の高さにまで」だと、何というたわごと！
あいつはいまではいよいよ地上全体を欲しがっている、
しかし、シオンに忠実でない者は、バビロンをも愛することはないだろう！
あいつは、地上だって、地上の全体だって、好んではいない……
みんな聞け、そして気づけ、
こいつは星の高さまで上りたがっている。（アハブに）
お前は私にとってはよそ者だ！
アハブ 私は人間です！
コラヤ ユダヤ人でないユダヤ人——そんなやつは人間じゃない！
人間は根だけで存在しているのではない、何か別のもの、一つの本質がその人間には備わっている……
その本質のおかげでその人間は成長を遂げることができるのだ——
本質が取り去られれば、その人間は偽物、人間を真似ているだけだ……
お前は私にはよそ者だ——
お前たちふたりは私の心からは消え去っている……
立ち去れ！

アハブ もう私は離れ去っているのですよ、おお、お父さん、お父さん！

広々とした遠い道によって—

光と喜びを

注がれ、ちりばめられて……

ユダで、まだ若者であったときのことで

それと、その道と出会ったのです、

そのとき私の中で火花が放たれたのです……

私は離れ去っています—

私が成長したのはバビロンにおいてでした……

お父さん、あなたは以前とまったく同じですね—

頑固なひとだ……（眼差しをアビガイルに向けたまま）

そして君は—

私は君のことを覚えている、妹だ、覚えているぞ—

おいで、アビガイル、そうだ、君だ！

アビガイル（父の方を指差して）

父が許しません—

あなたもご覧になったでしょう……

アハブ 彼はしっかりと君を引きとめている、

おお、妹よ……

アビガイル しっかりとではありません、しっかりとでは！

コラヤは娘のアビガイルをしっかりと引きとめることはできません—

私の妨害になっているのは、彼の腕よりも彼の意志です—

彼は悪いことによってではなく、

ただよいことによって私を引きとめるのです……

アハブ ハムタルはどこだ？

彼女の夫はどこだ？

アビガイル 彼は敵の矢に深く射抜かれました—

エルサレムの壁が崩壊した—そのとき彼も倒れたのです……

ハムタルは私たちと一緒に—

私たちみんなと一緒にこちらにやってきました……

彼女は砂漠の砂のなかで、母親となりました—

彼女は子どもを産んだのです—

アハブ ひとりの子ども！ 一つの命！

アビガイル 彼女はその子どもを死に委ねました—

彼女は子どもとともにユーフラテスに身を投げました……

そしてユーフラテスの波によって遠く連れ去られました—

アハブ 死んでしまったのか！（しばらく頭を垂れていて、不安気に頭をあげる）

フルダは！ 彼女はどこだ？

アビガイル 彼女はうまく

戻ることができました—

アハブ 戻っただって？ 破壊されたあの地にか？

それは川に身を投げるのと同じだ！……

運命は我々に与えたのだ

死の土地と生の土地を—

我々に必要なのは生の土地だ。

では、シェブナはどこにいる？

アビガイル 会ってやってください！
会ってやってください、すぐに！（アブ
タリアとシェブナを指差す）
豎琴を手にしています。

アハブ （彼らを長い間見つめ、侮辱さ
れた感じで）

彼らはふたりだ——

ふたりの若者だ、

そして彼らはふたりとも——

私の方には顔を向けない……（眼差しを
シェマヤに向けて）

そして、あれは誰だ？ あの男！ あの
男！（わずかに身を後ろに引いて）

シェマヤだ！

ハダサ （右側からアハブに駆け寄って）

あのひとだ！

私は目にしながら、自分の目がもう信じ
られない——

あのひとだ！

アハブ 君か！ 君か！

どこから来た？

君もか？

君はあの地にいた……あの地……高い山
のあの地に！

シェマヤ 私はそこから逃れてきたの
だ……捕囚の身から逃れてきたのだ、

自由な家へ——

自由で開かれた家へ……

アハブ シェマヤ、自由とは我々の中
にあるものだ、

我々のいる土地にあるのではない……

そして、自由が守るべきは土地ではなく
我々なのだ！

君はあの地からやって来た、すると君は
彼に、エレミヤに会ったか？

彼はあの地で書かれた、あの手紙の中
で、我々ふたりについて、

火あぶりにされる、と預言した……

コラヤ お前ひとりに対してだ！

アハブ よろしい！（シェマヤに向かって）

私は生きている間は、君とだけ一緒に進
みたい、

君とだけ、君とだけ協力して……

血を流したい……

火あぶりにされ殺されること——

それなら私はひとりのできる……

君はあの男、あの暗い男と出会ったのか？

シェマヤ 会ったよ。

アハブ 君は、彼が語るのも耳にした……

シェマヤ 私は大地の上で、まるで影の
ように彼のあとに従って来たのだ。

あたかもそうするほかないかのように、
彼に引き寄せられてきた……

私は至るところで彼とともにいた

そのことは誰も知ってはいなかった
が……

アハブ それで、どうした？

彼は相変わらずすべてを呪い、熱心に冒
瀆しているのか？

シェマヤ 放っておけ！ 放っておけ！

私は、祝福しているときの彼よりも、呪
っているときの彼の方が好きなのだ……

アハブ 見ろ、見ろ、君は早々と事を成
し遂げた、

あっさりと自分の考えを変えたのだ……

君は彼に、あの男に好意を抱いたという

それでは、君があんなに鋭い手紙を書いたのは——

誰に対してだったのか……

シェマヤ そっとしておけ、彼は私よりもずっと悲しんでいるのだ、それで、君よりもずっと強く、バビロンで生きることを我々に命じたのだ！

アハブ はっ！ はっ！

シェマヤ これは事実だ！彼はひとりで苦い水を飲み干したのだ——ひとりで、ひとりで、悲しみを引き受け、大いなる痛み、孤独な重荷を、自らの背に負ったのだ——そして、バビロンで生きることを我々に命じたのだ！

アハブ （皮肉な調子で）

「さしあたり」の生——それは、大急ぎで眠るような生だ……彼のように生きるのは彼だけだ——私は君と一緒にだともっと楽しい——君とまた会えてとてもうれしいのだ！バビロンでは君は私にとって1本の棘のようだった君がここにいて、君は私にとって一つの障害、不和の相手だった！ところが、不意に君はいなくなったすると、すべてが変わった……君が、君が……君が逃げ出したとたん、私は君がいなくて困ったものだ、休みなしに私は活動した、君なしでは、世界は私にとって狭いもの

となった……

君は、君は……

眠りのなかで私は君と出会った——それで、眠りのなかでも私は休みはしなかった……

眠りのなかで君の声が私を揺り起こし、目覚めて活動するように私を駆り立てたのだ……

夢においても現実においても——あれらのすべてのよき日々に向けて！

あれはいったどういう意味だろう？私にはまるっきり分からないのだ。

君の妻への私の愛だろうか？

君の悲しみに対する私の愛だろうか？

そんなもの私は信じなかった！

私が嘲笑していた悲しみだろうか？

私は近くの悲しみには嘲笑を浴びせ、

遠くの悲しみは目にとどめていたのだがどうだ？ どうだ？

その理由は何だ？

私の良心にあんなに重くのしかかっていたものは何だ？

私の安らぎを奪ったものは何だ？

私を不安にさせたものは何だ？

何に対してだ？

何に対して、私は不愉快な思いで問いただしたのだ？

（エゼキエルを指して）

どうして、我々ふたりの間に一つの影が忍び込んだのだ？

いったい何が起こったのだ？

シェマヤ、君がいなくなったのだ、

君が逃亡したのだ！

いまでは君はここにいる、君はやって来たのだ！

君はこれからここにいるだろう！

おお、女よ、

我々の間の影よ——見ろ、見ろ、彼は避けている——

そして、彼の立っている場所に、以前の輝きが差している、

私の心は軽くなった、

私はもう知りたいとは思わない、訊ねたいとは思わない——

君はここにいる！ ここにいる！

私の敵よ！

私にとってはふたりとも、ふたりともが——
そうだ！

遠くから君が私から奪った私の喜び、
その私の喜びは再び完全なものとなった、
青空の中の太陽のように、

妻だってそうだ

妻が私に与えられた

愛と喜びのなかで、

ほら、私は踊りはじめる、踊りはじめる——

君はここにいる！

私の目の前にはもう、争う相手がいる！

私は戦いの準備ができていし、勝利を信じている！

おお、君がここにいるのはすばらしい……

シェマヤ、シェマヤ、私たちはこんなに
違っている、

こんなに異なっている

それでいて、こんなに近くにいる、私たちふたりは！

言ってくれ、シェマヤ、言ってくれ、い

つからのことだ？

シェマヤ (意気消沈して、岩に腰を下ろす)

ハダサ (懐かしそうに、そっとシェマヤを見ながら、顔を赤らめてアハブに)

あのひとは立っていました——

いまは腰を下ろしています。

私たちふたりとは

あのひとは話したくないのです—— (大声で叫ぶ)

いまでも！ いまでも！

私はあなたを

置き去りにして

あのひとのもとへ行きたい！

シェマヤ (助けを求めるように)アハブ！

ハダサ あのひとの声！

いいえ、声ではなくて——喜びよ！

喜び——でも、あなたのもとにあるのではない、あのひとのもとにある喜び……

その喜びはあのひとの大いなる苦しみから溢れでてくるもの——

喜び！

その喜びはあのひとの悲しげな目から注ぎ出てくる、

あのひとの青ざめた、悲しげな顔から

一つの光が差している

喜びに満ちた、大いなる光が、

それは滴り落ちるのよ、

恐怖のなかで引き裂かれた彼の口から、

いっばいに開かれた、赤いあのひとの唇から——

私はあのひとを愛しています！ (アハブを抱きしめる)

私は泣きもすれば笑いもしたいの！

シェマヤ (懇願して)

アハブ!

ハダサ あのひとの声! (シェマヤに)

私はこっそりとあなたのところに
もう一度戻って来ます、
深い眠りについてあるあなたのもとに
そして、仲間のもとを抜け出して
微笑みながらあなたに口づけをします、
あなたは本当に眠っているでしょう——
あなたのそばで、私は、目覚めていて、
楽しく、胸一杯に吸い込みます、
喜びを、喜びを、
あなたの深い呻き声から!……

私はあなたの中に切れ目を入れます、
陽の光のように、
その明るい輝きのように、
雲間に差し込む輝きのように、
おお、私の雲! 厚い雲! (彼女はシェマヤに背を向け、気を失ってアハブの肩に倒れ込む)

シェマヤ おお、いつの間にか彼女は君のものになっているのだな!

さあ、彼女に願えよ、——自分についてくるようにと——

かつて私たちは友だちだったのに……

アハブ いまだってそうだ!

私は君を愛しているし、君の悲しみに胸を痛めてきたのだ!

ハダサ 私はあのひとを愛している、あのひとの悲しみを—— (不意にシェマヤにしがみつく)

私を抱きしめて!

シェマヤ (苦しげに) 放してくれ!

ハダサ あなたの頭を置いてください、あなたの悲しみに満ちた頭を私の胸に、あなたの冷たい唇の炎を私の星にあてがってください——

あなたは知らない、ええ、そう、あなたが知ってくれたなら、私があなたをどれだけ愛しているか!

シェマヤ おお、放せ、私を放せ——

ハダサ 涼しい風が吹いているわ、風はどこかひっそりと静かな場所から漂ってやって来て、熱い命を草のなかに吹き入れています——
もっと吹いて! もっと吹いて!

ああ、悲しくすすり泣いている風、
おお、私の風、
どうか私を避けなさい、
私の隠れ家の中まで入ってきて、
私のおなかの中まで、そう、おなかの中まで!

その翼で、大きな翼で、私を覆って……
(絶望的にアハブにすがりつく)

おお、2番目の男の腕に私を押しやらないで!

私には分かっています、あなたはバビロンでは立派な大人になります!

私を求めて! 私を求めて!

私は緑の小さな葉っぱ、
枯れしぼみ、
バビロンの太陽で焼かれた1枚の葉っぱ——

私はあなたに両手を差し伸ばす、
おお、風よ!

私の願いをあざ笑わないで、笑わないで……

私はあなたに憧れている、あなたと憧れのあとを追いかけてゆく、それが悪いことだと思えません、それが罪だなんて……

シェマヤ おお、何としたことか……君は彼よりもずっと悪い！彼が語っているのは一つの理想についてだ、

いまでは多少とも間違った理想だが——君は——君の口から語っているのは君の大いなる情欲だ、それに過ぎない！

君は自分を抑えきれない……悲しく嘆いているのは私だけではない——自分のまわりを見てみる——

さあ、まわりを見て、追放されたユダヤ人たちに目を注いでみる——一つの民族が減ぼされるのだ……

ハダサ 失くなったのよ！民族も個人も——全員が死ぬのよ！異教徒も死ねば、ユダヤ人も死ぬ——

それぞれの民族、その大いなる死滅！あなたはアザルヤのことを訊ねないの？

シェマヤ まだ子どもたちのことは訊ねていないのだ、バビロンでユダヤ人の子どものことは——

「あれは私の息子ではないか」と……

ハダサ 父親が預言者である息子は哀れです！

あの子は美しかった、まるで沈んだ太陽のように美しかった

シェマヤ (心配気に) どうして美しかった、だ？ どうして沈んだ太陽のよう、なのだ？言ってくれ、言ってくれ！

ハダサ あの子は美しかった、過ぎ去った昼間のように美しかった——

シェマヤ アザルヤはどこにいる、言ってくれ！

ハダサ あの子は亡くなりました……(彼女は頭をうな垂れる。間)

シェマヤ 嘆くな！泣くな！

涙もこぼすな——死ぬというのは過ぎ行くこと、姿を消すことだ——それは本当によくないことだ、

さまざまな世界は没落してゆく、太陽の光が消えてゆく——火口のように若くて赤い太陽の光が、

星が消える、やっと上ったかと思えば、もう消え果てる……それは本当によくないことだ——

ふわふわ浮かんで、努力して——もういまは何もない！

だが、生にとどまり続け、生の奴隷であることは、もっと悪いのだ……

ここにすることはもっと悪い、——バビロンにいて——自由でないことは！

我々は生きていなくてもなければ、沈みゆくでもない……(両手を掲げる)

神よ、我々を自由にしたまえ——そして、私にお示してください

奇跡を！

あなたのように！ あなたのように！

自由な故郷に私たちを住ませ、安らいだ心で仕事をさせてください——

私たちは造られているのです

あなたの似姿に！ あなたの似姿に！

そうすれば、他の民族は驚き、

目をみはり——

こう思うことでしょう、

「民族というものはあんな高みに至ることができるものなのだ！」と

神よ、我々を自由にしてください、自由に！

我々の没落と復活をつうじて

どうか我々を高めてください。

アハブ 君自身が自らを解放するのだ、他のみんなを待たたりするな！

自分の解放は、自由であることよりもずっと厳しく訪れるものだ

自由であることなら、木々からなる森にだってできる、

1本の木だってそうだ、

自由である者は、事実高く育ってゆき

必然的に誇り高い……

しかし、自分を解放するためには、我々は鉄である必要がある——

自分の力に感心するほど

君が十分強いなら、

鉄であれ！

鉄を炎のなかに投げ込め

そうして自分を解放しろ！

逆に、君が悲しみに耽っているなら、や

めておけ、

悲しみに耽る者は愚かだ、

悲しみに耽る者は自分自身の中の情熱を抑圧している……

君は自分の重い頭を

深く垂れることになる——

君は喜びやさまざまな要求を愛想よく拒んでいる……

ほら、見てみる（彼はハダサの胸からヴェールを剥ぎ取る）

首飾りがないだろう！

くだらない飾り物を全部胸から取り去っている！

見ろ、見ろ、君はこんな彼女をいつか見たことがあるか？

彼女は切望している——

そして君も——君もやっぱり切望している！

彼女を君の高みで元気づけてやれ、

彼女に君の露を注いでやれ

震えている彼女の葉っぱのうえに、

おお、目をそらせるな、

高貴で、繊細な、

君の妻から——

シェマヤ エステル^{※4}！

アハブ 彼女をよく見ろ——

これは顔なんてものではない、体でもない！

これは深い空、澄んだ空だ、

地上の神聖なるもののすべて、

広々と広がる海原——

それらすべてを合わせたものだ！

それらをじっと見つめるのだ！

その輝きの中を潜ってゆけ、

深くもぐってゆけ、
そして元気になれ、
さっき死んだようだった唇が
赤い唇となる——
よく効く鎮痛剤だ！
首を見てみる——
まるで温もりをもった
大理石だ
そして、白い両肩——
見ろ、見ろ、世界の全体がここにかかっ
ている——
夢と郷愁に満ちた一つの世界が、
彼女の両肩にぶら下がっていて、
その世界は育っている、同じ一つのリズム
で！
世界全体が大きく育つだろう！
彼女の胸の上の
鳩を見てみる——
鳩たちは、暴かれては、隠されるかのよう
に、
消え去っては、快樂のなかで姿を見せ
る——
鳩たちはそのことをまるで知っていない
かのようだ……
鳩はじっと押し黙っていて、それでいて
鳴き声をあげたいかのようだ——
そんなに物静かで
そんなに敬虔で
そうして、何かを待っているかのよう
に——
シェマヤ エステル！
アハブ 君の妻だろう！
彼女を追いやったりするな、

私の腕の中へ追いやったりするな
彼女を私に委ねたりするな……私は彼女
を愛している！
彼女が私を愛しているより、もっと強く
私は彼女を愛している……
彼女が君を愛しているのとちょうど同じ
ように私は彼女を愛している……
君の悲しみは彼女に対して喜びの下地と
なる、
彼女は君の悲しみにしがみつく
エヴァはエデンの園で死のリングにしが
みついたが
そのリングは彼女にとってワインのよう
だったのだ！
君の苦い悲しみが彼女には甘い味がす
る、彼女はそれを飲み干して、喜びに浸
るのだ！
私の溢れるような喜びは彼女にとっては
荒れた砂漠、
すっかり水の干上がった砂漠なのだ。
私には理解できないことだが、
君にも理解できない、そうだ……これは
秘密だ！
彼女自身だって——
彼女だってそれを自分で説明できない……
おお、神よ！
私はあなたの星々からさまざまな秘密を
掴み取ります——
あなたの深い海のその深さを測ります、
しかし、不機嫌な私の友人の心情や、
私が愛している女性の心を測ったりはし
ません……
私は自分の喜びについて自分では説明す

ることができないのです！
どうか彼女を私の腕の中に押しやらない
でください——
私は彼女を愛しています！
そして、彼女を愛しているがゆえに——
私は彼女を拒むのです……
私は彼女なしでも豊かですが、彼女は私
と一緒にでは——貧しいのです……
だからといって、
私は意気消沈したりしません
私の愛は大きいのです——
私の喜びは彼女を越えて成長してゆく
のです——

聞け、ユダヤ人たちよ、聞け
私はユダを愛していた、まさしく彼と同
じように愛していた、
ひよっとすれば、彼よりもずっと愛して
いた……
けれども私は、この地上の国に対する愛
を拒んだ、
ちょうどひとりの女に対する愛を拒むよ
うに！
奴らが私からシオンを奪ったとしても——
バビロンがここにある！
そして、もしも——ああ、時間がないう
えに、
バビロンが私に対して破壊されるなら、
ユーフラテス河があるだろう！ メディ
ア^{※5}があるだろう！
世界全体があるだろう！
聞け、よく聞け、
私に触れたのだ、神の手が私に触れたのだ、

神は私にこう言われた、
私はお前たちの国、小さな国を破壊した、
そして、大きな世界をお前たちに与える！
さあ、私の明るい喜びをもたらすのだ、
地上の至るところに！
遠い砂漠の地に、いくつもの海を越えて、
あらゆる田舎町に、あらゆる住居に——
喜びを！
それは正義ではない——もしも喜びがお
前たちの母でないなら！
お前たちの行為も言葉も愚かである——
それらが隅々まで喜びに満たされていない
なら……
歌はどうだ？ 歌とは何だ？
空しい響きだ——
もしもそれがお前たちの喜びによってす
っかり浸透されているのでなければ。
あの蛇は
楽しみを隠して
もったいぶった敬虔な顔つきで
女に真実のすべてを語らなかつたのだ、
蛇はこう言った、
「智恵の木！
それはお前たちを神のようにする！」
それに対して私はこう言う、
「喜び！ それはお前たちを
神と同等に、神と同等にする」……と
私の話を聞け、
喜びこそは土台だ！
喜びは、あらゆる秘密を説明し、
覆いを剥ぎ、答えを与え、
お前たちを神に似たものとする
天には神がいて、地上にはお前たちがいる！

やってみろ！ 繁榮して、成功を収めろ、
神のように！
聞け、聞け——
お前たち、私の民の子どもたちよ！
誰が知っているだろう、
今後シオンが再建されるかどうか
など……

追放者たち（左右で、口々に言葉を発して口論する）

アハブ お前たちはシオンからやって来た！
お前たちはともに救い出されたのだ、
預言者たちの正しい言葉によって、
ホセア、アモス、イザヤたちによって——
あらゆる場所で
喜びについての
この神聖な言葉
新しい言葉を
聞き取れ！
お前たちすべてに——おお、信心深き者
たちよ、私を信じよ
お前たちにも他の民族にも与えられるのだ
永遠の
生命が……

シェマヤ ユダヤ人たちよ、信じるな
信じるんじゃない！ そんな喜びなどを
お前たちの苦しみが
喜びに変わったりはしない……
時代は変わる、
どんどん変わる
そして時代とともに——我々の気分も変
わるのだ
以前はこちよかったが、いまは辛

い……
以前は具合がよかったが——
いまはよくない、
かつて我々は楽しかったが、いまで
は——おお、恐怖だ！
いまでは我々は奴隷で、
我々の苦しみにはまるで際限がない……
聞け、聞け、神は、主はこう言われる、
もしも喜びが真実であるならば、悲しみ
もまた真実である！
「何のために？」を抜きにした喜びがな
いように、
「それゆえに」を抜きにした悲しみも存
在しない（アハブを指差して）
彼は偽りの預言者であり、彼の言葉は偽
りの言葉だ！
そうだ！ そうだ！
彼の喜びは喜びなんかじゃない！
喜びはかつては我々のなかでもっと輝い
ていた……
喜びの何たるかを、我々はずっとよく知
っている——
我々の痛み、我々の悲しみがそのことを
証言している！

アハブ（厳粛に）
お前たちは遠くから私を指して——
至るところでもう
偽りの預言者と呼び、
自分たちを真実の預言者と呼んでいた、
お前たちは私のこと、私に関わることな
ら何でも偽りと呼んでいたが、
誰の預言が真実で
誰の預言が嘘であるか

それをお前たちは証明することはなかった……

預言は我々すべてにおいて、両方の意味を持っている、

預言は嘘である

預言は真実でもあれば、嘘でもある

我々においては高められたものでもあり、お前たちにおいては——墮落したものである！

お前たちが持っているのはきょうという日の真実——

私の持っているのは、のちの永遠の日の真実である、

お前たちの現在の嘆きのなかで、

お前たちの悲しみに満ちた呻きのなかで、お前たちの真実はちっぽけなものだ！

永遠の生命の木は

汚い泡のように重くのしかかるお前たちの嘆きを

腐った葉っぱのように振るい落とす、

それに対して私の真実は

これから訪れる真実なのだ！

さあ、それを受け取れ！

それを受け取った者は幸いである

聞け！ 聞け——聞く耳を持つ者は聞け！

大いなる真実に耳を傾けよ、

この預言者の言葉を聞け、

シオンの崩壊とともに始まるのではない、

また、バビロニアの没落とともに——

終わるのでもない……

お前たちは

いつでも喜びのゆえにすでに神聖化されているのだ！

喜びはお前たちの本質的要素であって、お前たちのこの地上の取り分、分け前なのだ！

おお、大いなる不幸を癒せ

地上は不幸を癒してくれる

高い空は不幸を癒してくれる、

空だって不幸を癒してくれるのだ……

それはお前立ちの喜びだ、喜びはお前たちの許婚なのだ。

シェマヤ（叫び声をあげる）

カルデア人だ！

バルアダン（右手から急いでやって来て、舞台の前景で立ち止まる）

2人のバビロニア人（彼のあとからやって来て、その背後の右と左に立つ）

バルアダン（高い障害物のうえにいる一団のユダヤ人を見回し、自分の向かい側にいる家族に視線を投げる）

おお、大勢だ！ 大勢だ！ 彼らはここに大勢いるぞ！

あんなに動きまわって、目覚めて、

騒々しく——がなり立っている、

悲しみながら

すべての壁を

すべての場所を

包囲している——

サルエツェル！

サルエツェル（やって来て、自分より上位の者にあいさつし、直立して立つ）

バルアダン この門が閉じられてもうどれぐらいになる？

サルエツェル 間もなくもう1週間になります。

バルアダン 1週間！ 1週間か——
よし、そのとおりだな。

サルエツェル 門を開けましょうか？
私に命令されるなら、そうしましょう——
いや、そうしなければなりません！
参りましょう（鍵をガチャガチャいわせる）
そのつど行く必要はありません、
この場で一声発すれば——
門はひとりでに開くように開かれます。
私に命令されるなら、そうします、
私の職務ですから！

バルアダン そうだ、そのとおり、その
とおりだ！

だが、まだ開けるな——
まだきっかり1週間たつたわけではない、
まだあたりは明るい、
濃い闇が訪れて夜になるまで待つ
のだ——

門を開けてはならないのだ、
あたりが明るいかがりは！

サルエツェル そう命令されています！

バルアダン あの「クフ」の門！
あいつらはかなりの数で取り囲んでい
る、あの「クフ」の門を……
それでいて、ここには誰もいないかのよ
うだ！

冷たく、死に絶えた、大きな死体、
ただ一つの死体があるかのようだ！
ユダヤ人！ 彼らは俺のうちに
嫌悪を呼び起こす、
そして、好奇心をも——
もしも彼らが騒ぎ立てるなら——神が憐
れむ！

おお、それはとても不気味な騒ぎとな
る……

そして、もしも彼らが沈黙しているな
ら——聞け、聞いてみる

彼らは不気味に沈黙している

おお、不気味な沈黙者たちだ！

お前たちは「クフ」の門を取り囲んでい
る——

それなのに、ここには誰ひとりいないか
のようだ——

お前たちはどうして沈黙しているのか、
ユダヤ人たちよ、叫べ！

腰をつなぎあって、
一つの集団になって

踊りに行け、

踊れ！

輪になって踊れ！

沈黙して苦しんでいるお前たちが俺は嫌
いだ、

お前たちの声を押し殺した涙が俺は嫌
いだ……

喜んでいるお前たち、——

俺はそれがもっと嫌いだ！

そんなお前たちに対する俺の嘲りはずつ
と大きい！

打ち据えられたお前たちユダヤ人、
意識も混濁し、

奴隷と化されたお前たちユダヤ人が
喜んでいる！

笑え、さあ、

どっと笑え、

お前たちへのまったき憎悪を俺の中に呼
び起こせ、

踊れ！

踊れ！（アブタリアとシェブナに気づく）

あいつらは誰だ、

堅琴を持ったあのふたりの男は？（彼らの方に駆け寄る）

歌びとだ——

歌え！

俺はお前たちを見つけた、見つけたぞ！

さあ、弦をかき鳴らして、

高らかに響かせるのだ、

まるで木屑のように捻じ曲がり、干からびたお前たちの指——

それでお前たちはもっとも美しい調べを引き出す……

俺はお前たちの歌が誉めそやされるのを聞いたことがある、

お前たちには、もっとも不潔なものと英雄の魂

そしてもっとも清純な声がそなわっている——

まるで水の泉が

苔で厚く蔽われた暗い岩の

深い胎から

澄明に湧き出るように——

お前たちの歌もそのように湧き出ると——

さあ、歌え！

アハブ 兄弟たちよ、歌え！

お前たちを悲しく抱きとめている死の女神を追い払え、

悲しみを追い払え！

そして喜び、真実の喜び、長い間封じ込められていた喜びが

お前たちの胸から^{ほとぼし}迸り出るようにするのだ
喜びが、甘美な喜びが——

そして、喜びが世界全体を覆うようにしよう！

さあ、お前たちの声をここで全員、高らかに発せよ！

バルアダン お前も彼らに命令するのだな——

よし！ よし！

さあ、彼らに、ユダヤ人たちに、歌うように命じよ……

さあ、シオンの歌を歌え！（剣を引き抜く）

歌え、捕囚の奴隷たちよ……

歌を——

さもなくば、血だ！

歌え、踏みつけられた者たちよ、

重い頸木を課せられた者たちよ——

シオンの歌を！

それが誉めそやされるのを俺は耳にした、俺は奨められたのだ、

「あれは聞いておくべきだ！

ここでシオンの歌を聞かぬ手はない！」と

そして、それが本当でないなら——

不運なんてものじゃない、

いっそうその方がよいのだ！

歌え、ユダヤ人たちよ

シオンの歌を——

歌うなんてものじゃなくて、叫ばれるものかもしれないが……

歌の残り滓のようなもので、歌などそこにはないのかもしれないが——

それならいっそうその方がよい！

お前たちが醜く歌えば歌うほど——俺は

いっそう気に入るだろう、
不快であればあるだけ——いっそう俺は
満足するのだ——
歌え、ユダヤ人たちよ！
俺はもう剣を引き抜いているぞ！
アハブ 歌え、歌え！
彼は憎悪からお前たちに歌を望んでいる
が、
私は愛から望んでいるのだ——
あのちっぽけな憎悪——その瞳を覗いて
みる
すぐに——
耐え切れずに、視線をそらせる……
そして、兄弟たちよ、飛び越すな、お
お、飛び越すな
私の大きな愛の山を、
私の愛は強いのだ……
歌え、兄弟たちよ、歌え
高らかに声を発せよ！
バルアダン お前も彼らに望んでいる——
よし！ よし！
（アブタリアとシェブナに向かって）
さあ、始めろ、お前たちは豎琴を持って
いる！
アブタリア（相手の剣を見て）
あなたの剣は鋭いのか？
バルアダン（嬉しそうに剣を空中で振り
回し）
エイ！ エイ！
ほら、相変わらずだ！
この剣は斬るのではない、火傷を負わせ
るのだ、
するとおしまい（相手に剣を見せる）

さあ、見て、驚くがいい！
あらゆるユダヤ人の
背中から
頭を
切り落としたあとで——
もう一度、磨かせたのだ——
ほら、見てみる！（彼は相手に剣を渡す）
アブタリア エイ！ エイ！（すばやく
自分の右手の指を切り落とす）
シェブナ 僕のも！ 僕のも！（こちら
も剣の下で手の平をひらひらさせる……）
バルアダン（しばらく驚いて）
おい！ おい！
そんなことに俺の剣を使いやがって、
俺の剣がそれで必要だったのだな？
アブタリア（剣を相手に戻して）
すごい切れ味だ！
バルアダン（剣を相手の頭上に掲げて）
お前！ ここでお前は俺の先回りをして
いるようだ！
立派な行いで俺の怒りを呼び起こしてく
れたな、
俺が自分ですぐにする仕事を
省くなんてことは、
けっしてしてはならないぞ、そうだ……
俺がするようにやってくれたもんだ——
実に落ち着き払って……（剣を掲げる）
お前だ！ お前だ！（剣を下ろす）
おお、そうではない、私はお前を罰する
つもりはない、
お前も、あいつも——
俺は激しく怒っているが、そのように怒
りながら——

俺はお前たちにも、俺の王にも、告げねばならない、

「彼らは英雄だ！」と

どうしてお前たちはあんなことをしたのだ？

どうしてお前たちは自分の指を切り落としたのだ、

突然、ふたりともあんなことを？

アブタリア 歌わなくてもいいように、歌うことができないようにするためだ！

弦をかき鳴らす指と一緒に――

あなたの剣は私の声をも切り落としたのだ、

私の歌を切り刻んだのだ……

バルアダン ユダヤ人たちよ、お前たちは、歌うことなしに、歌ったのだ！（右手に叫ぶ）

おい！

サルエツェル（やって来る）

バルアダン サルエツェル、集めろ、こいつらの指を集めろ、汚れたのでも、疥癬を病んだのでも

指を集めるんだ、

そしてそれを酸に漬けておくのだ！

それはただの指ではない、英雄の歌の調べなのだ……

俺はユダヤ人から

あんな歌を予期していなかった……

俺は騙されていたんだ！

俺はたくさんのことを聞かされていた、お前たちは弱い人間だ、とか……

それは真実ではない、そうだ！

おお、お前たちはとても強い！

お前たちは石でできている！

当然のことだが、それはお前たちに対す

る俺の憎しみとは無関係だ……

俺はお前たちが嫌いだ、弱いお前たちが嫌いだが、

強いお前たちを俺はもっと嫌いなのだ！

そんなふうに俺を見つめるな……

俺はお前たちが嫌いだ、そうだ、ここで

のように貧しいお前たちが嫌いだし

お前たちが金持ちであればもっと嫌いだ――

苦しむお前たちが嫌いだし、汚いお前たちが嫌いだ――

だが、物心ついてからというもの、

金持ちのお前たちはもっと嫌いだ！

びくびくしているお前たちが嫌いだが、

勇敢なお前たちはもっと嫌いだ！

醜いお前たちが嫌いで――

お前たちが美しい場合はもっとずっと嫌いだ！

粗野で荒々しいお前たちが嫌いだ、

しかめっ面をしたお前たちが嫌いだ――

故郷を破壊され、文字もろくに書けないお前たちが嫌いだ……

けれども俺は、教養あるお前たちが

名の知られたお前たちが、もっと嫌いだ、

お前たちの偉大なる精神がもっと嫌いだ

それが輝きを発している場合には――

俺はお前たちが嫌いだ！

不道徳なお前たちが嫌いだし、徳に満ちたお前たちはもっと嫌いだ、

お前たちの年寄りが嫌いだし、若い奴は

もっと嫌いだ――

おお、よいことだ、二重によいことだ

俺が母親の胎にいる幼子の血を

容赦なく流させたのは——
俺は彼らを殺戮したのだ！……
アハブ 歌え！ 高らかに歌え！（左右
の追放者の方を向いて）
歌え、歌え、私の民よ、お前がただいる
場所で、
ただお前が行きかう場所で、
そして、これからもあるだろう場所で！
悪党たちの一団がお前を襲い、
お前の妻を殺し、
妻の胎のなかの子どもを殺戮するときには、
お前の住居のなかで、お前の怒りの中で
踏みとどまり、
奴らと同じような殺戮は行なうな、嘆く
な、ぶつぶつ言うな、
世界を見まわせ——
太陽のように、世界を輝きで満たすのだ！
歌え、歌え、私の民よ、お前がただいる
場所で——
世界に挨拶をせよ、「世界が快く迎えら
れますように！」と
お前たち、すべての人間よ、お前たちが
いるその場所で！（アブタルヤとシェブ
ナに向かって）
歌え、歌え、
歌え、切断された手で、
切り落とされた指で、
歌え、世界への愛を——
世界によって隠されている空を、世界に
示すのだ、
閉ざされている世界の目を、大きく見開
かせるのだ——
おお、世界よ、目覚めよ！ 目覚めよ！

愛を歌え！
愛の虹で分かりやすく答えてくれ、
あるいは憎悪の大雨で、
無償の憎しみで！
悪意のある冗談には、
にっこりと微笑んでくれ。
悪人が世界を水浸しにして、お前たちを
冷たくびしょ濡れにするときには
背筋をしっかりと伸ばして、遠くを見ろ、
故郷を思ってお前たちの敵を見つめ
贈りものをするのだ……
豊かな者は——贈りものをするものだ！
強い者は——赦すものだ！
お前たちは赦すべきだ！
悲しみに包まれた状態から抜け出して、
お前たちの心が喜んで赦すように！
そして、彼らが死でもってお前たちを迎
えるなら——
お前たちはすべてのひとを生でもって迎
えるのだ！（莊重に）
聞け、聞け、聞く耳を持つ者は聞け！
聞け、大いなる真実を、
聞け、この預言者の言葉を、
シオンの崩壊とともに始まるのではない、
また、バビロンの没落とともに——
終わるのでもない……
バルアダン お前！ お前！ お前は誰だ？
お前は穏やかな言葉で、
はじめは俺を助けてくれる——
そして、突然、呪詛の言葉を始める——
お前！
お前はまるで
大きな壺をミルクで一杯にする雌牛のよ

うだ、
ひとりで壺に注いでいる……（剣を抜く）
お前を俺が殺す前に、
さあ、俺に言え、
お前は誰だ？ いや、お前は俺に言わないだろう、
俺自身がお前の正体を知っている——
お前はバビロニアの敵だ！
アハブ それは嘘だ！
バルアダン 黙れ！ 黙れ！
バビロンではみんなお前のことを甘やかしてきたが——
お前はバビロニアの敵だ——
ユダヤ人だ！
アハブ 私はユダヤ人で
あなたがたの友人だ、
あらゆる人間の友人だ、
健全な喜びに満ちて、
息をし、暮らしているすべての人間の友人だ……
ただし、私のバビロニアは没落してゆくが——
私は日陰の国でああなたがたに従うつもりはない。
バルアダン 黙れ！
アハブ 私は黙りはしない——
太陽に、青空に姿を見せないよう命じるがいい！
青空に輝く太陽に、「高く上るな」と命じるがいい、
信じている者の心に、「信じるな！」
愛している者に、「愛するな！」
誇り高い遠くの星々に、「ぼんやりかす

め！」
そして預言者には、「語るな！」と
そうして、永遠の喜びの道を塞ぐがいい……
あなたは私に黙るように命じる、喜びに満ちたユダヤ人に！
バルアダン 呪われた男め、お前は待ち受けているのだな、陽気にバビロニアの没落を！
お前はそれを待ち受けているのだ！
アハブ 神よ、お守りください！
たとえ太陽が没落しよう——
私は嘆きはしないのだ……
どんな不幸をつうじても私の心の中で喜びは
どんどん大きくなるのだ、
私はシオンの方がいっそう好きだが——
バルアダン 黙れ、黙れ、お前はバビロニアの市民だ——
俺は勝手に裁判抜きで
お前を殺すことはできない——
俺はお前を鎖に繋ぎとめておくだけにする——
サルエツェル！
ひとりの鉄の鎖を外せ、
それをこっちの奴の足元に積み上げる……（彼はアハブを指差す）
その年寄りの青白い足から鎖を外せ——
こいつに合うだろう、こいつにぴったりだろう……
鎖は全部同じ寸法だからな！
サルエツェル（老人コラヤのもとにやって来て、跪き、その足から鎖を外し始める）

コラヤ (驚いて、その場で身を起こす)
何だ、どうした？

バルアダン あの年寄り——ずいぶん動揺しているようだな！

コラヤ (アハブを恐怖の目で見つめながら、大声で叫ぶ)
エレミヤの手紙だ！

ハダサ (アハブに倒れ掛かる)

アハブ コラヤ！ ハダサ、お前も——心配は要らない、心配しないでくれ、あのことに對する裁きは私が負う、彼は、エレミヤは、私のことを預言したそれに誤りはなかった——ネブガドレツアルは私を薪の上で焼く……

ただし

彼、エレミヤがそれを口にする前から、私はそのことを知っていた……

いまや、私の同志も、同志でない者たちも——君たちは全員朗らかだ！

きみたち、私の同志たちよ——私の喜びを君たちに捧げる、

そして同志でない者たちよ、私のことは気にしないでくれ。

サルエツェル (コラヤの鎖をもってアハブの足元にやって来る)

シェマヤ (バルアダンに)
息子を父親の鎖につなぐなどやめてください……

バルアダン 父親の鎖！——(笑う)

よい考えだったと思うのだが……

あの老人を解放して
息子を拘留するのだから！

シェマヤ おお、あなたこそ残酷な人だ、あなたは解放を処罰の手段とする！
「子山羊を母親のミルクの中で煮てはいけない！」

バルアダン お前のご立派な奴だな！
俺は立派でなくて満足している——俺は立派でなくていいし、ユダヤ人に似たりしたくないんだ！
お前はあいつの兄弟か？

シェマヤ (頭をうな垂れて)
そうだ。

バルアダン よし！(サルエツェルに)
急いでこいつの足から鎖を外せ——そして、この敵の上にそいつを重ねて、分からせてやろうじゃないか！

父親じゃなくて——

兄弟が別の兄弟の自由を奪い取るかどうかを。

シャマヤ 私の足から鎖を外すな——
私は逃亡するぞ！

私はすでに1度バビロンから逃亡したことがあるのだ……

私はまたしても逃亡してみせるだろう。

バルアダン お前はよくしゃべるもんだなあ！

できればお前に教えてやりたいもんだ
そんなに俺としゃべっちゃ駄目だとな、さらにお前は傷つく羽目になるかもしれないから……

まさしくお前たちふたりの兄弟を俺が鎖でつなぐこと

それがお前の望みなのか？

シェマヤ 私たちは兄弟ではない——私

たちはユダヤ人同士なのだ。

バルアダン ユダヤ人同士！

そいつはお笑い草だ……

俺の心配はただ一つだ、

俺はユダヤ人をよく思い始めている……

ユダヤ人……すべてのユダヤ人は兄弟なのだ！

もしも俺がふたりのうちひとりのユダヤ人を殴るなら――

殴られていないユダヤ人の方が殴られたユダヤ人よりももっと苦しむのだ！

我々のネブガドレツアルは

お前たちの王の両眼をまだ突いてはいなかった、

まだそこまでしてはいなかった！

彼、彼自身――

ゼデキヤ自らは、自分の子どもたちすべての姿を眼にしていた――

我々が子どもたちを家畜の群のように殺戮するのを見ていた、

我々が押し入り、

両目を掻き出すのを見ていた……

お前たちは互いに愛し合っている！

お前たちは互いに結びつき、繋がり合っている

一つの体の

四肢のように――

叫べ！ こいつらのために叫び声を発することができる者は――叫べ！

ユダヤ人たちよ！ すべてのユダヤ人は兄弟である！（シェマヤに）

もう俺にまずいことを言うなよ……

もう俺の指図を止める言葉も吐くんじゃ

ないぞ！

サルエツェル、こいつを解放しろ、無理矢理にでもこいつを解放しろ――

そして、そいつの鎖でこいつを縛れ！

（アハブに）

サルエツェル（しゃがんで、シェマヤの足を抱える）

シェマヤ おお、止めろ、私の鎖を解くな！

バルアダン（興奮して）

私の！ お前の！ 彼の！――

あらゆる要求！ 不平不満！（サルエツェルに）

早くこいつの鎖を外せ、質問はなしだ！

シェマヤ（叫ぶ）

彼は私の兄弟ではない、私の敵対者だ！

サルエツェル（シェマヤの足から外した鎖を持ってアハブのもとへ行く）

シェマヤ 彼は私の大いなる敵対者だ！

バルアダン じゃ、復讐されるってわけか！

シェマヤ もうされているんじゃないかな――

私たちはそれをバビロンで目にすることだろう！

彼はお前たちの預言者、

お前たちの友人だ……（叫ぶ）

聞け、聞け！

彼ではない！ 彼ではない！

あなたがたを憎んでいるのは私だ！

憎んでいるのは私！ 私だ！

不器用で弱い者たちの

愛と憎しみは

強い冗談に

結実する……（アハブを指差す）

彼の愛とあなたの憎しみ——

それらは、地上の強者たちにとっては
同じ価値を有しているのだ……

バルアダン 終わりだ、そこまでだ！

俺はあいつを連れてゆく、お前は——こ
こに残れ！

あいつには最後の鐘がもう鳴ったのだ！

そして、お前は——お前は生きる……

俺には分かる、

お前にとっては生きることが大いなる刑
罰なのだ——

じゃあ、元気でな！（アハブを指差す）

さあ、彼を——あいつを連れてゆけ！

ハダサ（両手をもみしだいて）

ああ、何としたことでしょう！（バルア
ダンの足元に倒れる）

その人を連れてゆかないで！

バルアダン この女を連れてゆけ、髪の
毛を引っ張って、

投げ飛ばしてやれ！（ハダサに）

失せろ！ 失せろ！

ハダサ おお、何としたこと！

サルエツェル 俺はどうすればいい？

女……悲しげな女だ……

バルアダン（いぶかしげに相手を見て）

サルエツェル、どうした？ 俺にはお前
がおかしくなったように見える

こんな連中のあいだにいて、

お前は感情にもろい人間だ、

瞳のなかに涙を見る、するとお前は動転
してしまうのだ！

サルエツェル 俺はどうすればいい？

女……悲しげな女だ……

バルアダン（ハダサに）

お前は誰だ？

ハダサ 私はこのひとの恋人です——

（シェマヤを指差して）

そして、こちら——私の夫——は、彼に
嫉妬しているのです！

彼は、華やかなバビロンから荒れ果てた
バビロンを、

バビロンの人々から——人間の影を作り
出しました……

それでどうなったでしょう？

いったい、この壁の背後で、悲しみが禁
じられているでしょうか、

喜びが禁じられているでしょうか？

バルアダン お前たちには喜びが禁じら
れ、カルデア人には悲しみが禁じられて
いる

（シェマヤを指差して）

あいつの言うとおりで！

ハダサ 聞いてください！ 聞いてくだ
さい！

シェマヤは誰の教えを実現したのでしょ
うか！

彼は、ネブガドレツアルのために、悲し
い曲を奏でてきたのです！

彼らふたりは、お互いの求めているもの
において、

一致していたのです。

両者は手を携えて、

手に手を取って歩んできたのです……

この人はネブガドレツアルによって派遣
されて——（シェマヤを指差す）

バビロンで私たちから幸福を奪ったのです！
 彼は、ネブガドレツアルのために、私
 たちの何年もの歳月を、黒く塗りつぶした
 のです、
 この男の心臓は石でできているに違いあ
 りません！
 私の夫！ 私の夫！——
 私は、明るい日にはいつも、
 空に向かって開かれた、私たちのテント
 の窓を、
 覆い隠していました——
 世界が私たちのことを忘れてるように、
 私たちのことを思い出すことがないよう
 に——
 明るい世界！（シエマヤに）
 あのひとはもっと明るい人でした……
 あのひとは内側を明るく照らしていました
 ずっとずっと明るく！
 「それでも、世界はすべての人にとって
 美しい」と——
 そしてあのひとも——私にとって、私ひ
 とりにとって美しかった……
 私はあのひとのためにそこを立ち去りま
 した
 憧れと不安とをもって——
 あのひとはそれを知りませんでした、
 耳にもしませんでした——
 私に背を向けていました、
 顔をそむけていました……
 あのひとは、壁のうえに這い上り、
 両手を
 もみしだき
 嘆き、叫んでいたのです、

「おお、シオン！ シオン！ ああ、エ
 ルサレム！」と
 そして夜には——
 ああ、バビロンの夜！ 華やかな夜！
 おお、ニムロド^{*6}の地の、シナル^{*7}の谷の夜！
 聞いてください！ 聞いてください！
 私は夜ごと、
 衰弱した体で
 星を見上げていました……
 星たちは、泥棒のように大急ぎで瞬き、
 一所懸命に輝いていました
 それは私のものでした、私のものでし
 た……
 するとあのひとは——「星を見上げたり
 するんじゃない、危うい星を
 見上げたりするんじゃない」
 私は涙を流し、
 愛と痛みのなかであのひとを抱きしめま
 した——
 私はあなたと一緒にいたい！ 一緒にい
 たい！
 私はこのままあなたと一緒にいたい——
 変化なんか望まない。
 あなたには星が見える？
 太陽として生まれた星々が見える？——
 星々はそうして、愛と恐怖のなかを、永
 遠に動き続けています、
 激しく燃えている愛、気づかれもしない
 愛の姿で……
 星々は——
 星々は夜には
 よく見えます、じっくりと観察すること
 ができます、

私にきちんと姿を見せてくれます……
星々は青空のなかに身を潜めていて、
私にこっそり挨拶を送ってくれます——
星々が挨拶をくれて、そして私は——私
はあのひとの前で跪き、
疲れて倒れ伏していました、
愛の痛みのなかを荒々しく転げ落ち、
埃のなかを転げまわっていました、
高めてください、私を高めてください、
高く！ 高く！
私を絨毯の上に引き上げ
私の上に覆いかぶさり、私を殺し、元氣
にさせてください！
すると、私の愛は——静かに、静かにな
りました！
するとあのひとは言いました、終わった
のだ！ 終わったのだ！
バビロンにおける我々のすべての喜びは
終わったのだ、と——
おお、大いなる不幸！
そしてあのひとは私から離れてゆき、私
のことは見向きもしません、
まるで毒の撒かれた井戸のように……
彼はさまざまな国々で戦い、支配してい
ます[——]
自分の服にたくさんの裂け目を作りながら、
クリエ※8を行いながら、
こう嘆き、叫んでいます。
「おお、シオン！ シオン！
ああ、ああ、エルサレム！」
私は夫のもとを離れました——（アハブ
を指差す）

そして、行きました、このひとのもとへ、
本物の預言者のもとへ！
このひとはこう言いました、バビロンに
は喜びがある！
そして、愛もある！
さらには、美も！
このひとは私に見ることを教えてくれました、
バビロンの深い空、高い空を！
バビロンの諸民族からなる、
喜びに満ちた群集のもとにも連れ出して
くれました、
そうして、もう衰えかけていた感情を、
私のなかで掻き立ててくれました……
このひとは教えてくれました、恐れない
ことを、
大胆にもユーフラテスやチグリスに飛び
込み、
その川の水嵩を澄まし高めることを——
水のなかで浮かび、川上で顔を出し、楽
しんでいるかのようにしていることを……
そう、楽しんでいるかのように（怒った
ようにしてシェマヤに）
バビロン！ それにしても何というバビ
ロンでしょう！
バビロンには愛があります！
そして美があります、あなたがたが行き
交っているところ、
あなたがたがいるところには——
（アハブにしがみつく）
このひとを焼いてはなりません！
このひとを焼かないでください、
焼くなら、私の恋人ではなく……私の夫
を焼いてください！

バルアダン 十分だ！ もう十分だ！
 俺はそんなこと聞きたくない、
 実際、お前たちのもといれば俺は賢く
 なるかもしれん、
 お前たちには、力もあれば知恵もある—
 だがな、俺はお前たちのところで賢くな
 んかなりたかないんだ！
 お前たちを前にしてここで自慢するのも
 馬鹿なことだが—
 俺はこれからお前たちに対して自慢す
 るさ、
 お前たちの血の川で水浴びすることを、
 母親の胎の中の赤ん坊を殺すことを—
 この俺さま、バルアダンが知っているこ
 とを、お前たちももう知っているか？
 生まれる前の赤ん坊だってもうその血は
 熱いんだぞ、
 その血はもう熱くて、赤いんだぞ……
 （アハブに）
 来い……お前の運命はネブガドレツアル
 様がすぐにひとりで決めてくださる。
ハダサ（アハブに）
 ああ、私も一緒に連れて行って！
アハブ 一緒に来い！ 来たい者は一緒
 に来い！
 ユダヤ人でありさえすれば—
 一緒に来い！
 よく見ろ、よく耳を傾けろ、
 私は生涯のこのわずかの時間、
 私が君たちに歌ってきたことを、
 炎の舌で歌うだろう—
 そして、遠くから君たちすべてに一つの
 輝きを投げかけるだろう、

君たちに一つの輝きを作り出すだろう！
 私は、自分の最後の瞬間まで、ずっと、
 ずっと、
 永遠の喜びの糸を、
 織り、紡ぎ続けるだろう、
 その喜びは、すべての者にとって尊いも
 のであらねばならない—
 私は君たちに告知するだろう、その喜びを、
 私はその喜びを嬉々として讃えるだろう、
 苦しみの中から、炎の中から！
 （ハダサと従者に付き添われて、彼らの
 あとにはバルアダンと彼のふたりの従
 者—広い道へ、右手に退場）
シェマヤ（彼らの方へ引き寄せられ、連れ
 去られるかのようにして、舞台の中央で、
 道の方へ片手を差し伸べて立っている）
アビガイル（心配気に、彼を覗き込んで）
 あなたは誰に向かって両手を差し伸べて
 いたのですか？
シェマヤ 彼らふたりに—
アビガイル ふたりに……
シェマヤ 私は苦しい
 ふたりのことで、彼らふたりのことで—
 けれど、私には語るができない、口
 にすることができない……
 私は彼を愛している—
アビガイル あなたは愛している、ふた
 りを愛している……
 自分があふたりのどちらかであればと
 願います……
シェマヤ（彼女の頭の髪をさする）
 彼はいい人間だ……
アビガイル そして悪しきユダヤ人です。

シェマヤ そうではない、そんなことはない……

アビガイル 悪しきユダヤ人です！ そうでしょう……

彼も、彼の従者も！

彼らは世界全体を見るといって、私たちの民を見ようとしな……

そうでしょう！

シェマヤ 私は彼が哀れだ——

私は彼を愛している……

彼の喜びはあまりに悲しく、ぼんやりしている、

異邦人の喜びと同じく侘びしいものだ……

追放された異邦人に対する喜び、

追放された異邦人の持つ喜び、

彼の喜び——それは大きくて、温かいものであっても、

喜びではない、それ自体では喜びではない、

喜びでありながら、あんなにも孤独……

あの世界の持つ喜び——

それが投げかけているのは寒々とした喜びだ……

不幸な悲しみに沈んだ喜び、辱めを受けた喜び、

喜び——憂鬱な喜び、

不安と絶望から生まれ、

深い悲しみの中で育っていった喜びだ……

コラヤ (叫ぶ)

エレミヤの手紙！

彼の呪い！

アビガイル (背中からシェマヤの方に倒れ、顔は父の方を向いて)

ネブガドレツアルは彼を焼いたりはしま

せん、きっと！

コラヤ 彼はそうする！ きっとそうする！

シャマヤ (彼女を倒れないようにしながら) 泣くな、泣くんじゃない……

彼は君の兄かもしれないが——

私の死んだ息子かもしれない——

個々人の痛みを思い出してはならない、個々の犠牲者のことで嘆いてはならない！

アビガイル (意識を失くして、シェマヤの傍らの地面に倒れる)

シェマヤ アビガイル……おお！ どうした？ 大丈夫か？

よろめいて、倒れたのか？

横になれ、横になれ——そしてもう話すな、ひとこともしゃべるな、

大いなる痛みを抱えて横たわっている

そして一言も口にするな

お前の涙は誰のためのものだ……

シェブナ、お前は血まみれの両手をもみしだしている——

もみしだけ！ もみしだけ！

そして、ひとことも語るな……お前の悲しみを汚すな！

そうだ、君の兄弟ではなく——

ユダが

絶滅されるだろう！

アブタリア、おお、君、聖なる歌びとよ！

歌ってくれ、すべての世代とすべての世界のための歌を——

歌ってくれ、悲しみの歌、そして贖いあがなの歌を……

私たちの涙を呼び覚まし——少しでもこの痛みをやわらげてくれ。

アブタリア（血まみれの右手を掲げて）
指を切り落とした私がどうやって歌うことができる？

シェマヤ 君の豎琴をこちらへ！
今回は私が君に歌おう、
そして、君は、君は涙を流してくれ……

アブタリア（左手で豎琴を掴み、シェマヤに渡す）

シェマヤ（絶望的な旋律をかき鳴らす）

追放者たち おお、何としこと！

シェマヤ（再び弦をかき鳴らす、あたりは死んだような静けさに包まれる）

詩篇第137章

第1節

バビロンの河、その溢れる水のほとりで
私たちは座っていた、
私たちはみんな心を砕かれ
嘆きの声を発していた、
痛みの声を発していた——
かの地、シオンのことを思い出して。

第2節

私たちは豎琴をぶら下げたのだ
悲し気な、不安な柳の木に。

第3節

なぜなら、そこでは、兄弟たちよ、
私たちを捕えた者たちが、そこでは
私たちにもとめてきたからだ、
「歌を！」と
私たちを蹂躪する者たちが
私たちの苦しみのさなかに

こう要求したから、
「喜びを！」と
彼らが高らかにこう叫んだから、
「さあ、我々にシオンの歌を歌え！」と

第4節

どうして私たちに歌うことができる、
神の歌、主の歌を、異邦の地で？

第5節

エルサレムよ、もしも私がお前のことを
忘れるならば——
おお、正義の神よ、
私のことをお忘れください、
お忘れください、義なる方よ！

第6節

私の舌は私の上顎に張りついているがよい
そして、もうひとことも口にできないが
よい——
もしも私がお前のことを思い出さないの
なら——
〈もしも私が思い起こさないなら^{※9}〉
もしもエルサレムが私のすべての喜びの上に
置かれるのでないなら。

第7節

おお、神よ、彼らのことを、エドムの子ら^{※10}
のことを覚えていてください、
おお、覚えていてください、エルサレム
のあの日のことを！
エルサレムを彼らに贈られませんよう
に！ 彼らはこう言ったのです、「引き

裂け、最後の糸まで、
さあ、破壊し、打ち壊せ、
掘り起こせ、土台まで！」と

第8節

おお、バビロンという娘よ、呪われよ！
お前が私の天幕から何もかも略奪し尽したのなら、
お前、その正体のとりの女盗賊よ！
お前の償いをお前に支払わせる者は幸いである
お前が気前よく私たちすべてに果たしたのと同じことを
お前に仕返す者は幸いである……

第9節

幸いである
お前の幼な子たちを
捕え——
そのすべてを岩の石に叩きつける者は！
（彼は折り曲げた膝の上に身を屈めて、
豎琴を抱えて、アビガイルの隣で座ったままでいる。）

追放者たち おお、何としたこと、何としたこと……

（照明が変わる。だんだんと暗くなってゆく）

鐘の音 （四方八方から響きわたる）

サルエツェル：どうだ、お前たち、びっくりしただろう？ 俺だってびっくりしたさ——
夜の鐘だ！

夜の鐘の音だ——

あの音には俺だってドキッとする——
じぼあんじゃん！ じぼあんじゃん！^{*11}
お前たちの預言者の声よりもでかいほどだ！

ほら、開け、バビロンの門よ、開け！

さあ、開け、深き淵よ！

（彼は右手に姿を消す）

門（両側で広々と開け放たれ、全員の前に暗い深淵が露わになる）

追放者たち（震えるような動揺が彼らのあいだに起こり、胸の張り裂ける叫び声があがる）

おお、何としたこと、何としたこと！

エゼキエル（彼の声は左手のとても高いところから響く）

そのままにしておれ、私の民よ、そのまま、そのままだ！

（まるで鎖を解かれたかのような急ぎ足で彼は障害物を駆け下り、舞台の中央に立ち止まり、長いあいだあたりを見回している。頭を重く垂れて、かなりのあいだ沈黙している。それから頭を上げて、遠くを見つめる——）

エゼキエル書

第37章

第1節

私の上に神の手があった

神は私を

風に乗せて、不意に遠くへ連れてゆかれた
そして、私をそこへ下された、私ひとり
その谷の中へ——

そこは骨でいっぱいだった。

第2節

神は黙って私を連れまわられた
そのあたりをぐるぐると骨の前を——
私は見た、
その谷には
おびただしい数の骨があった——
そして、乾いていた、骨はひどく乾いていた。

第3節

そして、神は私に訊ねられた、人の子よ、言ってみろ、
これらの骨はまだ復活するのか？
私は答えた、神よ、あなたが知っておられます、あなたが！
あなたひとりか！

第4節

すると、神は私にこう言われた、行って、預言せよ、
ここの骨、すべての骨に、預言を伝えよ、
聞け、乾いた骨よ、もう役に立たなくなった骨よ——
神の言葉に耳を傾けよ！

第5節

おお、神は、主は、骨にこう言われた、
私が霊をいまお前たちに吹き込む、
私が、私自らが——
するとお前たちは生き返るだろう！

第6節

お前たちの上に血管を張り巡らし、

そこでお前たちの上に肉を育たせ、咲き誇らせよう、

お前たちすべてを皮膚が覆うようにしよう、
そしていまや霊をお前たちの中に与える——
するとお前たちは生き返る！
そして、お前たちは、ここのお前たちはすべて知ることになるだろう——
私が神であることを！

第7節

……そして、私は預言を告げた——
私に語られたとおりの明瞭な言葉を——
すると、私が預言しているあいだに
遠くから音が聞こえた——
そして、ざわざわという音が
谷に響きわたった——
すると、すべての骨が
互いに近づき、集まり合った
まるでひとりでにそうなるように——
一つ一つの骨が—— — —

第8節

そこで、私は目にした、
骨の上にはすでに血管が張り巡らされていた、
そして、肉が赤く育っていた——
その肉の上を皮膚が覆っていた
真っ白に——
しかし、まだ骨には霊がそなわってはいなかった！

第9節

すると、神が私にこう言われた、聞け！

行って、霊に対して預言せよ、霊に告げよ、
告げよ、告げよ、霊に、人の子よ、行って、
霊に告げよ——

神は、主は、こう言われた、
霊よ、世界の隅々から
やって来て、漂え、
そして、この殺戮された者たちに魂を吹き込め、
そうすれば、ここの者たちはすべて生き返るだろう！

第10節

そこで私は預言した、預言を行なった——
神が私に命じられたとおりに——
すると、霊が、命が、彼らの中に入って
行った、
彼らは、彼らすべてはすぐに甦り、
自分の足で立ち上がった、
とても大きな集団だった
ほんとうに！ ほんとうに！
世界のように大きな集団だった！

第11節

すると、神は私にこう言われた、人の子よ——
おお、これらの骨は——
私がお前にここで見せた
これらの骨は——
イスラエルの家である！
聞け、彼らは悲しげに語っている、
おお、何としたこと、おお——
我々の骨はここですっかり乾いてしまった、
我々の希望は潰え去った——
我々は殺戮されたのだ……

第12節

だから、彼らに預言を行なえ、だから彼らに告げよ
神は、主は、こう言われていると、
私はお前たちの墓を開き、
お前たち、私の民を、その墓からすぐに引き上げ、
そして、お前たちを無事に連れてゆく、
お前たちすべてをイスラエルの地へと——

第13節

すると、お前たちは知ることだろう
私が神であることを
神がお前たちの墓を開き、
お前たちの墓からお前たちを引き上げたことを、
かけがえのないお前たち、
おお、私の民よ！

第14節

さあ、私はお前たちに私の霊をいま与える、
するとお前たちは生き返る！
そして、私はお前たちを安らかに住まわせる
お前たちの地で、
するとお前たちは知ることだろう
私が神であることを、
神がお前たちに語ったのだということを……
お前たちに語りかけたのは私である、
これらのことを行なったのは私である、——
神はこう言われた！

(幕)

終わり

【訳注】

- ※1 古代シュメールの都市で、聖書ではアブラハムの故郷とされている。
- ※2 古代エジプトの王の呼称。
- ※3 アッシリア帝国の王の名前。
- ※4 聖書エステル記の王妃エステルを踏まえている。エステルへのヘブライ名が「ハダサ」。エステルはユダヤ民族の危機を救う王妃なので、ハダサにカツェネルソンが大きな意味を付与していたことがうかがえる。
- ※5 アジアのザグロス山脈の東に位置していた国。広大な面積に肥沃な土地を有していた。
- ※6 創世記でノアの子孫クシュの子で、「地上の最初の勇士」とされ、バベル、ウルク、アッカドといった町をもつ王国を支配した。
- ※7 前注のニムロドの王国があった地方で、バベルの塔もここに建てられた（創世記10章第10節、第11章第2節）。
- ※8 ユダヤ教で、親の死に際して衣服を引き裂く儀式。
- ※9 この1行はヘブライ語のまま引用されている。
- ※10 ヤコブの兄エサウの子孫がエドム人であり、捕囚時代にはエドム人がユダの南部に侵入した。
- ※11 訳語には萩原朔太郎の『定本 青猫』所収「時計」の音のオノマトペを借りている。

編集スタッフ

編集・制作：渡邊円香

本文デザイン・装丁：松村紗恵〈(株)プラメイク〉

協力：西道奎／中岡ひろみ／呉玲奈〈(株)プラメイク〉

ワタン / Homeland スタディーズ③

イツハク・カツェネルソンと「シオニズム」

～子ども向けのヘブライ語作品にそくして～

2023年3月21日発行 初版第1刷発行

編者 岡真理

発行所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学大学院 人間・環境学研究所

岡真理研究室気付

電話 075-753-6728

ISBN 978-4-908679-15-5

印刷／製本 (株)コームラ

出版協力 (株)ユニオン・エー

©Mari OKA, 2023 Printed in Japan

本書は、科学研究費基盤研究(A)「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文科学的・領域横断的研究」(20H00006,代表：岡真理)の成果の一部として、科研費で作成されました。